

松平文庫本「光源氏一部謄」翻刻（上）

今井，源衛

<https://doi.org/10.15017/2555022>

出版情報：文學研究. 62, pp.127-211, 1963-09-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



松平文庫本「光源氏一部譚」翻刻（上）

今井源衛

島原松平文庫の中に「光源氏一部譚」と題する十冊の本がある。各冊縦二五・五糎×横一七・九糎、袋綴。料紙は薄手楮紙、表紙は渋引褐色無地紙、左肩に短冊形の題簽を付し、本文と同筆にて、「光源氏一部譚第一」等と記す。全巻一筆。各巻末に「尚舍源忠房」（青）、「文庫」（朱）の文庫印があり、第十冊巻末には、

享徳貳年林鐘後十日 祐倫

此本書写千時天正十四年九月廿三日也

の奥書がある。書体その他より見て、末尾一行は本書書写者の識語と認められる。

本文は一面十行、一行本文二十〜二十二字。注は梗概本文の行間、あるいは段落の間にやや小さい文字で記すが、本文と同大の文字のばあいも多い。墨・朱による異本校合、ミセケチ、補入、濁点、ルビ、朱による句読点等が施されているが、すべて本文と同筆である。

内容は源氏物語の梗概及び簡単な注釈であるが、連歌師の手になるものとおぼしく、連歌の付合に関するものが多い。各巻の内容及び墨付枚数を示せば、左の通りである。

（冊序）	（内容）	（墨付）	（白紙）
第一冊	桐壺一夕顔	八五枚	一枚
二	若紫・葵	八一	一
三	櫛・須磨	六六	一
四	明石・絵合	七〇	ナシ
五	松風・乙女	六〇	ナシ
六	玉璽・楓柱	八四	一
七	梅之枝・若菜上下	五七	一
八	柏木・竹川	六二	一
九	橘姫・宿木	五四	ナシ
十	吾妻屋・夢浮橋	四七	ナシ
（計）		六六六	六

本書の内容あるいは作者「祐倫」については、後にあらためてくわしく考察を加えることとし、以下、全文を翻刻することにする。（三回に分載の予定）

凡 例

一、翻刻は原本に忠実を旨とし、仮名遣い・宛字・誤字・脱字

等すべてもと通りとした。

二、誤字・脱字の個所には、右傍に（ママ）と注記し、ミセケチの文字には左側にヒの印を付した。

三、細字の注文に於けるミセケチ、注記の類は、必要に応じて香取かとり↓かとり（右記「香取」）

さいくうのつみ↓さいくうの（ミセケチ）はつみ
のごとく記した。

四、ルビ・濁点は朱墨ともに活字に移したが、印刷の都合上その区別を注記しなかつた。

五、朱による句読点・特殊語彙に対する付点、／・＼・―の類はこれを省略した。

六、異体文字の多くは通行文字に改めた。

七、丁末には「印を付し、丁数とその表裏を下欄に1オ・2ウのごとく記した。

八、その他校訂者の私意による注記はすべて（ ）内に記した。

（本 文）

（第一冊）

光源氏物語一部譚第一（表紙外題）

第一 桐壺

第二 簀木

井空蟬 夕顔

1ウ

源氏一部之歌并序

光源氏の物語のおこりは村上の天皇の御むすめ大齋院おうさいるん

ときこえけるより一条の院のきさき上東門院の御かたへ御せう
そこあり春の日つれくへに侍りさるへき物かたり下し給らんと

申させ給けるに女院御せんの女房の内しきふといふ冬つぐの大屋
の五代のそん
ゑちせんの守

ため時
かむすをめしていかなるをかまいらすへきとおほせられあは
め

するに「式部申さくをちくぼ岩屋なとはお
けんし以せんのか
物かたりの名也あま 2オ

りめなれてめつらしけなくや侍らむあたらしくつくりいて、御
らんせさせ給はんこそかやうに申させ給へるしには侍らめ

と申せは女院さらはそこはからひてともかくもつくり出でん
やとおほせらる式ふ御いらへ申て御前をはたちぬれと心ひとつ

にはいかくおもひけんあふみの園いし山にさんろう」してこの
事をきせい申けりおりから十五夜の月水うみのおもてにうかび

てあきらかなるをみるに式部が心もすみやかになりて水のおもてに
けんしの事う

かひたるといふはいつはりかくのごとく天たい六十巻にへうして
也式部か心にうかみたる也台
近代

まきのかすを六十帖にさためまきことに名をかへてきんたいの
内にめつらしくもやさしからん事を此うちにつくりいれてすゑ

の世につたへはやとおもふ心うかへり第三わかむらさきの巻を
すく」れてしゆせうに作たれはとて其後は紫式部とめされけり

但つくりたる心はなりひらをかたともみえたり業平
阿保 親王
内親王

はあほうしんわうの御孫母は伊とうないしん王の宮にむまれて
そのしなたぐひなし又やまと事わざにたへなりしをまなかひて
ひかるけんしの大將と名付いだせりなりひらかの二条五条の二

人のきさきにしのひてかよひまいりしによそへて源氏に「うす

3ウ

雲のねうゐん二条のなしいのかみをあらはせり業平伊勢さいく

斎宮

うにちきりをむすひしよせて源氏六条のみやす所のむすめの

さいくうにくして伊勢へくるわかれをおしませたりこれのみ

ならずなさをかけ契をむすふおの／＼よせ事なるへし

高明

大臣 醍醐

或せつにはしの宮の左大臣たかあきらのおとゞはたいごの

御門の御子にて世一番のげんし也みめかたち人にすくれしいか

詩歌管

くわんげんにくらから」ざりしを光源氏の大將といへり此おと

4オ

ゞを紫式部が心にしめたてまつるにより紫の名によせてむらさ

太宰

帥

きの上をあらはせりかの高あきらださいのそつにうつしてつく

しへおもむきし事ありしを源氏須磨明石に三とせしつみたまふ

うれへとみせたりまことにおもふことなくなつたづらにかきい

だせる事にあらすといへり又ざりげなくて大やけわたくしにつ

4ウ

けて人の心をつけ大和もろ」こしをかねて物のなさをしらし

む凡五十四帖之内におとこ女のよきあしきふるまひをあらはし

三四代之間に君も臣も身をあはせぬる事をのせりしかあらはし

いかの道物によそへておしへ管けんのおもむき時につけてさと

らしめずといふ事なし詞は春の花の木々のこすゑににほひをの

こし心は秋の月の千里の外までもくまなるへし色をしりなさ

けをふくむ人のいつれかこ」れをもてあそはさらんたかきもみ

5オ

しかきも世にしたかふ人のたれか此事に心をよせさらんよく心

へてわれもよみ人にもほとこせはこの世後の世おろかならず石

山の観音の御りしやうなくては此事に思よらすといへり

15ウ

一 桐 壺

女御 更衣

いつれの御時かねうこかうゐあまたさふらひ給ふ中にいとや

5ウ

いかめしき事はやむ事なし人のきしよくき事也

んことなききはあらぬがすくて時めき給ふ有けりもとよ

りさふらひ給てわれとおもひあがり給へる御かた／＼めざま

しき物におとしめそねみ給ふそれより下らうのかうゐたちはま

してやすからずあさ夕のみやづかへにつけても人の心をのみう

ごかしうらみをおもふつもりにや有けんいと」あつしうなりゆ

き物心ほそけにさがちなるをいとあかずあはれる物にお

もほして人のそしりをものはぐからず給はすおとおんなめをそ

おもはぬ也 めもあてられぬ也み せ 人をよくも

ばめつゝいとまばゆき人の御おほえなり御つほねはきりつ

ぽ也きりつほの さきの世にも御ちきりやふか／＼りけん世にしら

ずよにしらすとはお きよらなる玉のおのこみこさへむまれ給ぬ

もふ人なき事也 光けんしの君これ也もろこしにもかゝる事のおこりゆへこそ世

もみたれあしかりけれと」やう／＼あめのしたにもあちきなう

もてなやみくさになりてやうきひがためしもひきいてづへき人

の心ともなれははしたなき事おほかれどたぐいなき御心さしの

かたしけなきをたのみにてましらい給ふをあいし給ひしにたる引

一一の人にてはなしとほんにあるはち／＼は大納言なりし事也

太政大臣也 和名也 から名おほいもうち君也 記す その次左大臣 ひ

たりの大殿といふへしおとどとも

右大臣みきの大殿也 おとどとも 其次に内大臣 うちの上達部 かんたちめ」と云は 7オ

上官也 大納言 右 大將 中納言 おとどとも さいしやう 左衛門 右

衛門の督 兵衛督 右これらをはくきやうとも云かんぢちめ

とも云三位まてなり 殿上人 とは中將左右同頭四位五位等

をはてん上人とて下官也 少將 も同 六位 はことにさがり

也つかさによりてしやうそくもしだいにいらくくなる也

弁の官は大中小左右しだいあり 侍從治部卿兵部卿刑部卿 7ウ

女以上八卿也 のふんに一の人と申すはきさき也 一代 に一人つゝ也 此

位をゑ給へは中宮と申す つかうまつる人も御門とおなし

官人なり 御たうばりのみふといふは御位によりたる御と

くふん也 此位はてくるまに乘たまふ也 輦車 御つ

女御とは二位の人也 いくたりもまいりつどふ也 御つ

ほね一をふたげ給ふびやうぶ木帖まで我か方よりはこびて

さふらひ給ふ夜るゝは御門より御心さしあるかたへ御ン

使あれはまうのぼり給ふ 昇殿とも書へし ひ まうの

三位はないしのかみせんじ殿 是も御おもて人 命婦

ほるをは御ンとのゐにさふらひ給と云 四位は更衣也 まうのほるきしきは同 五位はみやうぶ也 命婦

一のみこは右大臣とのゝ女御の御はらにてよせおもくうたか

ひなきまうけの君と世にもてかしつききこゆとは けんし

の御あにしゆしやくるん也 朱雀

此わか宮をはわたくしの物に御門おほしめし」かしつく事か

きりなしとは光源氏の御事也 君子

わたくしに記すくんしの次第の事 へ

うゑとほんにあるは御門の惣名也 内裏

うちとはだいのりの惣名也 九重 おううち也

雲のうへ もゝしぎ こゝのゑ 大内 みかきが原 是等

はだいのりの惣名共也 太上天皇とはおり居の御門の惣官也

此時は院とも申へし みこ 御子 と云 王子の惣名也 みこたち 也 しんわう 男

女ともに王子の事也 内 いと もんしをくはへぬれはおんな

みこ也 内親王と書は女也 宮たち と云も王子の惣官也

此宮達の中にもくらぬゝまします 品 ほん と云もんじをを

くはばくたいの御つかさ也 一品 しん王 二品 三品 同 二品

内親王とけいづあるは女宮也 一ほんのみや 二ほんのみや

三ほんおなし このかずにあからぬをはむほんしんわうと

て御とくふんなどもなく御いゑさひしき也 二の宮 三の宮

女の宮分 四五同 女一の宮女二女三女四女五女無品也 かんつけ 常

此外 式部卿の宮上 次兵部卿の宮下 中務宮 上野宮 ひた

ちの宮 此二ヶ国の外はくんしの御つかさにいらぬとみえ

位 え
たりこのくらひを^え給ふはいかめしき宮たち也

源氏 おさなき人のおとなしき也

このみこのおよすけもておはする御かたち有さまあさまし
きまで人のめをおとろかし給ふ 三さいになり給ふとし御

源氏の事 しゆしやくんの御はかまぎの事也

はかまぎの事あり 一の御子のたてまつりしにおとるけち
めなし

結目 ものゝいろいろめ
をけちめと也

一 物の心知給ふ人はかゝる人も世に出おはする物なりと世間
物心知たる物にはあらず女御更衣などのそねみ中にも物の心し
れる人はと云儀也

一 その年の夏みやす所はかなき心ちにわつらいてまかてん
としたまふ^{まかり出也}子をはらみ給へはやかてみやす所と申也

御門ゆるしかたくおほしまふいとにほひやかにうつくし
き人のいたうおもやせてまみなともたゆげに^{まゆとはめい}
のみやう也

きもたえてきこえまほしき事もいひやらねはつとカタわら
にそいおはしましてかきりあらんみちにもをくれさきだゝ
しとこそちきらせ給ひしをさりと也^は「うちすてゝはよもゆ
きやらじとむせかへらせ給を女もいといみじとみたてまつ
りて更衣

きりつは^{いまほしき也}
かきりとてわかるゝみちのかなしきにいかまほしきはい
のち成けり 手くるまのせんしにてまかて給ふ御門は御む

10
ウ

10
オ

ねもふたがりてあかしかねさせ給ふ御つかひの行かふほと
もなきになをいふせさをの給に夜なかうち過るほとになん
はて給ぬるとてあへなくかへりまいりたる 御使をきこし
めす御心まとひ世のつねならず

わかみやをはかくても御らんせまほしけれとかゝる時に
さふらひ給ふれいなき事なればまかて給ふかうゐの母北の
方おなしけふりにとなきこかれたまひて御^をおくりの人の

車にしたいのりておたぎといふ所^{さうのきしき也}にそのさほういかめしう
は今の六道と云寺ト云々清和の祖母の廟所弘法大師八三昧所にふうし有所也
したるにおはしつきたる心いかはりなりけんむなしきか
らをみつゝも

引哥 うつせみはからをみつゝもなくさめつふか草の山
煙たにたてと云哥の心也 はゝ君のこと葉に「はいになり
給はんをみてなき人とひたふるにおもひなりなんとの給ふ
心は引哥 もえはたゝはいになりなんのちにこそ人をおも
ひのやまんごにせめと云哥の心也 永と書てひたふると用
也ひたやふる也ひたそらよりもきはめたる心也
御門はつゐにねうごたとにいはせずなりにしをあかずおほ

さるれば鳥辺の野へ三ゐのくらゐをくらせ給ふちよくし^{勅使}

来てそのせんみやうよむなんかなしき事なりけるそれに^{宣命}
付てもにくみ給ふ人^{みつのくらゐ}／＼おほくきずをもとめておとしめ給ふ^{さげたり}
引哥^直 なをき木にまかれる枝もある物をけをふきぎずをい

12
オ

11
オ

ふがわりなさど云哥の心也 拾遺たかつの御子の本くわいのうたと也

御門は日かすのつもるまゝにせんかたなく恋しくおほしめさるゝに御ンかたゝの御とのあもたえてなし夜るひる涙にひちてあかし暮し給ふを見たてまつる人も露けき秋なり引哥 人はいさ時そともなきおもひゆへわれは露けき秋

そしらるゝと云哥心也

なき跡にも人のむねあくまじかりける人の御おほえかなとぞこうきてんたとゆるしなうの給ひける

系図に弘徽殿太后の宮とあり右大臣の御女也此御はらに一の朱雀宮生給その外おんな宮二所ましませはこの御かたの御いさめをそ御門もわつらはしくおほしけるのちまでこの更衣のにくかりしなごりに源氏をも情なくおもひ給し御まゝ母也 のちに須磨へおもむき給しも此御いきとをり也

一 風野分たちてにはかにはださむき夕暮つねよりもおほし

いつる事おほくて若宮の御ありさまもゆかしくおほしめせ

五位ノ尉 女ノ宮也 (挿入)

13オ

はゆけいの」 みやうぶといふ女房をみやす所の母のもとへ御門よりつかはし給ふ 夕月夜おかしきほとにいだしたてさせ給ひてやかてなかもおはしますかやうなる折ふしは御あそひなとせさせ給しにも心ことなるものゝ音をかきならしはかなふきこえいづることの葉も人よりはすぐれたり人のけしき也 しけわはい也かたちのおも影におはさるゝもやみのうつゝ

にはおとりけり 引哥

むは玉のやみのうつゝはさたかなる夢にいく」らもまさらさりけりと云哥の心也

一 おかしきは月花も人のかたちも上品なるをおかしきと也よからぬ事をみるにをのつかからわらはれぬ物也かやうの心なるへし

御使の命婦かしこにまうてつきて門ひきいるゝよりけわひ

あはれ也やもめすみなれと人ひとりの御かしづきにつくろ

ひたてゝめやすきさまにてすくし給しをこのころくれやみにてふししつみ給ほとに草たかく野分に所ゝあれたる心

ちして月影はかりにて」八重葎にもさわらずさし入たる

とふ人もなき宿なれとくる秋は八重むくらにもさはらさりけり

引哥 八重むくらしけるやとのさひしきに人こそみえね

秋は来にけりと云哥の心也 北のかたたいめんしていま

つていき侍るいのちいとうきをかゝる御使のよもぎふの露

分いり給ふに付てもいとつかしうなんとてけにえたふま

じうないたまふ 給しけしき也

命婦もやゝためらひて御せうそこぎこゆ

ふみをも使を なみたをしつめたる駉を

もせう息と也 ためらいてと也

御かとの御詞

しはしは夢かとたとられしをやうゝおもひしつまるに

しもさむぎ世なくたえかたきはいかゝすへきともいひあ

はすへき人たになきをしのひてまいり給ひてかいなき物

語をたにとなんわか宮の露けきなかにすくし給らんもおほ

友

つかなくもろともにはこくまぬくちをしさいまはなをむか
しのかたみになそらへてもし給へとこまやかにかゝせ給
ひて

御門 ぎりつほの御門とも
系図に太上天皇とも

太上天皇 みやき野の露吹むす風のをとに小萩かもとをお

もひこそやれ 北のかたえも見はて給はず松のおもはん事

たにはつしき身なれはましともゝしぎにゆきかひ侍らむ事

は人めもつゝましきとあるは 引哥

引哥 いかにしてあれとしられじ高きこの松のおもはん事

もはつかしと云哥の心也

は君

月ころはうれしくおもたゝしきつゐての御つかひにてたち

より給し物をかゝる御ふみにてみたてまつるいのちの返こ
もつれなく侍るかな故大納言のゆいこんたかへじとはか

15ウ

りにいだしたて侍りしに身にあまるまでの御心さしのかた

しけなきに人げなきはちをかくしてまじら侍りしに人の

そねみふかくつもりやすからぬ事いできかやうになり侍れ

はかへりてはうゑの御心さしをつらくなんおほえ侍るとつ

きせずなく夜いたふふけぬれはこよひすぐさず御かへ

りそうせんといそく月は入かたの空きよふすみわたれる

に風すゝしうふきむしの声もおしみかほなるにたちはな

16オ

れかたき草のもと也御使のみやうふ

命婦 すゝむしのこゑのかきりをつくしてもなき夜あかず

ふる涙哉えものりやらすかへしは北かた

北かた いとしく虫の音のしけきあさちふに露をきそふる

雲の上人かごともしきこえつべくないはせ給ふかの更衣の

かたみにのこしをき給ししやうそく御くしあげのうどめ

く物そへ給ふめくだつと云はそれやうなりと云こと葉也

かみにいたゞく具足也やうきひか玉のかんざしたとへ

命婦まいりたれば御門いまた御殿ごもらずまちおはしまし

けるをあはれにみたてまつる御まへのつばせんざいのおも

として六十帖に合する時は一善にす桐壺ノせんざい也青

しろきさかりなるを御らんするやうにて心にくきかきりの

ねうはう四五人はかりさふらはせて御物語せさせ給ふ程な

りけり御かへりたてまつる更衣の母

北の方 あらき風ふせきしかけのかれしより小萩かうへぞし

づ心なき 心おさまらぬと云心也

かのつばせんざいはせいりやう殿のまへつねの御つば也

いまの詞ゆへにきりつほのまきををつば前ざいと名付たり

といふ事もありされどおもてにはたつべからず

をくり物を御覽ぜさすなき人のありかたつねいでありけん

やうきひかたとへ也
しるのかんざしならましかはとおほしめざるゝもかなし
御門 たつね行まほろしもかなつてにても玉のありかをそこ
としるへくあさ夕のことくさにははねをならべ枝をかはさ

んとちぎらせ給しにたれもかなはさりけるいのち」のほと 17ッ
ぞつきせすうらめしき風のをと虫の音に付てもものゝみか
なくおほさるゝにこうきてんには物むつかりし給てわつら
きをむつかると也

御とのゐもまうのほり給はす月のあかきに夜ふくるまで
御あそひをぞし給ふ あそひと云はた、 御門いとものしとき
こしめす物すまじき也

右近

口伝

一 うこんのつかさとのゐ申しのこゑきこゆるはうしに成
ぬるなるへし人めをおほしめして夜るのおとゝにいらせ給
てもまどろませ給ふ事」かたしあしたにおきさせ給てもあ
くるもしらずとおほしいつるには猶あさまつりごとおこた
らせ給ぬへしと云おこたりし事をいへり

18ッ

引哥 玉すたれあくるもしらすねしものを夢にも見じとおも
ひかけきやと云哥の心也 わか宮さとおはするをおほし
やりて

御門 雲の上もなみたにくるゝ秋の月いかてすむらんあさち
ふのやともし火をかゝけつくしておきおはしますとある
は詩を引 セキテン 夕殿に螢とんておもひ

秋のともし火かゝげつくしていまたねむる事あたはす

一 亭子

長

限

哥

18ッ

一 ていししの御門のちやうごんかを御手つかから絵に「書給ひ
宇多ノ天皇也
て伊勢とつらゆきにもろこしのこと葉をもやまと歌をもよ
まさせ給て絵に書そへられたるをこの比は御門御まくらこ
あさ夕手なるゝをま

くらこと葉とは云

とはにせさせ給もたゝ更衣のゆへなりゑにかきたるやうき
のかたひちはいみじき絵しといへともふでかきりあればい
とにほひなしたいゑきのふようにかよひたりけんかたちか
らめいたるよそほるはさこそありけめど

長恨哥にたいゑきのふようびやうのやなぎは「つゐく也

19ッ

やうきひのかたちによそへたりおなしはちすなからたいゑ
きと云所の花いろうつくしくてやうきひのかほばせにた
りひやうと云所の柳はやうきひのかんさしのたをやかなる
ににたりと也

この桐壺の更衣のをみなへしの風になひきたるよりもなよ
びたをやか なたしこの露にぬれたるよりも花やかにらうた
びなる事也

げなりしかたちありさまは花鳥の色にもねにもよそふへき
とをしげなる跡云(云ノ字「也」ノ上ニ重ネ書ク)
かたそなき

引哥 花鳥の色をも音をもいたつらに物うかる身はすくすな
りけりと云哥心也

19ッ

一 わか宮六つの御というはの北のかたうせ給ぬこのたひは
おほしりてこいなき給ふ

一 春宮

一 同年とうぐうさだまり給ふこうきてんの御はらの一の宮
春宮に居給ぬ しゆしやく院これなり

一 七歳になり給へは御ふみはしめあり世にしらすさとくか
しこくてあまりおそろしきまで御らんす御かたちもいとう
つくしくいかなるあたかたきにてもみたてまつりてはまつ

うちゑまれぬきさまし給へればたれ／＼もえにくみあへ給はすは／＼かうゐの御心ばせなたらかに」にくみ所なかりし事になくてそ人／＼こひしのひ給ふ

20オ

引哥 あるときはありのすきみににくかりきなくてぞ人は恋しかりけると云哥の心也

一 そのころせんていの女四の宮と申はきりつほの御門よりもさきのていにてはやほうぎよの御あとにきさきの御はら

此女四宮

にてかたち名たかくおはしますきりつほの更衣のかたちになたる人三四代のおひだになきをこのひめみやよくに給へりと女はうの中にないしの介といふ人そうしたりければ御門御心とまりてしきりに」きこえ給てきさきさへこのまき

20ウ

にかくれ。藤重なりけにあやしきまでいにしへの更衣にに給へれば御門の御心なぐさませ給ふこれは人のほどもかる

／＼しからねはうけばりていとめてたしわればかはる事を

(ママ)

一 そのころこま人おほくわたりたる中にかしきさうにん

相人

たいりの事也

ありけるをみやのうちにめさん事はうだの御門の御いましめありとてこのわかみやをころくわんへつかはし給ふ

いまの四つづかこれ也

右大弁の子」のやうにしやうそくせさせてぐ

21オ

したてまつりて右大弁四つのつかにいでたるにさうにんお

ヒ

とろきてあまたたびかたぶきたりといやしきいでたちにぬ人

相人

てい王のかみなきくらるにのほるへきさうまします人のそ

ヒ

のそのかたにてみれば世みたれ御身もくるしかるへきさて又しんかとしてくにのたすけとなり大やけかためとなるへ

ヒ

堅

き人かとみればそのさうたがふと云

しんかよりはたかくみえ給し也三十九にており居の御門の位にあがり太上天皇のそんい(傍注「尊位」)をええ給し人なれば

ヒ

21ウ

一 御門もかしき御心にやまとさうをかねておほしめしあ

大和相

はするに日本のしゆく、さうにんの申所たがはざりしかば源氏になして大やけのみやづかへをしてなりのほり給へきさ

まにおほしきだめていよ／＼みち／＼の御かくもんあり

七さいにてふみはじめありてそのとしこま人にむきて四つづかにて詩をつくり給し人也相人めで申すめてとはふける也

(ママ)

たゞ人になしたてまつり給へはしんかなりはしめて性をたまはるゆへ氏のみなもと也すなはち源氏也代々の御門にある事也

一 相人ひかる君と名付たてまつる光いづれも御門の」御心

七歳也

み

22オ

さし光源氏をいとをしみ給ふ又藤つほのねうこをもならへて時めかし給へは世の人か／＼やく日の宮とぞ申ける

けんし

一 おさなき御心には／＼きりつほにに給へるよし人の申きかせたれはこのふちつほにちかくなつさびきこえはやとおほすなれむつるゝを

はかなき花もみちにつけてもこの御まゝ

母をは心よせきこえ給へはこうきてんはもとよりもにくみ給ふ御心にて又うちそへてけんしの君心よからすおほしけり

一 十二にて御けんふくあり御門ゐたちてよろつ居起きよらを 22 ヲ

つくし給ふ殿たいせつにおもふ事をは おはしますてんのとはせ
いりやう殿也そのひんかしのひさしにて御けんふくのぎし
きありみこたち大臣よりはじめてのこる人なくまいり給ふ
けんし けんふくの事也
びんづらゆい給へる御かほのほひさまかへ給はん事おし
げ也 冠者
くわじやの御座引いれの大臣の御座御門の御まゑに

あり御かふりを引いてたてまつる也今日はかりの官を引

いれの大臣と也時の左大臣にて北のかたは御門の御いもう武家のま
ほうしおやおなし

とにていみじき人なり」さる時にて源氏まいり給ふ大藏卿 23 オ
と云人くらんどつかうまつる御ぐしそいとときよなる御ぐ

しをそぐほと心くるしけ也かうぶりし給て御やすみ所に出
給てしやうぞくたてまつりかへておりて御門をはいし奉給

さまにぞ人々なみたおとし給御門はましてみやす所のみま

しかはとおほしいつるにたへかたきをねんしといとかうき
ひわなるほとは雅と書てきひわなりあげをとりもやとあやう

くおほしけるに」あさましきまてうつつしげさそい給へり 23 ヲ
ヒ

ちこのほとを御くしきかりたるといふ御びんかきかふりき給
へはあげたる也あけておとりもやせんととの給御こと葉なり

一 御前よりないしの督せんしを賜てひきいれの大臣をめし
オ 女房也 宣旨

御引出物なり 女房
たりろくの物うゑの命婦とりてたまふ御さうそくくたりに
しろき大うちぎ給ふ

打着也 世のつねの衣はミセケテに一寸み おとも女もくら
るみしかき人はきぬ物也 小打着は大かた夏の用也五寸みしかく五寸
御さかつきのつゐてにおとろかさ給ふ

御門 いとけなきはつもとゆひになかき世をちきる心はむす
ひこめつや ほんにうゑかふりのきたなしたくはつもとゆひをけ 24 オ
んしにはもちいへしうゑかふりと付ては伊勢物語也

この左大臣御門の御いもうとのはらにおとこ君一人こじうと
将是 あふひの上
也 ひめ君一人もち給へるを源氏の君にたてまつらんとけ
をみせたる事也

しきはみ申たまふさらはこの時のうしろみなるめるにそい
ふしにと御門もよをし給ふ御哥也御返左大臣

ひたり むすひつる心もふかきもとゆひにこき紫の色しあせ
すはあさくならずはと也はつもとゆひのこむらさきなどい
ふは同心也かやうの御元服にはむらさきのくみのひらく長
きに御もとゆひをとる事あり

この哥をそうしてながはしよりおりてぶたうし給ふまいふむと
う御門より御おんをかふりて」はいしたてまつるを云詞也 24 ヲ
ヒ

度かたふくあしふみ同
かさねのろくにひたりのつかさの御馬にたかすゑてたまは
り給ふ源氏の君さふらい出給て御みきまいる 殿上の事也男のさ
ふらいをはてん

上女のさふらい
をは大はん所と云 みこたちの御座のすゑに源氏の君つき給

食也 菓子也

蔵司ハ

ふ今日の御前のおりびつ物こも右大弁賜てくらづかさこ

くさうるなどより大やけの事にいかめしうなんありけるど
んしき五十具いままの鳥の子と云物なるへし付合にはつゝみいゐると
やはらけたりこれを御でを付らるとみゆなが

らうとに事五十具也同くからひつ五十具ありけり

25オ

かんたちめ殿上人みはしのもとによりてろくの物さま／＼

左大臣

かづきわたし給ふその夜源氏の君おとゞのさとにまかて給
ぎしき世になくかしつききこえ給ふいときひはにておはし

たるをはつかしくおんな君はすこしすぐし給へるほとにて
とあるは十二にてまします事也

一 源氏の君おとなになり給へはふちつほわたりにてもみす

のうちはゆるし給はすけどをくなり給けんしの御心のうち
にはこの女御の御かたちを」御心にかけてにる人なくも

25ウ

ものし給かなとくるしきまておもひありき給 大とのゝひ

め君はかしつかれたる人とはめてたくみえ給へどいかなる
にか心にもつかずおほしけりことふゑのねにつけてほのか

なる御けわひきくをなくさめてうちにのみ住給けり御や

藤は

すみ所は御とのゝむかしは／＼かうゐる住給しきりつほ也や

かて御おほち大納言の御家をもさとの殿とて源氏の御ため

木工修理はんしやう也

に大やけよりつくりのゝしる」もくすりたくみつかさども
にせんじくたりていみしく作らるもとのこだちいゑをしを
こだちと也

26オ

せんすい也

山のたゝずまひおもしろき所なるをいとゝいけの心ひろく
していけの心とはくんしの御いゑはさるべき時がく人の船にて楽を
そうするに左右の舟をこぎちかふるにさはりなきやうにひろく

すへし／＼也 けんしの御心にか／＼らん所におもふやうなら
む人をすゑてすまはよとなけかしおほさるゝといふも藤

つほの御事也 光君といふ名はこまうどの付きこえけると
て以上九首

26ウ

二 櫛 木

一 ひかる源氏名のみ事／＼しういひけたれ給ふとおほか

めるにいと／＼かゝるすき事どもをいひつたへてかろびたる

名をやながさんとしのひ給ひけるかくろへ事をさへいひつ
たへけん人の物いひさがなさよ かくいふ作者紫式部か詞

也かろびたるはかろき也かくろへ事とはしのひたる事也
とおほかめるとはこのまきに御まゝ母の藤壺の女御に

源氏のひ／＼まいり給ふ事も人こそしらねほんにはあ
らはしたり又伊よの介と云じゆりやうの人の女房を御か

はゝき木

たたかゑのつゐてによはる給へる事も」見えたりこれを

とがといへり

さるはいといたふ世をはゞかりまめだち給ふほとにかたの

ゝ少将にはわらはれ給けんかし

かたのゝ少将とほんにあれともあかす事まれ也けんしい
ぜんの色このみの男とみゆある物に記したりなにかしの

少将かたのに一宿したりし事をかやうにいへりとありいかさまにすぎ人なりけんしのうるはしくまめやかに身をもち給はゝかたのゝ少将わらふへしとあり

源氏

一 まだ中将などにてましゝける比はうちにのみさふらひ

左大臣

給て大とのへはたえゝゝまでで給しのふのみだれやとうたがひきこゆる事もありしかとさしもあらずすあだゝゝしくめなれたるゝうちつけのすきゝゝしさなとはこのまぬ御心にてとはみる事きく事にやかてしむをうちつけと也しのふのみたれ

27ウ

引哥 かすか野の若むらさきのすり衣しのふのみたれかきりしられすと云哥の心也

御物いみとは大かたさるへき人は夢見さはかしく又御いのりしなとのかたよりよそへいて給ふましき日をとりにて申す

おもや也

28オ

ときはみすの外へも出給はす又よその人をはもやのみすよりうちへはいれ給はぬ也けんし大内にすみたくおほしゝめすときは御物いみとてながゝゝとこもりおはします夏はしめつれゝゝとふりくらしたるよひの雨に殿上も人ずくなにけんしの御とのゐところものとやかにてれいの御物いみな

頭

るにこじうとのとうの中将まいり給へり 御けんふくの夜より御そいふしときこえしひめ君のはちまてけんしのほんのきたのかたなりあふひの巻にかくれ給へはあふひの上とけいつありその御あになれはろんなくこじうとゝいへり一部にさしだしてこじうとと云は此人也

いまのちかひだな也

一 源氏の御もとのづしにいろゝゝなるかなぶみをかれたる

を女はうのかたより
のふみの事なり
28ウ

けんし

れはさりぬへきすこしは見せんかたはなかるへきもこそとてゆるし給はねはそのかたはらいいたしとおほされんこそゆかしけれをしなへたるはわれもかきかはしてみ侍る也をのがじゝまちがほならん夕くれうらめしきおりゝゝのこそゆかしけれと申給ふ各競と書てをのがじゝ也たゝをのれゝゝの心也

つゆきか

引哥 春は梅秋はまかきの菊の華をのかじゝこそ恋しかりけれとありたゝ各々也又おさゝゝ」といふこと葉しけれし 長

29オ

ㄱ 椅からし

天下治 いづれもおさゝゝと用也に

ん王四十代の御時諸国のぐん郷をわられしときこの詞いできはしめたりその所のおさゝゝしき物にくはしくいひつけよと下治ありし也さるほとにものゝ一定したる事につかはるゝこと葉也

こよなき 無越こゆる事なし也 よきにもあしきにもこよなきといへり えもいはぬ 言語道断也 うちひそみたりとはかくしてなく事也

大そさう也

かやうの大ぞふのみづしには二のまちの心やすきふみをこそをき給へとはつきなる人の御文のさのみかくさぬを二の町といへり

中将 そのつゐてに女のこれこそはとみえてなんつけゝがた

29ウ

きはまれにもあるかなわが心へたる事をはしたりかほにお

ヒ

もひて人をおとしめさまにかたはらいたき事おほきかな
あなちによき人をゑらばんの心ならねとおなくはお
しなをすへきちからいらぬ人もかなとおもひしにかなふ人
なきなりと中将いひいだし給へりこれははききのしなさだめ
のはしめとせり

源氏もすこしはゆかしくおほす事にてそのしな／＼やかに
いづれをかみのしなをきてか三つにはわくへきととい給
ふ

上品也 中品の女也 下ほんの女也
かみがかみ なかのしな しものきさみ このこと葉は

付合のために記す

馬の頭

丞

一 かゝるほとにひたりのむまのかみ藤式ぶのせう二人つれ
て御ものいみにこもらんとてまいれりとうの中将とむまの
かみと藤式ぶと三人してしなさだめをはしたりけんし一人
はきゝ給ふなり 口伝 のちにきたるふたりは世のすきも
のにてものよくいひとををを中将まちとりて女のしな／＼

をさためあらそふいときゝくき事おほかり おやの位の事
なりのぼれ

30

ともとのしなたかからぬはさはいへど人のおもへる所
もかろきかたなり又もとのしなはたかくむまれながら身は
しづみ位みじかくて人けなきあたりあり人の身おとろへい
ゑまづしくなりぬれは心は心として事たらぬ事ありじねん
にわろびれたる事うちまじる物也これをは中のしなにぞこ

す敷

とはるへきとあれはかゝりあふさきるさにてなのめにさて
もありぬへき人よの中になき也

引哥 しのふれはとあれはかゝりかくすれはあないひしら
ずあふさきるさにと云哥の心也女にかきらす大かた世の中

31

はひだり心になへは右はおろかなる物也いひしらすと
はこと葉にはをよばぬ也口伝あり

されは世の中はくらべぐるしき物也せばきいゑのうちのあ
るじとすべき人を思めぐらすにもたらはぬ事ありみそめし
契をおもひてすこしもよきかたあらばそれをかたかどにし

てみるへき物也よきかたはかりゑらはんには心になふ事
かたかるへし天下をまつりごつもひとりふたりしてはかな

ひがたければしもはかみになびきかみはしもにたすけら
れて事ひろきにゆづろふへし女はまことの心たにさたまり

なはそのほかのみるめはかりはしのふへし むまのかみ物

さだめの博士になりてひゝち居たり口伝 ひづらき居たり

とも そのしめ事すき／＼しくとも申さんとてちかくい

よればけんしの君もめきましたまふ中将はたましいみし

くしんじてつらづえつきてむかひ居たるさまのりの師の世

だんきの所にたりし也 法

のことはりととききかせんところの心ちするもかつはおかし

けれとかゝる時には「おの／＼のむつ事もかくしあへすな
ん ヒ

しせうにひきてかたる物語四つあり三人して四つかたり
てきかせ申たり

一 馬のかみはやうみし女かたちはまほならねともこの人に

みうとまれやせんにつくろひうとき人にみへはむまのかみ

ヒ

のおもてぶせにやならんとみさをもてつけて みさをとは物
をつくりたる
跡也操也もてつけとはしつけたる也みさをつく
ると云松なともみさをの松と云はつくり木也

女の跡 大やけにつかふまつるへきかたをもうしろみてさう しやう
そくとよむへし 調

事をもむまのかみの「心にたがはじとおもひはげみ物たの
もしくはありなから物ゑんじをいたくし侍りしかはうるさ
くてとは物ねたみの事也 怨と書てゑんずると也 おいら
かならましかはとはたゞありなるけしき也 むまのかみし

わか物にしなす心也
え(ママ)

はしらして物ねたみをしゑたぐるかとおもひてことさら
になさけなきけしきをつくりてみするに女もおさめぬすぢ
にて馬のかみがおよびひとつを引よせてくいて侍りしかは
馬のかみこれこそはかきりなめれとて「ゆびをかだめてま
かつるとて馬の頭

男 手をおりてあひみし事をかそふればこれひとつやは君が

うきふしさすかにうちなきて女

さかな うきふしを心一つにかぞへきてこや君が手をわかる

へきおり 舟のはのすぐにある時をまほといへり人のかたちのわろ

とよみしかどこのさがなさをこらさんとしてむまのかみあく
がれありきてよりつかずいといたふつなびきてみせし間に
引哥 ひきよせはたゞにはよらで春こまのつな「引するぞな
はたつときくイ本なはたゆときくと云哥の心也 むまのか

33 ヲ

みりんしのまつり 調業 のてうかくの夜雪みそれかきたれふりて

うちわたりのたひねもすさまじくけしきばみたる女のかた
へは心もひかずと云心はうちとけぬ女をけしきばみたるといへ
しきはみ うちはみ いたかつたともつはみつはますなる比をけ
たると云 うちはみ いたかつたとおもひめくらすにこのさかなものゝか
たゆかしくてなまつめくはるれど雪をうちらはらひてまかり
て侍りしににおくしたる跡也 うちはみ 大きなるふせこにあつこゑた
るきぬとも「ふすべかけてひきあくへきものかたびらなと
うちあげてこよひはかりと待たるけしき也

34 ヲ

あつこゑたるきぬとは夜るの御ぞなるへしたき物をして
そのあたかなるとききかゆる也引あくへき物とは木帳
也女のもとへゆきては木ちやうを引あけてものかたりを
もいふ也かたひらとはひとへなるもの也あやおり物にて
もせよかたひらといふなりひとと云はふうたいのことく
上下 たてに

一のつゝにひもさがる也ほころひをふくなとのことくあ
けらるゝ物也よろづの事をそのほころひよりのそくなり
さうじみ正身と書也しやうじみとよむへし そのところ

主人

のしゆじんをしやうしひと云 男女同このあいしらいに
ひたやこもりと云詞あり真隠と書なさけなくかくれた
りかやうにまちたるけしきはみえなからさうじみはなしおや
のかたへこの夜さりわたりたりとて「いとすまくなりしか
は (マ、) そのまゝあくかれまかりありくにこの女おもひけるにや
そこはかとなくわつらいてはかなく成ぬいとたねふれにく

は

34 ヲ

ゝ侍りしとて実にあはれとおもひ出たるけしき也

引哥 ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまで
そ恋しきと云哥の心也

この女は七夕のてにもおとるまじうとはたちぬふ事はやりし也

引哥 あふ事はたなはたつめにおなしくてたちぬふ事はあへず
あるへきと云哥の心也

たつ田姫といはんにもつきなからずとはしやうそくなとそめ
姫の山のにしき
ににたりし也

引哥 みるごとに秋にもなるかたつた姫山のにしきのまなく
てるらんと云哥の心也

七夕の
とうの中將のひはんにげにこのたちぬふ事をのどめてなか
き契にてあへましのどめては
そ
そのたつた姫のにしきには又
ひしくものあらじよろづの事はへなくしなしたる女はいひか
ひなき事なりといひはやし給

一 同馬の頭そのうちみ侍りし女はかたちもたちまさり手つ
引
哥よむ

き口つきたらいて侍りしがすこしまばゆき所ありてめにつ
かず覚侍りし「かはかれ」に侍りしほとに又心かはせる
馬の頭
人ぞありけらし神無月の比おほ内よりまかりいつるにおな
しやうなるうへ人行あいてその車にむまのかみものりそい
て行ほとにこの殿上人のいふやうこよひ人まつらん宿のい
と心くるしきとてゆくをいつくならんとおもふに馬のかみ

がかよふ女のもとへ行たりあれたるついちのくづれよりい

けの水影みえて月たにすめるすみかをすぎんもさすかに
や」ありけん車よりおりぬ菊いとおもしろくうつろひわた
り風にきをゑるもみちのみたれなとけにあはれとみえ侍る
鼓

にこのうへ人いたうそぞろいてふところなりけるふえとり
いてふきならし門ちかき家のすのこにしりうちかけてと
はかり月をみる 口伝あり

かけもよしなとつゞしりうたふふしもこゑもさだかならずうた
ふをつゞしる也

さいはらあすかゝとありあすかるにやどりはすべしかげもよ
うたふ也 馬の付合又旅宿なとによきとりあはせなり空のけし
きもわれもきむし也みまぐきもよき所なれはとまりたきと也

うへ人のふく笛にうちより女琴をかきあはせたり男いたふ
めでゝすのもとにあゆみよりてにはのもみちこそふみ分た
る跡もなけれど云

引哥 秋も来ぬもみちは庭に散しきぬみちふみわけてとふ人
はなしと云哥の心也さて菊を折てうへ人 殿上人也

男 この音もきくもえならぬやとなからつれなき人をひき
やとめける女はこゑいたふ」つくろゑて

木からしに吹あはすめるふへのねを引とゝむきことの葉も
なし この殿上人もむまのかみがかよふ所とはしらず女も
むまのかみのりそいて来たると思もよらさりけりかやう
になまめきかはすを見てにくゝ成てむまのかみはそのうち
はしちかの事也

まからずなりにけりかやうにもていてたる事はあやにくた

のもしけなくおもひこり侍る也

馬のかみけんしをゝしへ申す詞也きんたちのかみなき御
 ちらびにはいかはかりなる人か」たぐい侍らむおらば落ぬ
 え

37
ウ

へき萩の露ひろはぐきえんとする玉ぎょのこゑのあられ
(ママ)
などのやうにあへかにやさしきはかりの女をこそおもしろ

馬某

くおほしめさるへけむともなにかしかいやしきいさめに
あまりすきたわはめらん女にはすこし御心をかせ給へあや

まりてみんなのかたくななる名をもたてつへき物なりとけんしをいさめ申せはけんしすこしかたゑみてさる事とは思

しり給へし中將もうなづき給ふうりやうじや
うと云也いつかたに付て

もよのつねならぬ物かたりかなとてわらひをはさうすおは
します也

38
才

いぜんの物ゑんじの女はさがなかりしかと馬のかみをした
 ひ おもひて物をねたみつゐにむなしくも成し也 これをは
 上品なりとみえたり

のちの物かたりの女はかたちまさりたれと心かろしたもの
しけなし 下品といへり
つながぬ舟のうきたるためしものと云は

本文引 身をくわんずればきしのひたいにねをはなれたるく
さいのちをろんずれば江のほとりにつながる舟と云
心也」

38
ウ

一 頭中將なにかしはしれ物かたりせんととだへをもうらえ

みぬほとにやさしき女ありかたちもたをやかにらうたげ也
中しやう うらみぬ也 のひたり

右大臣中の君

しくまからさりしころ中將のほんきたのかたよりこの女のかたへたよりに付てとかくおそろしき事をいはせておどし

たりこの女物をおち心もよはき人にてむげに思わひておさ
なき人をもちたりしかはその事に中将の方へなてしこに付
てふみあり

39
才

山かつのかきをありともおりくはあはれはかけな
てしこの露 この返事をはせずしておもひいでしまゝやか
てこの女のかたへ中将おはしたり

のちに夕かほの上とみゆ子は玉かつらの姫君也

あれたるやとの露しけきをなかめて虫のねにきをへるけし
きむかし物かたりめきて侍りしきふとは虫もなき女もなき
たり

玉かつらの事也
中將はやまとなてしこをばさしをきてまづおやの心をちり
夕かほ
をたにととり給ふ

引哥　ちりをだにすゑじとそおもふさきしよりいもとわがぬ
るとこ夏の華と云哥の心也

39
ウ

頭の中將 さきまじる色はいつれとわかねともなをとこなつ

心をかすうちとけたる事也
にしく物そなききれいのいとうらもなき物からいつよりも物

おもひたるけしきにて

御返　うちらはふ袖も露けきとこ夏にあらし吹そふ秋も来に

けりとはかなげにいひなしてまめくしくうらみなどもせえ

ざりしかは心やすくて又とだへしほとにかゝなりにけん

あともなくこそかきけちてうせにしかほん北のかたよりう

40オ

き事いひけんをも中将は「しらざりきかのなてしこのらう

たくむすめ侍りしかは心にかけてたつね侍れともきゝいだ

の事也

さずとてまことにあはれとおもひいでたりこれこそはか

40オ

なき女のためしなりけれうき事をも人にいはんをばはつか

しき事におもひなみたをこぼしてものごひかくしてつるに

我か身をかるくしくもちて中将の心さしをもいたつらに

なしぬるは下品の女の心也とさだめたり うるはしき人と

いふはねたむへき事」をもみしるさまにほのめかしうらむ

べからんふしをもにくからずかすめなさばそれにつけてあ

はれもまさりおとこの心もみる女からおさまるべしあまり

うちゆるべみはなちたるは心やすくらうたきやうなれどを

のつかからくくしきかたなりとさだめたりされは世中は

ありかたきものなりはしめの物ねたみの女もいま思にはた

のもしけれどそのおりはあきたき心ちすへし又ことのねす

くみいでありし女もさしすぎたるつみおもかるへしいま

ものゝたね也

のはるけ所なく心よはかりしおほつかなさもうたがひそふ

べき事なりいづれともさだめかたしこのよきかたはかりを

とりぐしてわろき事のくさわるまぜぬ女はいづくにかある

ものゝたね也

へききちじやう天女をおもひかけんとすれば又ほうげつき

くすしからんこそわひしけれとてみなわらひ給ふ

ものゝたね也

わたくしに記す 法氣付とはびしや門のいもうと」なれ

はなりくすしからんとはさいせう王経に吉祥天女のほう

え

をゑんとおもはゞ身をきよめじやう系をきじやうしつに

七

41ウ

入てきやうしゆを誦ぜばかならずきちじやう天女のほう

をうへしとある事をくすしきと也

一 さて藤式ふがもとにこそけしきある物かたりはあらめを

そしとせめ給へはしもがしもの中にはなんでう事か侍らん

と申なからまだもんじやうのしやうに侍りしときかしこき

女のためしをなん見侍しむまのかみの申給しことく大やけ

さまのみやづかへの事につけても」わたくしの世にふべき

たゝずまひもいかしこくさいのほと

かせはつかしくすべて人に口あかすまじくなん侍りしさる

ほとにけなつかしきさいしのおもひははなれてうるさく侍

りし。それはあるはかせのむすめにて侍りし(補入)

れ侍におやきゝつけてさかつきもていでゝ我かふたつのみ

ちうたふをきけとなんいひ侍りし口伝也 かのおやの心に

はゝかりてしばゝまかりなれ」にきあるとき物ごしにあ

ひたりこゑもはやりかにていふやう月ごろふくびやうおも

きにたへかねてぐくねつにさうやくをぶくして侍れはくさ

きによりたいめんは給らぬ也まのあたりならずともさるへ

からんさうしはうけ給はらんといふ これは六月のどうように

からひるをくいたる女也がくもんをしたりしほとにこと葉をや

はらげず物をいへはなつかしき女にははづれたりこと葉だみた

るとほんにあるはでうじ也 ふみをかくとてまかなはすくなく

まんなをとりいれてかきし也 藤式部の丞

六位の殿 さゝかにのふるまいしるき夕暮に」ひるますぐせ

上人也 過

といふがあやなきいかなる事付そやといひもあへぬに返し

博士
の女

あふ事の夜をしへたてぬ中ならはひるまもなにかまば

ゆからましきすかに口とくなどは侍りしとしつゝとはな

のあたりおこつきてかたりなすはなをふきふくら
めてといふ事也

けんしの君もとうの中將もあさましとおほしてしきぶがそ

ら事也いつこのさる女かあるへきおいらかにおにとこそむ

かひ居めとあわ^はめ給し也 あわめとはせつかんのこと葉⁴³

也

付合さゝかにゝからひる付へしくもはむまの時仏前にさ

がるをはよろこひをなすとして人のいゑにもちいる事也又

夕暮へなりていとを引て人にみゆるはおとこをまつ所に

はかならずくると也又女をおもふにもそのをとつれあり

と云さるほとにかれがふるまひ也そとをり姫の哥に

我せこがくべきよるなりさゝかにのくものふるまひか

ねてしるしもあり^ヒ 以上しせうにかたる物かたり四

つなり

そのほか木のみちのたくみにもたとへたりよろ^{ばんしやう也}」つの物⁴⁴

を心にまかせてつくりいだすもりんじの物をよくつくりた

るは上^ハずにあらずその物とあとさだまりたる物をなんなく

つくるを上^ハずとすべし

又ゑ所に上^ハずおほけれどめにみえぬほうらいの山からくに

かほなとをおどろくしくかきたるはうちみるにはめつら

しくみゆれともまことをしらねは上^ハずとさだめがたし」た⁴⁴

ゝこゝもとの山のけしきこだかくたゝみなしめにちかき人

の家居けちかきまがきのうちなとをげにとおもふやうにか

きたるを上^ハずとすべし

又手を書たるもこゝかしこてんながにはしりひきうはへを

かどくしく書たるはうちみるめのまへはめてたくみゆさ

れどまことのもんしをさだかに書たる手こそ二たひとりな

らべてみるときもうるはしくは侍りけれかやうのはかなき

事たに実にこそより「侍れまして人の心のころくしから

んはうたてある事也うはへのなきけはかりをばたのみかた

しとはしめにたとへあり^{四月也}

かやうにいつかたによるともなくて品定の夜はあけにけり

はゝき木の夜ること葉ともあま夜の物かたりともいへり

やうやうしての心也^上 からうしてけふは日のけしきもなをりぬれはさのみうち^{あふ}

にさふらひ給も大殿の御心いとをしくてまかで給へり^{ひの}

上^ハの^上か^上へ也

大かたのけしきも人の御ありさまおもくしくけたかく

みたれる所なくみえてけにこれこそは馬のかみなどかすて

かたくとりいてしまめ人にはたのまれぬへけれとはみ給へ

とあまりとけかたくはつかしけにしつまり給へるをさう

くしくおほす

長天一神也

一 こよひ内よりこなたはなが神ふたかり侍りにけりときこ

ゆる人あり源氏いとなやましきにとて御殿ごもれるをあし

き」事なりとこれかれきこゆい^{けんし}かはせんいつかたへかた

46才

がへんとの給ふ御殿人の中に紀伊の守といふは伊よの守のためにはちやくし也その家中川のわたりにてこの比水せきいれてすしきかけに侍ると人しきこゆ此よしをきのかみにおほせ給へはしりぞきてしたにわひ申す事ありおやのいよのかみが家にさはる事ありて女房ともなこのきのかみがかたにあつまり居たり人げちかくびんなくやとなけくをきこしめしてけんしその人おちらんなんよかるへきおんなどをきたひねは物おそろしき心ちすへしたその木帳のうしろにとのたまはするをきよろしきおまし所にもとて人はしらせやるおとにもきこえ給はずしのひておはしましたりす^{中川の}いなかいゑ^(マ)たつとはいなかい小柴かき

ゆへくしくしなしやり水にほたるしげくとびまが^ひあてお

かしきほと也みなみ」おもてはらゐ^ひのけてかりそめなれど

47才

きよげにしつらひたり御ともの人く^泉いづみ^{紀のかみ}にのぞきたるらうにあつまり居てさけのむあるじはさかなもとむとこゆるぎのいそきありくほと君^{けんし}はのどやかになかめたまふ

引哥 玉たれのこがめやいづらこゆるぎのいそのなみわけおきにいてけりとさいはらにもうたふ也 わかめかりあげ

にといふ付合もさかなに付へし

一 きのかみはかたち名たかきいもうとをもちたりおなしは

後に軒葉のおき也

らなりいまの北のかたにはいまた子も」なかりけりけんし^{いよのかみ}このむすめの事をゆかしくおほしめしてきのかみとうろかけそへ火あかくなして御くだ物はかりにて御かはらけまいらせたりその時源氏とはり帳もいかにぞさる心もなくては

47才

めざましきあるじならんと^{あるじはもてなしの惣名}の給 我かいゑと云きいはらの心也紀伊守なによけんともうけたまはらずとかしこまる

来ましませの心也 聖

我かいゑとはり帳もたれたるをおほきまきませむ^御に

せんみさかなになによけんあわびさだおりかりよけんとうたふ也

48才

さてはしのかたにかりそめなるやうにて御殿こもる^{きのかみ}申たるといふ事ひせつ也^{御との}はんにわらはともあまたありいよの

介の子もきのかみか子もある中に十三はかりなるわらは^{あるし}あるし

のいとなまめかし^{やさしけ也}けに^{けたかき也}あて人とみへたるありけんし御めと

ゝめてとひ給へはこれは中なこんにてうせにし人のすゑの

こなりこのわらはのあねをいよのかみいま北のかたにぐし

たりおやなくなりておちぶれていみしき人のむすめなれと

もいよのかみに」ぐしたりそのよすかによりてこのわらは^縁は

もこのいゑにあるなるへしいとあはれにおほしてくはしく

といたまふゆへくしき人のむすめなれはこの家にあるよ

しきこしめしてゆかしくなり給て人々しつまりぬるほどに
いたづらぶしとおほしめすに御めさめてやをらおきてたち
ぎし給ふにこのあねのねたる所いとちかしおとうとのち
ごのこゑにてとにきゝたてまつりしひかるけんしみた
て「まつりつるけにこそめてたくおはしましけれとみそか
ひそか也」
にかたるあねのこゑにてひるならはのそきてみたてまつり
てましとてかほ引いてふしたるけしきちかければやをら
しやうしを引あげ給へればあなたよりはさゝざりけりから
ひつやうの物とりをきてみだりがはしき中をわけいり給て
こゑしつるかたをみ給へはたゝひとりいとさゞやかにてふ
したり あでやかとはほそくちいさき人をいへり
けんし
ちかくよりてうゑなるきぬををしやり給ふに女はおもひ
もよらず物におそはるゝ心ちしておびへたりかほにきぬの
きはりてをとまたてらねば人たがへにこそ待れときこゆる
もいきの下也きえまどへるさまいとらうたげにおかしく源
氏おかしとみ給てまがふべくもなき心のしるべをおぼめき
給ふこそ中ゝあさき心ちすれとのたまふ おぼめくとは
あやしむる也
れいのいづこよりとうてたまふことの葉にか「あはれおほ
くこしらへ給てかきいだきて我かおましへぐそくし給へり
中将といふめしつかふねうはうもしたひきたれともかほに
もくゆりかゝるやうにかほりみち給へはうたかひなくけん
しの御事とおもひよりぬなみゝの人のならばこそひきもか
なぐらめそれさへ人のあまたしらん事かたはらいたしかな
たこなたもわりなきに女はいとなやましくおほゆとかくの

49ウ

49オ

給へともありしながらおやのかげとまれる」ふるさとなら
はたまさかにもまちつけたてまつらんは御なさけもおかし
くおほゆへしいまはかくしなさだまりたる身になりぬれは
中ゝおかしきさまをみえたてまつりてもなになるへき
身ぞと思ひさだめてつれなくのみもてなしたり人がらのた
をやかなるにつよき心をしるてくわへたればなよ竹の心ち
してさすがにおるべくもあらずいと心やまし女もなみゝ
みの事也
ならぬ人の御ほどをみしらぬ「やうになさけなきもかつは
かたじけなくとりかへす物ならねど身のしなのくだりたる
をおもひてなくさまいとらうたし 引哥 とりかへす物に
もがなや世の中をありしなからにわか身とおもはんと云哥
の心也 鳥もしはゝなけは源氏
あはぬ
つれなきをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬまて
おとろかすらん 女
は、
身のうさをななくにあかてあくる夜はとりかさねてぞ
ねもなかれけるあかうなれは」しやうしぐちまでをくりい
れて引たてゝわかれ給ふほとへだつる関とみゆ
引哥 あふさかの名をばたつねてこしかともへたつるせきの
つらくもあるかなと云哥の心也
引哥 わかさなるのちせの山の後に又あはんかならず今日な
らずともなに心もなき空のけしきもたゞみる人からずぐく
もゑんにもおほゆる物なればかへりみのみせられて又かゝ
るつるてのかたからん御身のほとをくるしくおほして帰給

ぬ殿におはしてうちふし給て」も御めもあはずさてもおか
しかりつる人かなくまなきすきものゝいひし事はまことな
りけりとしなさだめの馬のかみをおほしいでけり御文をつ
かはすべきたよりをおほしめぐらすにかのおとうのちごを
めしつかはんとかこ付てこいとけり給て大やけへもたてまつ
り御子のやうにあつかひ給ふさてあね君の事くはしくおほ
せしらせて御文もたせておこせ給へり女いとあさましくこ
子の
「この」のおもふらん心もかたはらいたくつらくてなみたも
いできぬさすかに御文をはおもがくしにひろげたりいとお
ほくて

52ウ

源氏 みし夢をあふ夜ありやとなけくまにめさへあはでぞこ
ろもへにける ぬる夜なければとめもおよばぬ御書ざまも
めもきりておほゆきりふり
たる心也

引哥 恋しさをなにゝつけてかなぐさまむぬる夜なければ夢
にたにみず云哥の心也

53オ

女 かゝる御ふみみるへき人もなしときこえよといひて御返
しも申さず又くもあればのちには御返し申たりかくても
やむまじくおほしめしてうちよりまかで給ふさまにもてな
してそのかたのいみをまち付てみちよりすぐにかのきのか
みが家へ御方たがへ又ありいあるしはやり水のめいほく
と悦かしこまり申けりひるよりおんなのかたへはかくおほ

したばかりよし御せうそこあり御心さしのほどはかたし
け」なけれどきてまちつけきこえん事はかたはらいいたけれ

53ウ

はこ君がみぬまにわた殿なる女はうのつほねへいでちがひ
申たりこよひもあひたてまつらずこ君と也
は、き、の巻の内に二度御方たかへあり

源氏いとねたくくちおしくおほして

は、木、の心もしらでその原やみちにあやなくまとひぬる
かなきこえんかたこそなけれとの給へりこ君いとおしくか
たしけなくてねぶたくもあらでまとひ」ありく女もまどろ
まれさりけり御返し

54オ

木すゑにすぐれたる枝を簪木と云ふそよりはみえてその本へく
れはみえぬを女のあはぬによそへ給

数ならぬふせやにおふるなのうさにあるにもあらずきゆる
は、き木 は、き木の本哥は その原やふせやにおふるは
ゝき木のありとはみえてあはぬ君哉とあり此歌ともゆへ女
をもちゝはほんにはゝき木ともあり巻をも名付たりは
しめの御方たがへは品定と夜ならびなりのちのも同夏也
中川の御かたかへ一度とはろんずべからず

付合心へ給へしやかて夜のうちにほんはならひへうつりぬ
以上十四首

54ウ

井 空 蟬

ねられ給はぬまゝにこ君をちかくふせ給てよろつにうらみ
かつはかたらひたまふわれはまだかく人にくまれても
けんし
ひ

ならはぬをこよひなんうしとしりぬれははつかしうてえな

がらふまじくこそ思なりぬれとのたまへは涙をさへこぼし

てふしたりいとらうたしとおほすかくてもなをわすれかた

くねたくもうれたくもおほしわびてこそ君をかたらひ給ふ

さりぬへからんおりをみてたいめんすべくたばかれとの給

へはおさなき心にいかにしてかとおもひるたるにきのかみ

くに下などしておんなどちのどやかなるころ夕やみの道

たどしきまぎれに引哥夕やみは道たとし月待て

かへれ我かせこそそのまにもみんと云哥心也こそ君が車にひと

つにたてまつりて門なときぬさきにといそきおはします

わらはなれはとのゐ人なともことにみいれついでせうせす

心やすく君をはわた殿にたて奉てわれはかうしたき

しりていりぬごたち心へ給へし庭のけしき木の事いゑやしき

後達とかめたり

あらはなりといふこ

君なとかあつきにかうしはおろされた

るととふめれはごたちひるよりにしの御かたのわたらせ給

て暮うたせ給といふきのかがひとつはらのいもうと也

のかたにはまむすめ也後に軒端の萩也

源氏き付給てきてむかひ居たらんをみばやとおほして

やをらあゆみいてかうしとみすとのあいにいり給へりこ

きみがいりしかうしをたてねはにしさまにかくれなくみゆ

火かくともしたりもやのはしらにそばめる人や我か御心

はき、かくる人ならんとまつ御めとめ給へはかしらつきひたい

きほそくちいさくてもものげなきけしきそしたる手つきやせ

56

紅也

にいていたふ引かくしためりこきあやのひとへめく物に

なにくあらんうへにきてかほなとはさしむかひたらん

人にもみゆまじうもてなしたりわろきかたへよりたるかた

ちをいといたふもて付て心ある人かなと人のめをもとめ

つべきさまに心にくきもてなし也いひとりはひんかしむ

きにてかくれなくみゆそろかなる人のかしらつきおもや

う物しくあざやかにかみのさかりばかたのわたりなと

物きよげにすべてねちけたる所なくむべこそは理宜いつ

れもむべ也

おやの二なくおもふらめと御覽すとほんにあるはおやの一に

もことはり

しろうきうすものひとへにこうちぎだつものないがしろに

きなしてきざらんよりは

くれなるのはかまのこしひきゆい

たるきはまてむねあらはにすこしはうそくなるもてなし也

しろふつぶとこゑて物いひたはふれてゑわらひなとし

たるいとあいぎやうづきおかしき人さま也暮うちはてけ

ちさすわたりこのむすめは心とげにみえてさうとけは戯

と書てさうとくとよむたはふれたる跡也

おくの人はしつかにのどめてまち給へやそこちこ

そあらめこのわたりのこうをこそなといへどむすめはいで

この度はまけにけりすみの所いくらくとおよひをか

づめてとをはたまそよそとかさうるさま伊よのゆの井げた

大ゆひ也

はき

はき

はき

はき

はき

はき

はき

はき

はき

はき

はき

はき

57

56

もたどくしかるまじうみゆいよの國のゆは三つならびてある
おきのけたはいくらもおほし

引哥 いよのゆの井げたはいくつひたり八つ」右は九つ中は

58オ

十六と云哥は此心也 いよの介かむすめなるゆへこの引
事あるにや

暮うちはてうちそよめくをとしるくきこゆれはこ君がま
いりたるをいりてたばかれしつまりぬなりとの給へはこの
たひはひんかしのかうしたゝきのゝしりていりぬあねの心
はたはむ所なければいひあはせんかたなくてゝねたらん
ところへいれたてまつらんとおもふなり 小君 まろははしにね
たらん風ふきとをせとてたゝみひろげてふす

58ウ

引哥 風ふけと人はいひて戸はさゝじあけんと君にいひて
し物をと云哥の心也

さて火あかきかたにはびやうぶひろげて人しつまるほとに
やをらみちひきたてまつるきちやうのかたひらをうちあけ
てみじろきより給ふけはひしのひ給ふとすれどしづまりぬ
る夜の御ぞのけわひいとしるしおんははわすれ給ふをうれ
しき事におもへどゆめのやうなりし御けはひをわするゝと
き」(マ、) なけはひるはなかくらし夜るはね覚がちなる比にて
ふときゝ付たりかほをもたけてみるに木帳のすきよりほの
かにみゆるにあさましくてやをらおきいでゝすゝしなるひ
とへはかりをきてすべりかくれぬまゝむすめそはにねたり
けるがわかき人にてとくねいたりけんしはいり給てひと

59オ

りふしたるを心してけりと心やすくおほされてきぬをし
やりてより給へるにありしけは」いよりはものゝしくい
つよくねたる事也

59ウ

きたなきけしきなとをみあらはし給てあさましくねたくお
ほさるゝ事かきりなし人たがへとたとりてみえてははゝき
ゝの所くるしかるべければたひゝの御かたたかへに心を
かけ給しさまにぞ心うつかしうかたらひ給ふまた世なれぬ
は

ほとよりはざれたるかたにてあへかにもおもひまとはすな
あへかとはおきなひれたる也

心をかぬてい也

にの心ふかき事もなくうらなきけしき也御心とまるへきた
よりもなき心ちしてなをかのうれゝたき人の心をおほしい
つかうしうねき人はありかたき物をとつれなくしもわすれ
かたふおほさる夜ふかくいて給ふとてかの人のぬきすてゝ
を
おき出たりしこうちぎをとりにて給ふこ君がみちにふし
を

60オ

たるをおしおとろかしていて給ふぬこのうちぎをぬきをきて
ははいかくれたるをせみにた

とへたりこよひをもぬけの夜とい
へり暮軒端の荻には付合なるへし

おなし女なからかたたかへに暮付へからす

このあかつき又しのひありきはあやうきとみせ」たりこ君
とけんしといて給ふをあかつき月夜のくまなきにおいたる
ごたちみつけてあれはたそと事ゝしくとふいとにくゝて
まろぞとこ君こたへたりこのおいごたちこの戸よりいづれ
ばけんしはわたとのゝ戸口にかいそひてたち給へるをこの
は

60ウ

女房われどちの中に少輔のおもとゝてたけたかき女房あり

その人なりとおしあてにおもひてさしよりていふやうおも

とはいつよりうへにはさふらひ給ふおとゝひよりはらをや

みていとたへかたければ人ずくななりとてめししかは夜へ

まうのほりたりなをえたう」ましかりけり^{返事をはきか}とて。あらはら

いまきこてんや^(補入)けんし^{61オ}とてすきぬなをかうるありきはあやうかりけりとおほ

しこりぬへし殿に帰給ていそき御すゝりめしてさしはへた

る文にはあらで御たたう紙に御手習に

源氏 うつせみの身をかへてけるこのもとなを人がらのな

つかしきかなとあるをこ君ふところに入てもたりさと

に行たればあね君まちうけていみじうあはめ給ふひたりみ

きにくるしうとはあけんしにもあねにも^{61ウ}この御たたうかみ

をみるにさすかにしのひかたくてこの御手習のかたつかた

の事也^{かたはし}

空蟬の羽にをく露の木かくれてしのひくぬるゝ袖

かなときこえたり とり給へりしきぬを伊勢をの海士のし

はたれてやなとたゝならすおもふへし

引哥 はつかしやいせをのあまのぬれ衣しほたりと人やみる^(マ、)

らんと云哥の心也

并夕顔

一 六条わたりの御しのひありきのつるてとは「源氏の御お

ちにせんはうと申て春宮にてかくれ給し宮おはしますその

ねうこひめみやをたゝ一人もちたてまつりて後家にてはた

ちはかりよりおはします六条の御息所とのちまて申はこの

御事なりけんしにはふる御おぢよめなるへしよろつによし

ありゆへくしき事人にすくれ給へればけんし御心をつく

してなひかし申給へり御としもけにはすぐしてましませは

うちとけ給事もいかゝあらん心ふかき御ちきりなりけんし

も」よそくなりし時は御心をつくし給しかとさすかに人

めにてゝ北の御かたとはみせ給はねはほんに六条わたり

の御忍ありきとはあるなり

のちまてきたある人^也

源氏その御みちつるてに五条わたりに一の御めのと大貳の

君といふが家あり^{か母也}心ちわつらひてあまになりぬる

62オ

62ウ

63オ

すこしし出給てみわし給ふにきりかけだつ物にいとあを
きかづらの心ちよげにはいかゝりたるにしろき花ぞ」おの
れひとりゑみのまゆひらけたるをちかた人に物申すとか
すさみ給ふ心は

引哥 うちわたすをちかた人に物申すなにそのそこにしろく
さけるはなにの花そもと云哥の心也又きりかけはへいの
おほいなとにある物なり だつはれいのそれやうなると
云心也へいのおほるやうなる物にゆふかほをはいかゝら
せたる也

この御口ずさみをみずいじんきゝとがめて御車のもとにつ
い(補入)
ゐてこのしろくさけるをなん夕かほと申侍るなは人めき

てかくあやしき」かきねにのみさき侍ると申せはけにこの
もものもおもてか ね つかはねのこのもものかけはあれ
ど君のかけにますかけはなし
軒のつまゝといはれまとはれたり一ふさおりてまいれとの
給ふへりらんあるへからす

このすたれしろきいゑによりておる門はしとみのやうにを
しあげたるみいれのほとなく物はかなきすまひのさまをあ
はれにいづこかさしてとおほしなせは玉のうてなもおなし
事也 引哥 よの中はいづこかさして我かならんゆきとまる
をぞ宿とさたむると云哥の心也」さすかにぎれたるやり戸

64ッ

り是はかりそめにしなしたり
口より

うへはらはとあるはおしなへて少女也この女はあこめと
ていまほと僧の着給ふ衣のかみのごとくなる物をうはき
にする也袖はながくてそてのきは二寸はか 色ゝのあや

おり物から物なとにてきせ給也四季又おりによりていて
たちあり 六人又は四人おなしやうにてめしつかふ也殿
上人なとのかたへもみゆる物なればさるへき御すまひに

はなくてはかなはぬ任人也このあこめより下にもからき
ぬきてその間にかざみていふ物をさる

記して云かた袖ある物也あせをのこはんためにあり う
はきのあこめより中へかみをはいるゝ也又おとこの御か
たにうへわらはとあるはさしぬきなとをきせてめしつか
ふ也じゆりやうの人ゝの子ともあり

このやり戸よりすゝしのひとへくれなゐのはかまながや
かにきなしたるうへはらは出てうちまねきてけんしのみすい
花おるをま ひあふき也 たきしめたる也
ねきたり しろきあふきのいとうこしたるをとらせてわ
らはのこと葉にえだもなきけな華なめるをこれにをきて
をまいらせ給へと云すいじんこのあふきに花をゝきてこれ
みつしてたてまつらす御めのともとへおはしましたれ

はむこ子とおほくあつまり居たるほとにて。わたりおは

かく
大貳乳母

65ウ

し」ましたる事を又なき事にかしこまり申すあま君もおき
ゐてそゝろになみたがちなるを子とはみくるしくおもひ
てそむきにし世のさりがたきやうに身つからひそみ御覽ぜ
られ給ふときしろいめくはすしなとしていふ事也又まぐは
源氏いとおはれとおもほしてさらぬわかれはなくもがなと
てをしのこい給ふ御袖のにほひ所せきまでかほりみちたり
とあるは

引哥 よの中にさらぬわかれのありときけ」はいよ／＼みま
くほしき君かなと云哥の心也

66オ

いて給ふとてこれみつにしそくめしてありつるあふきこら
んすれはもてならしたるうつりがしみふかうておかしすさ
み書たり

女の手
にて

心あてにそれかとぞみるしら露のひかりそへたる夕
かほの華そこはかとなくかきまきはしたる手もゆへづき
たれはおもひのほかに御心とまりぬけんしをは光きみと申ぞか
申たるはをしあてにけんしとみなしてきこえたりいせつつありと
ももちいへからすけんしの御光によせてたてまつりたるあふき也

66ウ

これみつにこのにしなる家はいかなる人のすむぞとくはし
くとは。せ給へはとなりの事もえきゝ侍らすとにくげに申
なからやどもりの物よびてといきく 揚名
のゝ家也おとこはいなかへまかりてめはわかく事このみて

みやつかへ人なといで入と申たり このやうめいの介は源
氏の三ヶの大事の一ツ也

けんし

にくからずすくしかたかくおほして御たたうがみにあらぬす
ぢに書かへ給て けんしの御てと
みえぬやうに也

源氏 おりてこそそれかともみめたそがれに「ほの／＼みゆ
る花の夕かほこのあふきのゆくゑよりゆかしくおほしめし
てこれみつのほのものととなりなれば心に入てみよとお
ほせあつたり

67オ

夕かほに中がきのかいまみといふはこの事也これ
みつわがけしやうずるやうにふみなどやりてこと
のやうを見たり

そのゝちはこのしとみのまへわたりし給にいにしへにかは
りて御めとまり給ふつねに

一 六条のみやす所へおはします道也みやす所の御かたに中
将の君といふ女房ありきりふかきあした御息所の御もとよ
り源氏あさがへりし」給ふあさけの御すかたいひしらすな

67ウ

まめかしせんさいの花ともさきみたれたるを過がてにやす
が

ヒ

らひ給ふ うへ童のおかしけなるがさしぬきのすそ露けく
花のなかにまじりてあさかほ折てまいるほととゑにかゝ
まほし中將のおもとしほん色のもあざやかに引ゆひたるこ
しつきたをやかにてらうのかたまで御をくりにまいれりけ
んしみかへり給てすみのまのかうらんにしは」し引すへ給

68オ

へりうちとけたらぬもてなしかゝみのさかりばなとめさま
しうとみ給ふ

ヒ

うちとけてはあらぬ也 名
けんし さく華にうつるてふなはつゝめともおらで過うきけ

さのあさかはいかゝはすへきとて手をとらへ給へはいとな
れとくなれては
ヒヒしつけ也

中将 あさぎりののはれまもまたぬけしきにて華に心をとめぬ

とそみると大やけ事にみやす所の御事に申なしたるを心あ
りておほさるへし

一 まことやこれみつがあづかりの中がきのかいま」みはい

68ッ

とよくあないして申せはけんしうちゑみてゆかしとおほし
たりこれみつ御ことはりの御身とおもひきこゆ世の人のな
ひきたてまつるさま御かたちよりはしめてすぎ給はさらん
はさうくしくなげなき事ならんとおもへはとかくたは
かりまどひありきて五条わたりの夕がほの宿へおはしまさ
せそめてげりその程の事くだくしければこまかにかゝす
碑細いやしくこまか

69ッ

しつまりておはすればかほもみせ給はすあかつきもとくか
へり給へは御あともしらすさすかに此人のあはれにみすて
かたく覚給へはすこしへたて給ふ夜はくるしきまでけさの

夕かは

まもおほつかなく御心にかゝりたり女のさまいとやはらか
にたをくとして物なといひたるも心くるしきまでらうた
げ也おもりにかどくしくはみえねどあてにうつくしけ
なり」いざ給へこのわたりちかき所にて夜をたに心やすく
あかさんとむかへとらんとおほしてかたらひ給へは 女
うにはのたまへど世づかぬ御もてなしなれば物おそろしう

69ッ

こそあれときこゆけんしげにとなをゑまれ給ていつれかき
つねならんたゞばかられ給へかしとの給へはさもありぬ
へくおもひなひきたり

一 八月十五夜もこのやとにとまり給へりこの女はうはこじう

まよのしなきたためになてしこに付てふみおこせたりしとかた
し女はうなり「夕かはのうへ」ト注北のかたよりをどしてい
ふ事ありしにをおちてむすめ「玉かつら」ト注をはにしの京
のめのとのもとにをきわか身は五条わたりにかくれるてかやう
にはかなきたよりけんしに契たり

70ッ

くまなき月のひまおほかるいたやにのこりなくもりきてみ
ならひ給はぬすまひゐのめつらしきにあかつきちかくなり

としよりたるおとこ也 理由は也

にけりおきなびたるこゑにてぬかづくぞきこゆるたち居の
けはいたへかたけにおこなふをあはれにあしたの露にこと
ならぬ世になにをむさぼる身のいのりにかときこしめすみ
たけしやうじん」なるへし南無たうらいだうしとそおがむ
なるけんしかれきゝ給へこの世とのみはおもはぬなるへし
吉野のみたけ也王こんけん本地みろく菩薩也

70ッ

御哥 うはそくがおこなふみちをしるへにてこん世もふかき

たかふなイ

ちきりたえすな
ちやうせいてんのふりたるためしはいまくしくおほして
はねをかはんとはひきかへみろくの世をかねたまふ行
さきの御たのめいとこちたし ちちたきとは物
夕かほ さきの世の契しらるゝ身のうさにゆくすゑかねてた
のみかたさよこほくとなる神よりもおとろくしうふみ

71ッ

ならすからうすのをとあなみゝがしましとこれにおほさるゝなにのをとなひともきゝ給はすかへの中のきりゝすたにまどをにきゝならひ給へる御みゝにさしあてたるやうになきみたるゝもやうかへてめつらしうおほさるゝも御心さしのひとつのあさからぬに「よろつのつみみなきゆるなるへしほとなきせんさいにざれたるくれ竹うへて露はかゝる所もおなし事きらめきたりこのあかつき御車よせてうちのせ給てちかきあたりなるなにがしの院と云所へいさな給へり

引哥 山のはにいさよふ月をいてんかと待つゝをれは夜そふけにけると云心のやとの付合也

一 なにかしの院へおはしますみちにて源氏

源氏 いにしへもかくやは人のまとひけん我が「まだしらぬしのゝめの道 御返し女

夕かは 山の端の心もしらてゆく月はうはのそらなるかげやたえなんこの院は六条かはら也ひさしく人もすまぬひろき所のさひしきなれは女はいと物おそろしとおもへりあれたるやとのしのふ草しけりいけもみくさにうつもりて前さいは秋の野ら也

引哥 里はあれてのき葉ふりにしやとなれや庭もまかきも秋の野らなると云哥の心也

けんしげ。うとけになりぬる所かなざりとも鬼なともわれをはみゆるしてんとたまふたれとしらせ給はぬを女いと

つらしと思ひたれとはことほりとおほして八月十六日の夕つかたうちとけならひおはしましてけんしなりとのたまふ哥

源氏 夕露にひもとく華はたまほこのたよりにみえしゑにこそありけれ女しりめにみをこせて女房ぐしたり

夕かは ひかりありとみし夕かほのうは露はたそかれときのそらめなりけりこれみつたつねまいりて御くた物まいらすこの院よりも御殿人なり人めもたえて心やすくおき中川と契給ふよりほかの事なし

引哥 にほ鳥の奥中川はたえぬとも君にかたらふ事つきめやとは云哥の心也

かうしとくまいりておほとなふらまいらせなこりなくうちとけ給へれば女もよろつの「うれへをわすれてうちとけゆくもらうたしよひすこしするほとにすこしまとろみ給へる源氏の御夢にいとけうらなる女御まくらかみにゐておのれがめてたしと思きこゆるをはたつねもおほさでかくそゝろなる人をゐておはして時めかし給ふこそめさましくつら

けれと云てこの御かたはらなる人をかきおこさんとす物におそはるゝ心ちし給ておとろき給へれば御とのあふら」も

きえにけりむくつけくて御まぐらなるたちを引ぬきてうこんとてめしぐしたる女はうをめしよせてしそくさしてまいれとの給へとこれもおそはれてくらくていかてかまからんといふこのおんな君いみしくわなゝきまどいていかさまに

山ひとこ

せんとおもへり人をめさんとて御手をたゞき給へはこたまと
のをとのするも物おそろしくてけんし御手つからにしのつ
まとに出給ふ人めせは御こたへして「おきたり人ずくなな
る所にうちとけてねぬる物ともかなずいじんもつるうちし
てたえずこたへよとの給大内のたき口のとの申しの子も
こよひ御ともにさふらへはゆつるおなし　つき／＼しく引
ならしてびあやうしと云かへりいりてかいさぐり給へはお
んな君はさなからふしてうこんはうつぶしふしたりこはな
ぞあな物ぐるしの物おちやとてひきおこし給へはあせもし
と／＼なりていきも」せずなよ／＼とわれかのけしき也

75
オ

われか人かも
わかぬ躰也

からうしてしそくもちてまいりたりそのひかりにかの御ゆ
めにみえし女ふとおもかけにみえてきえうせぬむかし物か
たりにこそかゝる事はきけとめつらかにおほさるれどまづ
この人いかになりぬるそとおほす御心まとひに御身のうへ
もしられたまはすつとそひふしてや／＼とおとろかし給へど
ひへはてにければけはいもけうとくなりゆくうこんはあ
なくなる―しとおもひし心みなさめてなく事いといみしなん
過給しに天ぐたちの石つきをとらへしをお給はねはすなはちさりし事也
でんのおにのなにかしのおと／＼おひやかかしけんためしをお
ほしして／＼さりともしたつらになりはて給はじよるのこゑ
おとろ／＼しとせいし給ておほしめくらすにいと心あはた
／＼これみつめしにつかはしてまち給ふひさしさとせを
すくす心ちし給われひとりさかしき人にていだきもち給へ

るにこれみつのあそんのまいりたるにいきをのへ給てぞ」
かなしき事も覚給ふ

引哥　くる／＼まは千とせをすくす心ちしてまづはまことにひ
さしかりけりと云哥の心也

ひやうふのかみこ／＼かしこくらがりたるに火はほのかにま
だ／＼きてもの／＼あしをとひし／＼としてうしろよりよりく
る心ちす風はけしうふきてけしきある鳥のからこゑになき
たるはおそろしき山になくらんふくろうもこれなるへしと
きこゆこれみつ思ひめくらしてこの「院もりなともつ／＼ま
しければなくなりたる人をよそへうつきん事をいそくひん

76
ウ

かし山にこれみつか父のあそんのめとなるもの／＼あまに
なりておこなふ所へくしてゆかんとすかのあまはみつわく
みて待るをあたりもかごかなる所なりと申て夜のあくるほ
とに車よすした／＼かにもえせねはうはむしろにをし／＼み
たるにかみはなからかにさかりたるをこらんするもめもく
れておしくあたらし／＼おほさる」御心ちもいとくるしけれ
はや(補入)

77
オ

ど。御馬にて二てうの院へおはしまさんと申てくるまには
うこんをそへたり君はわれにもあらで二てうの院におはし
つきてむねをおさへておほすにいとみじなとてのりそい
ていかさきりけんいきかへりたらんときつらくやおもはん
とかゝる中にもおほさるかくいふは十七日也そのくれほと
にひんかし山よりこれ光まいりていまはかきりにこそ侍れ
あす日つゐてよろしく侍れはとかくの事」し侍らんたうと
ききらうそうにかたらひつけ侍りなんと申すにさてそいた
(マ)

77
ウ

りし女はとの給それなんえいくましく侍るけきは谷におち
いりぬとみえ侍りしをやう／＼こしらへ侍るときこゆけん
しいま一とながらんからをもみるへき事はたゞいまならて
は又いつの世にかありしかたちをもみんとこれみつをした
ひ給て御馬にてひんかし山へおはします十七日の月さしい
てゝかはらのわたり御さ」きの火ほのかに鳥辺のゝかた

78オ

みやら。て物むつかしきもなにともおほされすおはしつき
たれはいたやのかたはらにこたうたてゝおこなふあまのす
まいいとあはれなりこのあまの子の大とこゝゑいとたうと
くてどきやうよみおるになみたのこりなくおほされていり
給ふひやうぶ引つほねてうしろのかたにそうこんはふした
るいかにわひしからんとおほさるともし火とりそむけてみ
給ふまだいさゝかかはりたる」所もなくらうたけにさゝや
かにてありしなからうちふしたりけんし手をとらへてわれ
にいま一たひこゑきかせ給へいかなるむかしのちきりにて
かしはしのほとに心をつくしてあはれにおほえしもなかゝ
るましきゆへなりけりうちすてまとはせ給ふがいみしき
事とこゑもおしますなき給ふに大とこたちもたれとしらね
とあはれにてみな涙おとしあへりみつわくみての

78ウ

引哥 としふれは我かくろかみもしら川の」みつわくむまで
おいにけるかなと云心

79オ

右近をいざ二条へとの給へとおきなく侍りしよりかたとき
はなれたてまつらざりし人ににわかにわかれたてまつりて

うこん

けんし

いつこにか帰り侍らんけふりにたぐあてまかりなんと申す
けんし世の中はさのみなんあるわきなりける別といふもの
ゝかなしからぬはなきもの也思ひのどめてわれをたのめと
のたまふかくいふわれこそ又なからふましき心ちすれとの
たまふも」たのもしげなしやかへりみかちにて帰り給ふと
てつゝみのほとにて御馬よりすへり落ていみしく御心ちま
とふきよ水のかたは人のけしきしけくきこゆる寺／＼の
そやもおこないはてゝいとしめやか也これ光御心ちに心ま
とひして川の水に手をあらいてきよ水の観音をおかみて
まつり願なとたてたり御心にも仏をねんし給てたすけられ
ておはしつきぬるまゝいといたふなやみ給ふ」うちにおほ
しなけく事かきりなく御使雨のあしよりけにしけしよろづ
の御いのりすほうしゆほうどきやうまつりはらへとあめの
読経
したのさはきなり廿日余ひいたくわつらひ給てなか月にな
りてそおこたり給へるいとたゞよはしくものゝからのやう
にあをみやせてねをのみなき給ふをみたてまつりとかむる
人もありて御ものゝけにやとさゝめきあへりくるしき中に
もかのうこん」をめしよせてつほねなとちかくたまはせて
御心ちのひまにはつかひならしなとし給へはほとなくまじ
らるなれにたり色くろくふくらかにみくるしからぬわか人
なれはくちおしからぬ下らう女房に人もゆるしたりしつ
かなる夕暮にめしいてゝうちなきつゝよはげに物かたりし
たまふうこんに御殿つくりのさまをみわたすにもみちのや

79ウ

80オ

80ウ

う／＼うつろひたるけしきなとゑにかいたらんやうにおもしろきを」おんな君のかくておはしまさましかはとくちおしとしをいくつになり給しぞあやしくあへかにみえ給しも

81オ

なかゝるましき人にてやなといたたまふ十九にそなり給し

おやたちはやうかくれ給にき三位の中しやうときこえし

人の御むすめなりこのうせにし人はとう
の中將のかよし人も

さやうの事をもこのうこんかたりいつるにいとゝあはれま

さり給ふおさなき人はにしの京のめのとのもとになとくは

しく申すいかて世に」侍らんとすらんいとしも人にとうこ

んなく心は

81ウ

引哥 などてわがいとしも人にむつれけんしかならひてそみ

ねは恋しきと云哥の心也夕かほのやとのいやしかりしを思

いつるにはつかしきに君はかし。ましかりしきぬたの音を

おほしいつるさへこひしくてまさになかき夜とうちすんし

てふし給へり

引月(マ)月

八げつぎうけつまさになかき夜千せい万せいやむときな

しと云詩の心也

82オ

源氏 みし人のけふりを雲になかむれはゆふへの空もむつま

しきかなとひとりごちたまふあはれのみつきせずなん

一 ありしいよのいゑのこ君まいるをりもれいのやうに事付

もしたまはぬをおほしこりにけりと女はおもふ物から心ほ

そくて御なやみをも人しれす心もとなければ御文たてまつ

りたり うつせみ

文 とはぬをもなとかとはて程ふるに」いかばかりかはお

82ウ

もひわつらふますたはまことになんときこえたりけんしめ

つらしくおほされけり 引哥 ねぬなほのくるしかるらん

君よりもわれぞますたのいけるかいなきと云哥の心也

いけるかいなきやたかいはまし事にかとて

源氏 うつせみの世はうき物としりにしを又ことの葉にかゝ

るいのちよ御手もわなゝかるゝにみたれかい給へる中／＼

猶うつくしけ也

伊よのかみ国よりのほりてまづまいりたり」ふな道のしわ

ざとてふとりくろみてふつゝかなるもまばゆくおほされ

ける井けたはいくつとはまほしくなんむすめをはみきの

大殿ゝ御子にくらんの少將をむこどりたりのきほ
うつせみのぬけ
の夜けんし人だが

へにあひみ給しいよのすけか

むすめの事也暮うちし女也

さすかにいかゝおもふらんと心もなくおほしてたかやか

なる萩に付て御文ありいよの守の
むすめへ

けんし ほのかにものきは萩をむすはすは露のかことをな

にゝかけましとありいと心うしと」おもひきこゆれどおほ

しいてたるもさすかにて御返しくちときはかりにて

女ほのめかす風に付てもしたおきのなか葉は霜にむすほ

をれつゝ 此哥ゆへした萩なとも付へし 軒端の萩と云か

やうにありつけをきてうつせみをはくして伊よへくたるへ

きよしきゝ給てけんしいとあはたたくおほされてねうは

うのくたるたむけ心ことにいよのかみへもつかはし給ふ北

84オ

ほくつかはすととり給しこうちきをもいまそかへし給ふ
源氏 あふまてのかたみはかりとみしほとにひたすら袖のく
ちにけるかな 御返し

うつせみ せみの葉もたちかへてげるたび衣かへすをみても
イ夏衣

ねはなかれけりと申たり神無月のついたち比にくたれは心
ほそくおもふ夕かほの事もこの人のわかれもおほしつゝけ
て」いたくなかめたまふ

源氏 過にしもけふわかるゝもふたみちにゆくかたしらぬ秋
の暮かな

一 夕かほの四十九日ひゑの法花堂にてしのひたれどよろつ
え

事そかす七そこのふせなといかめしうせさせ給ふ事そかすとは
略せぬ事也り
やくするをは
事そくと云

これみつのあにの阿闍梨うけ給てたうとく仕けりこの人の
夕かほ

ためにでうせさせ給ししやうそくのはかまをとりよせて書
付給

源氏 なくくもけふは我かゆふしたひもをいつれの世にか

とけてみるへきとありこのほとまてはたゞよふなるをいつ
れの道におもむくらんとおほしやりてねんすいとあはれに
したまふ

以上 十九首
八
ヒ

記す

たむけとははなむけの事也 是にはなにをもいたす事
也 旅人をあはれまんとちかひ給ふ神のため道に花た

てなんとをたてゝおくにたむけをなす事華にかきるま
しき也 人によるへしさるによりて櫛扇をもおほくつ
かはし給し也

85
ウ

(第二冊)

光源氏一部譚第二 (表紙外題)

(空白)

三 若紫

并末摘華

四 紅葉賀

五 花宴

六 葵

三 若 紫

一 源氏わらはやみにわつらひ給てよろつにまじなるかぢなと
まいりたまへどしるしなくてあまたたびおこらせ給へはあ
る人の申けるはきた山のなにかし寺といふ所にしるしある
おこなひ人待りこそぞの夏も世の中におこりて人々まじなひ
わつらひしをやかてとむむるたくひおほく待ししこじらし
しそひら 待ぬれはいとあやにくに侍るをとくこそ心「みささう
かす事也 せ給はめと申ければめしにつかはしたり

所は紫明抄

なにがしでらとはなをさゝじとていへりしめいしよみゆ
へしなにがしの院といふもなにがしの僧都といふも名を
かくさんためにいへりわらはやみはおこりの事也まじな
うとはいまおこりおとすといふ事也これをまじなひたる
ひじりは大やけへはしられ申さぬほうし也ほんに北山の
聖と也

ひしりのかたよりのこと葉においかゞまりてむろのにも
えいで侍らぬよし申すけんしさらはいかゝはせんしのひて
おはします事也

ものせんとて御ともにもむつまじきかきりしてまだあかつ
きにおはしますやよひつこもりなりけり京の花はみなち
りぬるを山のさくらはまださかりにていりもておはするま
ゝにかすみのたゞずまひもおもしろしかゝる御ありきもな
らひ給はぬ所せき御身にてりたるを所せきと云
ほさる

山の桜の引哥 ふるさとの花はちりつゝみよしのゝ山のさく
らはまださかりにてと云哥の心也

北山

一 寺のさまもいとあはれなりみねたかく山こふかきいはの
中にぞひしりは居たりけるたれ」ともいはせたまはすいた
ふやつし給て御とも人もみなかりぎぬなれといとしるき
御ありさまなれはひしりあなかしこや一日めしたりにや
おはしますらんいまはげんがたのおこなひもわすれ侍りに
けるをとてかぢまいりさるへきふうつくりてすかせたてま
口てん也
つる日たけぬれどおこらせ給はねはさらはかへりなんと

給ふをひしりこよひはかりはかぢまいり給へ御ものゝ氣くはゝりてみえさせ給ふととゞめたてまつるかれたるこゑ

3ウ

のすきひがめるにてだらによみたるくうつきていとたうと

こうつもりたる也

し日もいとなくつれ／＼なれはしりゑの山にたちいでゝ

後

京のかたをみやり給へはかすみのたえま／＼絵にかいたら

けんし

んやうにうちけふりたるこすゑなり かゝる所にすむ人心におもひのこす事はあらじかしとの給へは

きた山のなにかし寺に物かたりの付合あるはこれ也なにかしのだけといふも名をさゝじとてなりいつかたへやりてつけんとも也

御ともの人々なくさめたてまつらんとてまきはしに申たり

4オ

これはあきく侍り人のくにと侍るうみ山なと」を御覽させ

繪

て侍らは御ゑいかにまさらせ給はんとて富士のやまながしのだけなときこえいづるもあり又にしくにのうら／＼のけしきなんとかたりきこゆちかき所にははりまの明石のうらこそなにのいたりふかきくまはなけれどゆをびかなる所に侍れたゝはまのさまをみわたすなとなんあやしうこと所にはかはりて侍るときこゆ 寛と書てゆをびかと也しまも岩もみえずゆたかにひろ／＼としたる心也

4ウ

はりま

のちにあかし

の上 入道すれはしんぼと云

かしつきたるさまかたすくれたる事もかたりいでたり心たかく思あがりてわがなみのむこをはとらじみやこのたか

き人にたてまつらんといふ心をたてたりこのおきつゝ心かなはでおやにをくれなはあまにもなりうみのそこにもいりねとをきてたりとかたれは人／＼かいらう王の后になるへきいつきむすめなりとわらふけんしもそのみるめもとの給ふ心は

引哥 あまのすむそのみるめもはつかしく」いそにおいて

5オ

るわかめをぞつむと云哥の心也

おこりましなひたるひしりにてはなし 付合心へ給へし

一 なにかしの僧都のこの二とせこもる坊なりとてつづらおりのしもあり引哥

さゝ浪や志賀の山路のつづら折くる人たえてかれやしぬ

らんと云哥の心也

源氏夕くれのかすみのまきれにおり給てこれみつばかりを御ともにてこの僧都の坊をかいまみ給へはゆへ／＼しきあ

ヨ

ま君四十あまりなるがけうそくのうへに経。をきてよみ居

5ウ

むらさき也

たりおとなしき女房ふたりちいさきおんな子ともあまた」

いていりあそふ中に十ばかりにやあらんとみゆるがうす色のやまふきなどのなよらかなるをきていてきたるかほいと

らうたけにまみのわたりうちけふりてはかなふかきやりたるひたいつきかんざしおもやうなとおひゆかんすゑゆかし

き人のかたちなりさるはかのあさ夕心にかけて恋きこえ給

ふ御まゝ母の藤つほの御かほにぞよくにたりけるそれゆへ

けんし

まばらるゝなりけりとおほすにもなみだぞおつるかほをあかくすりなして」なきたてりなに事ぞやわらはへとほらた

9オ

ち給へるかとしてあま君うちみあげたるかほすこしおほえた
にたる事
れは子なめりとみ給ふ 子にてはなし

むすめを一人もち給へりしがうみをきてかくれたる子なれば
あま君にはまこなるへし御ちゝはかの御まゝはゝの藤つほの御
あにせんでいのしきふ卿の宮のむすめなりされはふちつほのか
ゝやく日の宮とにはめいなるへしそのゆへににたる也のちまで

このひめ君をむらさきと云はゆかりのむらさきなり引哥紫の一
もとゆへにむさしのゝ草はみならむつまじきかなと云哥の心
也

三ながら也
尼公はそうつのいもうと也

ひめ君のこと葉にすゝめの子をいぬきがにがしたるふせご
の下にこめたりし物をとていとくちおしとおもへりいぬ
少女也 公は
おとな女房小納言のめのとゝいふはこの姫君のめ
へ童也

いぬきか事と

のとにやれいの心なしのつねにかゝるわさしてさいなまる
ゝこそ心うけれいつかたへまかりぬらんからすなともこそ
みつくれやうゝおかしげになりつる物をとてたちてゆく
うしろでかみいとながくよき女也あま公こちやとの給へは

むらさきのゝの事

ひめ君ついたりかみをかきなでゝ故ひめ君はこのとしの
ころは物おもひしりたりし物をこれはいとおさなくおは
するこそうしろめたけれどゝいまをのれみすてゝはいかて

7オ

世におはせんとすらんとてなき給へはさすかにふしめにな

むらさき

りてうつぶしたるかみのかゝりうつくしけなりけんしそゝ
ろにあはれにかなしとこらんすあま君をのけけふあすとも
しらぬをはなにともおほさすゝめの子したい給よつみつ

つみふかき也

る事ときこゆる物をとて

尼公 おいたゝんありかもしらぬわかくさをくらす露ぞき
えんそらなきとてうちなけは」又居たるおとなもげにとう
ちなきて

名は
なし わか草のおひ行すゑもしらぬまにいかてか露のきえん

とすらん このありさまをつくゝゝとこらんするにいとあ
はれにてこのひめ君をいかにしてもこいとて恋しき人の
御かたみにあけくれみはやとおほす御心ぞふくなりぬる
僧都は大やけへもつかふまつるそうにて君の御かたへまい
り給へり御やつれすかたをはつかしくおほしめせどくきの
御むしろをもこの坊に」こそはちかくよぎりおはしますを
過
いまつてうけたまはらぬはくちおしき御事とてやかて御と
入にさふらひ給ふ 引哥 いにしへのいもの庭にあまれ

8オ

りしくきのむしろも今日やしくらんと云哥の心也 天台大
師の御事なりといへり みなみおもてきよけにしつらひて
やよひつこもり也

月もなき比なればやり水にかゝり火ともしてとらうあまた
かけておかしきほと也 僧都世の中の御物かたりのちの世

8ウ

のふかき事なときこえしらせ給にも」我か御つみのほとお

ふちつほの御事也

そろしくあきなき事に心をしめていけらんほとこれをお
もひやむべきにもあらずとおほししるありしちこのおも影
恋しくてくはしくたつね給へはあま君はそうつのいもうと

紫

成けり心ちわつらひければ山ごりの所へたのもし人にお
もひてわたり給ふにひめ君もうばやしないなればひきくし
給へりそうつにもあま君にもねんころにのたまはすれどい
はけなきとしのほとをさもしらで」おほせらるゝと心へて

9オ

御いらへもすが／＼しくも申されす 速／＼と書てすが／＼
と也すみやかにの心也 僧都は阿弥陀ほとけおはする堂に
つとむる事侍り初夜まだつとめ侍らすはたしてさふらはん
とてまかりぬるひまにあま君のかたへたちよりてとたて
たるびやうぶをならし給へはあやしひがみ／＼にやとたどる

けんし

けはひをきゝ給ひてほとけの御しるべはくらきに入てもさ

けたかし

9ウ

らにたがふましくとの給ふ御こゑのわかふあてなるに」き
こえいでんことの葉もはつかし 従眞入於眞永不聞仏名の
心なり ひめ君の事をいひはしめ給て

源氏 はつくきの若葉のうへをみつるよりたひねの袖も露ぞ

かはかぬこのよしあま君につたへきこゆれば人つてはひん
なき御ありさまなればるざりいてゝ北山の

尼公 まくらゆふこよひはかりの露けさをみやまのこけにく
らべさならんそうつおはしたればびやうぶををして給へ
り初夜といひしかど夜いたふふけにけり雨のなこりの風す
こし」吹てたきのよどみもまさりをとたかふきこゆ法花三
昧おこなふ堂のせんぼうのこゑいとたうとく瀧のをとにひ
ゝきあひたり

10オ

源氏 ふきまよふみ山おろしに夢さめて涙もよほすたきのを
とかな御返し北山の

僧都 さしくみに袖ぬらしけり山水にすめる心はさきやは

するほの／＼と明行空いたふかすみてそこはかとなき鳥の
さへづり名もしらぬ木くさの花ともちりしきてにしきとみ
ゆるに鹿のたゝずみありくもめつらかにて」御心ちのなや
ましきまきればてぬ僧都谷のそこまでほりもとめていも
るの御くだ物御かわらけまいり給京より御むかへに人々ま
いりつどひたれば山水に心とまりて侍りぬれどうちよりお
ほつかなからせ給ふになんいま又この華のおりすぎさずま
いりこむとて

10ウ

源氏 宮人にゆきてかたらむ山桜風よりさきに來てもみるべ

くとのたまはする御もてなしよういもめもあやにめてたけ
れは

11オ

僧都 うとんけの花まちえたる心ちしてみやまさくらにめこ

そうつらねうへの室のひじりうこきもせねととかくたすけ
てめしたりかちまいりごしんなんとつかふまつる御かはら
けたてまつりてきた山の

護身 身かための事也

聖 おく山のむろのとほそをまにに明てまだみぬ花の色をみ

とつこ也

11ウ

るかなこじうとの頭の中將その御弟の弁の君など御むかへ
にまいり給へりひしり御まほりにとてとこまいらせ給」僧
都はしやうとくたいしのくたよりえ給へるこんかうしゆ
のすゝの玉しやうそくしたるをやかてかのくによりのほこ
に入てすきたるふくろに入て五ようの枝に付て又るりの壺
に御くすりとも入てふちさくらに付給へり所に付たる御を

くり物ともなりいみじき花のもとにしはしもやすらはでた
ち帰らん事と人々くちおしかり給落くる水の心はえゆへあ
るたきのもとにこけをおましにてなみ居給へりとうの中將

御座

ふところ」なりける笛とりいでゝふきすましたり弁少將

12才

あふきはかなくうちならしてとよらの寺のにしなるやとう
たふかつらきと云 僧都身つからさんの御琴をもてまいりて

これたゝ御手ひとつあそはして山の鳥をもおとろかし侍ら

んと申給へはなやましけにて岩により居たまへるさまめも

あやにてにくからすすしきかならしてたち給ぬあま君の

御かたへそうつの御もとなるちいさき童して

「12才

源氏 夕まくれほのかに花の色をみてけさはかすみのたちそ
わつらふ御返し

尼公 まことにや華のあたりはたちうきとかすめる空のけし

きをもみんあやしのほうしばらそのあたりの山かつまて

ひき出物の惣名也
まうけの物京よりまいりたはみなくばらせ給ふおいたる

あま君たちはましてまだかゝる人の御ありさまをこそみさ

りしつれといひあへり僧都はあはれなにの契にてかかはか

りの御ありさま」なからいとむつかしき日の本のすゑには

ひめきみの事本マ、
むまれ給けんとてなみたをしのこひたまふこのわか君もい

13才

とめてたき人かなとみ給て御ちゝしきふ卿のみやにもまさ

り給へりとのたまへは人々さらはかの御子になりておはし

ませよといへはうなづきてさもありなとおぼしたりその

ゝちは絵かきひいにつくるにも源氏の君とつくりいでゝよ

き衣きせてかしつきたまふけんしの御もとよりは京から御
文あり

「13才

源氏 おも影は身をもはなれず山さくら心のかきりとめてこ
しかは イ本とめてこしかど

御返

尼公 嵐ふくおのへの桜ちらぬまを心とめけるほとそは

かなき 是はひめ君への御せうそこなれともいまたなには

づをたにつゞけ侍らねはとてあま君の手にて申給へれば二

三日ありてこれみつを御使にてまめやかにきこえ給へり

たより也
ゆくての御事はなをさりにもおもひきこえしをふりはえさ

せ給へる御つかひに」いかにせんとのたまふけんしの御文

にたゝそのおさなきはなながきなん見給はまほしきとあり

源氏 あさか山あさくは人をおもはぬになと山の井の影はな

るらん 御返しあま君

北山 くみそめてくやしときゝし山の井のあさきながらや影

をみるへきとあり

一 この比ふちつほの女御なやみ給ふ事ありてさにおはす

れはけんしかゝるひまにたと心もあくがれまとひてうち

にてもさとにてもひるは」なかくめくらしよるになれば王命

婦をせめありき給ふわうみやうふとはふち いかざたばかりけ

んゆめのやうにてみたまつり給ふほとさへうつゝともお

ほえぬぞわびしきやあやにくなるみじか夜なれはなに事か

はきこえつくし給はんくらぶの山にやともとらまほしけ也

引哥 すみそめのくらぶの山にいる人はたどるゝぞ帰り

にけると云心也

源氏 みても又あふ夜まれなる夢の中にやかてまきるゝ我が身ともかなとむせかへり給ふもさすかにておほしみたれたるさまいと」かたしけなし御返し

15
オ

藤壺 世がたりに人やつたへんたくいなくうき身をさめぬ夢になしても此女御かやうになやみ給ふはけんしの御子をはらみ給へり

一 北山のあま君京の殿へ帰り給へりとときゝ給てけんしおはしたりみたり心ちくるしとてえたいめんもなしむらさきの

尼公の事

こゑにてうへこそてらにおはせしけんしの君こそおはしたれなと見たまはぬぞとつけ給ふを」ときこゆ人ゝあな

15
ウ

まなといふなるへし又のたまふいさとよみしかば心ちのあしきもなくさむとの給しかはいふそかしとのたまふめのかたはらいしとおもへれば帰給ぬあしたにつかはす

源氏 いはけなきたづの一こゑきゝしよりあしまになつむ舟そえならぬ 舟の行やらぬけしきとみえたり 心ちくるしうてたゝいま北山へわたり給ふとて返しなし

一 秋にもなりぬ人やりならぬ心つくしに思みたれ給ふ事おほくて北山へひさしく」をとつれ給はさりけりおほしいて

八月也

16
オ

ゝ人やり給へれば僧都の返事のみそあるたちめる月の廿日のほとになんつるにむなしくみなし侍るせけんのだうりに侍れどかなしひおほえ侍とあり世の中のはかなさもおほししらるさてもいまはともかくもはからふへき人にこそとおほして御てならひに

源氏 手につみていつしかもみむ紫のねにかよひける野への

わかくさひめ君はめのとにくして」京の殿へいて給へはけ

16
ウ

んしおはしたり少納言の。うちなきつゝ御ありさまきこゆるにあいなくけんしの御袖もたゞならずひめ君をみたてまつらはやとて

源氏 あしわかのうらのみるめはかたくともこはたちなからかへるなみかは御返し

少納言 よるなみの心もしらでわかのうらにたまもなびかんほとそうきたるときこゆるさまのなれたるにそなくさみ給ふなれたるは」あられふり風はけしくて物おそろしき夜の

17
オ

さまなれはその夜はとまり給へりひとへの御ぞををへたて

ゝ御ふところになき給へはひめ君いとむつまじとおほせ

か

どさすかにこゑたてゝはなき給はすめのともうしろめたくてちかくふしたり夜ひと夜風ふきあれてげにかうおはせさ

らましかはいかに人ずくなにさひしからんとおもふにもおなしはいますこしなぞらいなる御としのほとにおはせまし」かばと人ゝはさゝめきけりちゝみやの御もともまゝはゝにておはすれば心やすからん事かたしけんしは夜ふかくいて給ふも事ありかほ也

17
ウ

一 そのみにしひてかよひたまふ所ありければ霜ふかきあけかたにておかしき空なるに門をたゝかさせ給へときゝつけねはみすいじんのこゑあるして二かへりはかりうたはさせたまふ

御隨身

源氏 あさほらけ霧たつ空のまよひにもみてすきかたきいも

18 才

が門かなうちよりよし」あるしもづかへをいたしてこのかへしをひかけさせていりぬよみ人しらす

女 たちとまれきりのまがきのすきうくは草の戸ざしにさは

げんし けさはふみやり給ふにもかくへきことの葉も

りしもせじ けさはふみやり給ふにもかくへきことの葉も
なくてゑなんとをぞたてまつり給そのうち二三日ありてち
々みやへむかへとらんとし給よしけんしきこしめして又御
身つからおはしてかきいたきてくるまにうちのせて二条の
院のにしの「たいへむかへとり申給へりち々みやにはめの
とがゆくゑなくゐてはぶらかし申たるとぞこたへけるしないう
たる心也もんじはしめいしよ
にあるへし」
ヒ

18 ャ

一 けんし二三日はうちへもまいり給はすこの人をなつけあ

(マ)

りくしくもてなしたまふやうくなくさみて物いひわつ

らひなとしてひいなあそひをもけんしもろ友につくり給へ

無越

はこよなきものおもひのなくさめなりてほんかきてならは

19 才

せたまふむさしのといへばかこたれぬと」むらさきのかみ

のはだこまかなるにかきたまへるすみづきめてたきをひめ

君とりてみたまふ 引哥しらねと武蔵のといへはかこた

れぬよしやさこそはむらさきのゆへといふ哥の心也御てほ

んのかきたまふ

ヒ

源氏 ねはみねどあはれとぞおもふむさし野の露わけわぶる

草のゆかりをとかきて君もかきたまへかしとの給へはまだ

えよくもかゝずとてうちみあげたまへるまみのうちけふり

たるがいみしううつくしければわれもうちゑ」まれてよか

19 ャ

らねどむげにかゝぬこそわろければをしへきこえんかしとの

給へはうちそばみてかきたまふ手つきふてとり給へるさま

もおさなければいみしくらうたしと御覧すかきそこなひつ

とせちにかくし給をとりて見給へは

むら かくつへきゆへをしらねはおほつかないかなるくさの

さき

ゆかりなるらんこあまうへの手にゝてふくらかにおいさき

みえてかき給へり」けいしまん所よりはしめてことにわき

ておほつかなき事もなくもてなしきこえ給へは僧都は人し

れすうれしとおほしけりち々宮はうしなひておしくあた

しくおほしけり

20 ャ

以上 廿五首

井末摘花

一 おもへども猶あかざりし夕顔の露にをくれしほとん事の月

日ふれとおほしめしわすれずこもかしこも心ぶかうなま

いどましきうちとけぬ人のありさまのわつらはしきに「ゆ

ふがほの上のけちかふなつかしかりしけしきになる物なく

恋しくおほしいてらる うちにたゆふのみやうふといふは

源氏の御めのごとなり

20 ャ

一 故ひたちのみやときこえしはけんしの御そんとはほんに

なしいかさまに王子にてましきけりかくれ給し御あとに

すへつむ

ひめ君おはしけり心ほそくてなかね給ふよしこのみやうふ

かたり申たりきんのことをひき給ふと申せはけんし三つの

ひと種さけの事也

琴

ともにていまくさやうたてあらんとたまふ心は「きん

今くさは

きん

詩酒

ししゆ三つ也 このひめ君さけをあいたまはうたてか

らんとおほせらるゝ心也このみやうぶをさきにやりてきん

のすゝめさせてけんしあとにつきておはしてたちきゝ給又

こじうとのとうの中將いつくへおはすらんとあやしくて御

あとにつきてこゝにきてかくれたちたりけんし中將とはお

ほさでたれならんみえじとおほしてやをらあゆみのき給に

ふとよりきてすて給ふがつらさに御をくりつかふ」まつる

21ウ

はとて

中將 もろ友に大うち山はいてつれど入ルかたみえぬいざよ

ひの月たいりをつれ

出給し也

源氏 里わかぬ影をばみれどゆく月のいるさの山をたれかた

つぬるそのゝちはかなたこなたよりふみやり給へともたえ

て返事なしかやうにさひしきすまひの人は木くさの花に付

てもゆへあるさまにことかよはしたるこそあはれなれちゝ

はゝのかしづき給し心のまゝ」あまりなさをくれれたりと

22オ

たれもおほしてけんしは中將にとられじとみやうふをせめ

給ふとかくして物ごしにまづたいめんし給へりちかきいら

へもなし

このひめ君は大かた心をくれにて人に物いふやうなしり

あ

給はすたゝはつかしきはかりにてふるめかくおほしけ

ヒ

り

源氏 いくぞたひ君がししまにまけぬらんものないひそとい

はぬたのみにこのししまけんしのこの返事もえきこえ給はね

七ヶのひじの一つ也

侍従

はひめ君の御めのと手にしじうと云女房かたはらいたしと

おもひて」さしよりて人づてにはあらぬやうによみなした

22ウ

りわかやかなるこゑにて

侍従 かねつきてとちめん事はさすかにてこたへまうきぞか

つはあやなきけんしおもひなしあまへたり中くちふた

がるわさかなとて又

源氏 いはぬをはいふにまさるときゝなからをしこめたるは

くるしかりけりとちめんとはものゝその夜けんしひめ君のか

すへつむ

たへあひ見給へりなまいとをしく心へぬ人の御であたり

也」なにゝ付てか御心とまるへきうちうめきて夜ふかくぞ

いて給ふく。しやとはかゝる事をやいふらんとけんしは物

23オ

ごりし給ふへしこうてうの御文も夕つけてぞまいりたる

源氏 夕きりのはるゝけしきもまだみぬにいふせさそふるよ

ひの雨かな雲ま待いてんほといかに心もとなきとありおは

しますましき御文なるを人くむねつぶるれとさうしみは

中くなにとも心へ給はさりけり 正身とかきてさうし

み也しやうじもとよむへし男をも女をもしゆじんをしや

うしみといふ也しやうるん同心なるへし

御返ししくちくせめられてむらさきのかみのはいをくれた

23ウ

いにくれたと也

るにかみしもひとしかき給へりにほひはかりはふかくし

紫にかきりて色わるきをは

いにくれたと也

るにかみしもひとしかき給へりにほひはかりはふかくし

みたる紙也

女君 侍従をしへたり

はれぬ夜の月まつさとを思やれおなし心になかめすともこのうたもえつゝけたまはねはしゝうぞをしへきこゆるけんしは人の御ほとのをしければ御ななくちぬほとにと人めのかざりはかりはつねにわたり給ふ」さても手あたりのたどゝしはおほつかなければ御かたちをみばやもしうちとけまさりのいさゝかもあらはいかにうれしからんとおほすぞあなかななるやふゆになりて雪ふりたるにさひしきやどのあはれをおほしやりてわたり給へりよひのまをかいまみ給へともひやうふ木帳などはみだれずゝけまどいたれどたち所はけたかし女房とのあさましき四五人御たいひしよくやうの物ともろこしものなれと」人わろ

そんじたる也
24ウ

かすにいらぬ也 御だいはかげはんやうの物なるへしきになにのくさわるもなしひしよくとはちやわんのたぐい也

物くうけしきを見給へりとびたつばかりふるうもありかくても世にはおはします物なりけりなとくちゝかなしき事ともうれへあへりかたはらいたくていまおはするやうにうちしわぶき給へはそぞやなといひてかうしはなちていれたてまつる風はげしくよひにうれへつる雪かきたれてふりつ

めもあはぬ也

ううたていぎとき夜のさま也あけぬれともはるゝとふりつみてふみわけ」たるあともみえぬ御すまひをふりいでゝ

25オ

ゆかん事あはれにて日さしあがるまでやすらひなしてかうしを御手づから引あけて御びんのしどけなくふくみたるをけうそくにうちかけつゝつくる給ふに御かゝみからくし

きやうだい 唐櫛匣

けかゝげのはこなといつれも男の御具也 まいらせたりお

ひんかき給ふときまいる けんし

とこの御ぐさへほのゝあるをおかしとおほすひめ君をすこしいでゝおかしき空もみ給へつきせぬ御心のへたてこそなと事付てよひ」いだしきこえ給へはさすかに人のいふ事つよくはいなまぬ御心にてとかく引つくるゐてゐざりいて

けんし

給へり見ぬやうにてとのかたをなかめ給へどしりめはたゞならずまづみだけたかくおせながにみえ給をされはよとむねつぶれておほさるさし出てあなかたはとみゆるははなゝりけりたかくのびらかにささのすこしかゞまりてべにを付たるやうにあかしことのほかにうたてありふげん菩薩の御

少青

26オ

のり物とみゆ」色は雪はつかしくさをきまでしろく御ぐしはうちぎにひかれてたまりたるほとたけに七八すんもあまりたらんとみえてかしらつきかみのかゝりなとはめてたき人とみえ給へりひたいはれたりとみゆるになをしもながに大かたおもやうはおとろゝしくなかななるへし

一 くるきは口伝也七ケの一ツ也

きたまへる物をさへいひたつるいと物いひさがなきやうなれどむかし物かたりにも人のしやうそくをこそいひためれうはぎにはふるきのかり」きぬのいとかうばしきを着給

26ウ

古代

よりこだいのゆへづきたる御しやうそくなれどわかき女のよそいとやしやうそくの惣名也 にたるけなき也

官人

御よそひにはにげなくこわゝしき事いとゝもてはやされてひちもちもぎしきくわんなどのねりいでたる心ちすのまつ

りなとに事にいはれ給はすわれさへくちとつる心ちし
あるへしにな給てれいのしゝまをとかくの給へとさすかににがゑみたま
へるけしきいとみくるし

源氏 あさ日さすのきのたるひはとけなから」などてつらゝ

27

のむすほゝるらんととの給へどたゝむゝとうちわらひて口を
そげなりいとをしきていそきいで給ふせんさいははるゝ

とふりつもりて松の雪のみあたゝかけなり橘の木の雪にう
つもれたるをすいじんめしてはらはさせ給ふに松の葉のう
らやみがほにをのれとおきあがりてざとこほれたるも浪こ
すすゑとみゆ 引哥 我か袖は名にたつすゑの松山か波こ
すこゑのこえぬ日はなしと云哥の心也」中門もよろぼひた
りかとのあづかりめし。てたれはおきなのみみしげなるぞ
出来たる雪にあひてしやうそくはすゝけまどゑさむげなる
色ふかくてむすめにやむまこにやはしたなるおうきさのめ
のわらはをぐしたりあやしき物に火をたゞほのかに入て袖
くゝみにもちたりおきな門をあけやらねはよりて引たすく
るさまいとかたくな也

源氏 ふりにけるかしらの雪をみる人も」おとらずぬるゝあ

28

さの袖かなさひしかりつる有さま御かたちのまほならぬを
みあらはし給てのちはいとゝ心くるしくわれよりほかに
たれかみしのばんとおほせばまめやかなる物までつねにた
てまつり給ふ御しやうそくなとはさらにいはずきぬわた
あやともねうはうのためおきなれうまでこまやかにとふ

らひきこえ給ふ

一 としのくれにこのひたちの宮よりけんしの正月ついたち
の御よそひをくたりしたてゝ」ころもばこに入てつゝみ

28

うるはしくてたてまつれ給へり中だて申たりしたゆふの命
ふとりつぎたるをけんしひきこめられなましかはいかにか
よからんの心也

らからまし袖まきほさん人もなき身にとあるは 引哥しら

雪はけふはなふりそろたへの袖まきほさん人もなき身
にと云哥の心也 さてこの御しやうそくにそへて御文あ

りひたちの

おんな君 から衣君か心のつられければたもとはかくぞそぼち

つゝのみそほちたるとはぬれこの御文にけんし」てならひを

29

し給を中たてのみやうふそばめにみれは

源氏 なつかしき色ともなしになにゝこのすゑつむ花を袖に

ふれけんとかきけがし給ふをみやうふそばめにみて御はな
あかきとがめよとおもふにおかしくなりて御返し

命婦 くれなるの一はな心うすくともひたそらくたす名をし

たてずはこの哥ゆへ巻をもおんな君をも末摘花と名付たり

きぬの御返しはやとてなげたまふ みやうふのかたへ」

29

源氏 あはめ夜をへだつるなかの衣手にかさねていとゝ見も

しみよとやけんしむらさきのひめ君のかたへおはしたれは
いとうつくしけにみるたひことにおいまさり給へは心のま

ヨイそたつる事也

ゝにおほしたてんとおほすれいのことくゑかきひになつく
りもろ友にし給とてかみながき女房をゑにかきてはなにべ

にを付てみ給へは絵に書てたにみまうきさましたりそのつ
ゐてに我か御はなにこのべにをかい付て見」給へはけんし

30才

のよき御かほたにみくるしかりけりひめ君さもやしみつか
んとあやうげにおほしたりけんしそのごいをし給てさら
にこそおちねようなき事なりやうちにかにのたまはせん
ずらんとまめやかになりての給へはむらさきいとあさまし
とおほしてみちのくにかみを御すゞりのかめの水にさしぬ
らしてひめ君のごいたまへはへいちうがやうにいろどりそ

平仲

へ給なあかゝらんはくるしからすとはふれ給ふさまいも

ヒ

30ウ

せ」の心ちし給へり とはあにいもうとのやうにみえ給と

30ウ

也 引事むかしへいちうとてゐるこのみのおとこありお
んなに心さしあるよしをいはんとてつねにそらなきをし
けりすゝりのかめに水を入れてぐしたりけるを女心へてこ
のみにすみをすりていれたるを平ちう思もよらでれい
のやうにかほにぬりてきていつはりをいふとき平仲が妻
われにこそつらき心をみすれとも人にすみつくかほの
けしきよとよみたりし也いまにへいちうがそらなきとあ
りすゑつむ花に付合なるへし

このつゐでに二条の院のはしがくしのもこのうはゐはと
くひらくる花にてほをゑみたり 引哥めつらしくほをゑむ
梅の花を」こそわれもおかしとおりてなかわれと云哥の心
也この花のつゐでにも

31才

源氏 くれなるのはなぞあやなくうとまるゝむめのたち枝は

なつかしけれど

以上 十四首

四 紅葉の賀

一 朱雀院の行幸おもしろかべいたひの事なれば女御たち物

度

見たまふまじきをくちおしがりたまふとは 太上天皇こと

し五十にたり給ふとしなればしゆしやく院と云へみゆき
をなしたてまつりて御まへにてみこたちかんたちめ殿上

人みちゝのさいをつくしまひ樂をなしてみせたてまつ

才

り給へきうちならしども」なり四十よりして十年かさな

31ウ

老

るたびにおいをいのりめつらしき事をつくして子かたよ

りおやをもてなし申給ふ也神無月なればこの巻をもみち

の賀と名付たり

太上天皇
一 うへもふちつほの物見給ふましきを物のはえなくおほし

試案

大内也

てしがくをば御前にてせさせ給けり源氏の中將せいがい
はをまひたまふおなしきまひのあしぶみおもちも世にみえ

ぬさま也ゑいなんとし給もこれやほとけの御かれうびんか
のこゑならんときこえて袖うちかへし給ふほどまちとりた

る樂のをとにぎ」はゝしきに中將御かほの色いとゝほひ

けんし

てひかるとみえ給かたてには大とのゝ頭の中將おなしまひ
のあひ舞也これもよのつねの人にはすぐれたるかたちよう

いなれどけんしの中將にたちならひきこえてはたゝはなの

32才

たはらのみ山木とみゆふちつほは御めのとまるにつけても
おほけ
大けなき心のなからましかはとゆめの心ちなし給ける事
はてゝけんしよりふちつほへしのひつゝ御文ありいかゝみ
たまひけんとおほさる」

32ウ

源氏 物おもふにたちまふへくもあらぬ身の袖うちふりし心
しりきや 御返

女御 から人の袖ふる事はとをけれどたち居につけてあはれ
とはみき この哥の心はもろこしのけんそう皇帝やうきひ
に舞をなさせてみせ申給し事をから人の袖ふるとよまれ
たりといふ事もあり又たうの太宗ときこえし御門はまゝ
母をきさきにもち給へりしが身つから舞をなして后に御
覧させ給し也その楽青海はなりと云この説はまさりたり
と心へ侍る

此御返しを源氏み給て人の御門までおほしやれるきさきこ

持経

とはよとほをゑまれて「ちぎやうのやうにひろげて見る給
一、源氏のかさしの紅葉いたふ散過きて御かほのほひにをされたれば
へり御楽の日はしゆしやくるんへ行幸ありてもみちの下に
左大臣御前の菊を折てさしかへ給ふ

33オ

て舞楽あり四十人のかいしろいひしらす吹たてたる物の音
山の松風もまことにみ山下風にことならす楽のこゑつゝみ
のをと。ひゞかすやうくくれかゝる程いり日の影けざや
かなるに青海波のあをうみのなみ かゝやき出たるはそゝろ
さむき心ちす御門をはしめ。てまつりてみこたちかんだち

世を

めみな涙おとし給ふ袖うちかへし」いりあやの舞のほとき
うになる楽のひゝきいひしらすみゆる付合 春宮の女御は神
などはめもこそとゝめ給へとうたてけにのまたひなすをわ
かき女房なとは心うききけり
一 そのころ大内に源ないしのすけとてとしおいたる女房の
いみしく色このみてこのかたはおもからぬありけりなとか
うとしねひゆくまで年比と書もおきなき人のさかりたづをはね
ねひすぐるねび ひとゝのふと云としかけゆくをはねひゆく
人なといふ也 心のみたるらんとやうかはりてゆかしきお
ほ」さるれば物のまひてげり人のもりきかんにげなき事
なればしのひ給ふを女いとつらしとおもひきこえてみつ
申てはまづうらみかくるをなまはゆくおほしけりとはおも
くのあるときこの内侍御けづりくしにまいりたりいつより
事也あるときこの内侍御けづりくしにまいりたりいつより
房はくしをはらいて上らう御ぐしをけづる也 このもしき句心也
もしやうそくかたちはなやかにこのましくみゆうへは御け
づりくしはてゝみうちぎの人めしうでさせ給めるほとに
けんしの君ものすそをひきならし給へり」みうちぎとは
御びんかきてかうふりたてまつる人也むらさきのむもん
のしやうそく大内にづしよりやうにいつもをかるゝ也
書りやうぶんのつかさ也このしやうそくをきて御うちぎ
にまいりてすぐればやがてもとのことくぶんのつかさに

34ウ

34オ

をくをのがしやうぞくを御衣にふれじのためによういある也

さてこのないしかわぼりのえならすゑかきたるをさしかくしてみかへりたるまみいみしくみのべたれどまがはくろみおち入てはづれそゝけたり としよりたる妹也 まみとはめのみやう也

むかしの女はうはあふきを手をはなたずもちて人にたいめんるときもさしかざす也大かた」ひあふき也いまゐるな人のもちゐるをかわぼり也

けんしのもち給へるあふきにさしかへて見給へはこき方に森の木たちをぬりかくしたりかたつかたによしなからぬ手にて ないしので也 (マ) もりの下おいぬれはと書たり

引哥 大あらしの森の下草老ぬれはこまもすさめずかる人もなしと云哥の心也 けんしもりこそ夏のとのたまふ心

は 引哥

ひまもなくしけりにけりな大あらしの森こそ夏のかけはしるけれど云哥の心也 来手なれ句

源内侍 君しこはたなれのこまにかりかはん」さかり過たる下葉なりとも 御返し

源氏 さゝわけて人やとかめんいつとなくこまなつくめるもの

の木かくれわつらはしとおほせらるゝ心は此ないしにはしゆりのかみとていつものきため男ありけりしかれともないしはしのひわぎたえざりけり

けんしの御袖をおよびてひかへて橋ばしらとうらみかけ申心は 引哥 津のくにのながらはしはの橋はしらふりぬる

身こそかなしかりけれど云哥の心也 みかと

うへは御うちきいてゝ御しやうじよりのぞかせ」給てない は

しはけんしのうばにこそとしのほとあらめとわらはせ給し事世の中にきこえてこしうとの頭の中將いまゝてこの内侍を思ひよらざりける事とくやしくていつしかいひよりにけりけんしのつれなき御なくきめにもとうの中將はすぐれたる人なればとないしも心うつしてげり源氏は夢にも中将の事をおもほしよらざりけり 記す もみちの賀のけんじや

うけんしは正三位にあらがり給ふまひのかたての中將は正四位にあがるそのほかのかんだちめ」殿上人けんしのけんじやうゆへによるこひし給へはけんしのさきの世ゆかしき事にいひあへりせいがいほの所の事也 (ママ)

一 夕立してなこりすゝしきよひのまきれに源氏うんめい殿 (マ)

のわたりをたゝずみたりき給へはこのないしびわをひき居たり大内おとこがたの御あそびにもまじりてひく人にてまさる人なき上ず也物うらめしくおもふおりからおもしろくきこゆ内侍うりつくりになりやしなましとうたふ 山しろのこまのわたり のうりつくりといふさいはら なりあつたまもさいはら也

源氏あつまやをうそふきてたちより給つまどをしひらきて来ましませ也 し

きませとうちそへたるもよのつねの女のあひ。らいにはに

ないし たちぬるゝ人しもあらじ東屋にうたてもかゝるあまぞゝきかな

源氏 人づまはあなわつらはしあつまやのまやのあまりのなれしとぞおもふ

あまりなさけなからむも人のほといとをしくてその夜は。

侍のもとにとまり給ぬ中将これを見付たる心ちいとうれし

つねに源氏」のわれはまめくしき人なりとなのり給ふか

ねたきにかやうのしのひ事見付ておりふしのおとしめぐさ

にせんとおもへは夜のふくるを中将はまちゐたりすこしね

いり給らんとおほゆるほとに中将よりくるをけんしはそら

ねふりして世の中おほしみたるく御心なればふときく付給

へり中将とはおほしよらすこの内侍をわ。

たるしゆりのかみとおほせはけんしのないしにむきての御

詞にあなわつら」はしいでなんよくものふるまひはしるか

りつらんを心うくすかし給へるかなとのたまふ心は

我がせこかくへきよひなりさゝかにのくものふる舞かね

てしるしもと云哥の心也夕暮にくもはさがりぬらん男の

来たるはとのたまふ心也

しゆりのかみはおとなくしき人によるなきふるまひして

見付られんをおほせは御しやうそくを取てひやうふのうし

ろにかくれ給ぬるを中将おかしきをねんしてひやうふを

こほくとたゝみよせなとしていみしいかれるすがたに

もて」なしてものをはいはずたちを引ぬくにないしいみし

く心ちまとひてふるうくつとひかへたりかのしゆりのか

みがつねにかやうによせきて心をまとはす事にならひたれ

はけんしをいかやうにもせんとすらんとあさましくてあか

君くむかひて手をする中将おかしきをねんじたりとし

五十七八の女房のゑならぬ廿よのわか人たちの中にたちま

じりてものをちしたるさまいとつきなしかやうにつくろへ

どけんし」はしるく中将と見しり給へはおこになりぬたち

ぬきたる中将のかいなをとらへてけんしいといたくつみ給

へは中将ほころびてわらひぬかくしえぬをほ

しぬきをもたがひにぬがせてひこしるふほとにほろくとし

ほころびたゆれは

中将 つゝむめる名やもりいてんひきかはしかくほころぶる

夜半のたもととは

源氏 かくれなき物としるく夏衣きたるはうすき心とぞみ

るたがひにおびをときしと」けなきすかたになりてみない

で給にけり内侍はいと心つきなくておちとまりたるをびを

つゝみてあしたけんしへたてまつる

源内侍 うらみていふかひそなきたちかさねひきてかへり

し浪のなこりは 中将のもとよりけんしのなをしのはたそ

でをひろひたりとてつゝみてとち付させ給へとてけんしへ

まいらせたり ないしへの御返し

源氏 あらだちし波に心はさはがねどよせ」けるいそをいか

うらみぬ中将のかたへこのをひをかへしにやり給とて

源氏 中たえはかごとやおふとあやうきに花だのをひはとり

てだにみず又たちかへり中将のもとより

御返 君にかく引とられぬるをひなれはからくたえぬる中と

かこたん この哥ともの心はいし川と云さいはら也 石川

のこまうどにをひをとられてからきめをみるいかなるか

そのをひはなだのをひの中はたえてとうたふ也はなだの

をひとふたあひのをひはおとこ上らうの御具也二あひの

色はたてはもよきよこ紅也

一 ふちつほの女御この巻の二月にわか宮うみ給へりまこと

はけんしの御子也御門はゆめにもしろしめさずいみしき御

かしづき御いとをしみかきりなしやんごとなき御はらにい

でおはしたれば人もえおとしめずあかぬ事なしねうごも御

心ひとつにはさおほしたれともかたみに色にいだし給へき

事にあらず御めのとのかの君と王みやうぶばかりこのよし

心へたりけんしの君もおどろ／＼しきゆめをみ給ておほし

あはするに「いちしるき事なればゆかしくの給へとも人め

おとろしければかたみにあはれなる事おほし

源氏 いかにまにむかしむすべるちきりにてこの世にかゝる

中のへたてぞかゝる事こそ心へがたけれどてなき給へはわ

うみやうぶもかなたこなたみたてまつるも心くるしくて

王命婦 みてもおもひみぬはたいかになくくらんこや世の人

のまどふてふやみわか宮の御かほはただけんしをぬきすへ

たるやうにうつくしければは女御は人や見とがめんとあ

いなく」心をまとはし給ふち御門いとうつくしとおほし

41ウ

てけんしにいだき出てみせきこえ給へりそこのみおさな

きほとよりちかくてなれしかはおもひよそへらるゝにやあ

にたる也

らんよくこそおほえたれとおほせらるゝにけんしの御か

ほのいろもかはるらんとおそろしくもかなしくもうれしく

もさま／＼うつる心ちしてなみたもいてくれは申／＼にて

とくまかで給ぬわか御かたにうちふしておほすもむねにあ

まる心ちすれば「御まへのせんさいなにとなくあをみわた

りて心ちよけなる中になてしこのさきいてたるをもらせ給

てみやうぶのもとへかき給事おもひやるへしふちつほへ

源氏 よそへつゝみるに心はなくさまで露けさまざるなてし

この華 花はさかなんとあるは引哥 我やとにまきしなて

しこいつしかに花はさかなんよそへてもみんなといふ哥の

心也 この御文をさきぬへき人のまにやありけんみやう

ふねうこにみせてまつりて御返しだこの華がらにとせ

ちに申せは御心にも物いと「あはれなる程にて御返しあり

藤壺 袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにもなをうとまれぬやま

となてしこいとめつらしくうれしくてなみたおちて御らん

しけり

一つく／＼とふし給へるもいとくるしさまされはむらさ

きのひめ君へふゑをふきつゝさしのそき給へりむらさきあ

りつるなてしこの露にぬれたる心ちしてそびふし給へりこ

ゝにおはしながらけんしのをそくおはしたるかうらめしけ

れはうちそむき給へりけんしはしについ」あてこちやとの
給へともおとろかずいりぬるいそのとある心は 引哥 我
が袖は入ぬるいそのくさなれやみるめすくなくこうらく
のおほきと云哥の心也

けんしあなにくかゝる事ならひ給へりみるめにあくはいと
まさなき事そよとをしへ給ふ心は

引哥 いせのあまのあさな夕なにかづくてふみるめに人を
あくよしもかなと云哥の心也 けんしふえにほそくせり
といふもの名はにくき楽なれとおもしろくふき給にあはせ
てひめ君しやうの琴を引給けり

保祖呂俱勢理ならはし給ふ事也きとてかたきてうし

一 この巻に藤壺きさきにたち給ふこうきてんおほきに御心

朱雀

うごくへし春宮の御はゝにて廿余年になりたまふ女御をを

きてはけにさしこしかたき事なりと世人もことはりきこゆ

藤

れど人がらのやんごとなきにやゆるされ給けんまかて給き

ふちつは

しきなどおろかならんやは源氏の君はいと云井はるかな

る心ちして物いと心ほそし御門の御をきてには「いまのわ

れんせい
か宮をこたみの坊にはとおほせば

44
オ

こたひこのたび也 きさきにたちてはやかてきとにいて
給ふ日数さだまりて大内へまいり給とき后のぎしきこと

ふくさたまりいつかしき軈をあらはし給ふ事也

御はくかたもよはくしては世にたち給はん事おほつか
なければはく女御をたにうごきなきさまにきさきにすへ申

給はくつよりにとおほしをきつるなるへしまいり給ふ夜の

43
オ

43
ウ

御ともにさふらひ給て御こしのうちのみ思やられて后は車に
こしにてま
いり給也
源氏 つきもせぬ心のやみにつくるかな雲井に「人をみるに
つけてもと御心の中におほしつゝけてひとりごちたまふ
以上 十七首

44
ウ

五 花 の 宴

としかへりぬ

一 きさらきの廿日あまりのほとに御門南でんのさくらのゑ

藤

きさき春宮の御つほねびたりみきにしてまう

朱

御門の御左右也

のほりたまふなはしめて記したることく一代に一人なりさるはとに

こうきてんはふちつはにこそれ給ぬれは六あふひの巻に御子のしゆ

雀院の御代にきさきにたち給けりこの比中宮とはふちつはの御事也

日いとよくはれて空のけしき鳥のこゑ心ちよけるにみこ

藤

たちかんだちめみなたいを「さぐりてふみつくり給ふ源氏

さいしやう

の中將春といふもんじたまはれりとのかたまふ御こゑさへ人

にことなりつぎに頭の中將人のめうつしいかととだごなら

ていといたふよういし給へりそのほかはみなおくしがちに

鼻

はなしろめるおほかり中宮は御目のとまるにつけても春宮

こうきてん

の女御のあなかちににくみ給ふらんもあやしく我が又かう

おもふもくちをしくぞかへさびおもふと也へさびおもふと也

春鶯囀

やうくいり日になる程春のうくひすさへつるといふ舞い

とおもしろし源氏の君の御」

桜也

紅葉の賀のおりをおほしいて、春宮御かざしたまはせて
せちにせめ給へはこそその紅葉の賀にけんしせいはいのかれか
たくてたち給て袖かへす所をたゝ一かへし舞給へるに
ものなしひたりの大殿はうらめしさもわすられてなみた
み給へり

藤壺 大かたに花のすかたをみましかは露も心のをかれまし
やはと御心の中也 ひたりの大とのうらめしくおもひ給
ふ事はひめ君のかたへけんしまどをおはしますうらみ也この比
はことにむらさきむかへ給へるをおさなきをはしらてうらみ給
ふ也」

46
オ

つぎにとうの中將いづらをそしとあれはこれがかゝる事も
やとかねて心つかひやしたりけんりうくわゑんといふ舞を
いとおもしろくまひたまへれば御門より御ぞたまはり給て
めつらしきれいとみな人々おもへり 花のゑんの後源氏
の御詞楽人は大やけ事かたむものゝ師をきこしめしいた
しめしたりとあり

一夜にいりて事ともはてゝきさき春宮かへらせ給ぬれはう
への人々もうちやすみて月さしいてぬ源氏の中將ゑい心
ちやたどならざりけんふちつばわたりをわりなくしのひて
うかぐひありき」たまへどかたらふへき戸口もさしてげれ
は 藤つほの王みやうふのつばねの戸ぐち也 なをあらじ

46
ウ

45
ウ

にとはあらはよき事の心也こうきてんのほそ殿にたちより
給へり女御はうへの御殿るにてまうのほり給にけり三の戸
のあきたる三つの戸とよりやをらのほりてみ給へは人はみ
なねたるへしおくのくるゝもあきて人をもせず ほそど
のに一二三の戸あるへし いづれもおとしだてなりけるを
おくのくるゝとはいへりくるゝ木なるへし

けんし
かゝる時に世の人はあやまちもするそかしとうかゝひたち
給へるにうちよりいとわかき女の」こゑのなべての人とは
きこえぬがおほる月夜にしく物そなきと口ずさみてこなた
さまにくる物かけんしいとうれしくて袖をとらへ給つ女あ
なこそろしこはたそとのたまふなにかおそろしきとて

47
オ

源氏 ふかき夜のあはれをしるもいる月のおほろけならぬ契
とぞおもふといふまゝにやをらひだきおろして戸はをした
てたまへり女いとあさましとあきれまといつゝこゝに人
のとわなゝくゝのたまへはけんししろは。人にゆる」さ
れたる身なりめしよせたりともなんでう事か侍らむたゝし
のひてこそとのたまふ御こゑを源氏の君なりときゝしり給
てそすこし女はなくさみ給ふわびしとおもふ物からなさけ
なくこはゝしくはけんしにみえたてまつらじとおもへり
ほそどのにすむ女はうの中に中納言の君と。人のつばねに
その夜はかたらひ給ふこうきてんの女御の御いもうとあま
たおはすれば源氏の御おとうのよめにも一人おはしますこ

47
ウ

じうとの頭の中將」の北のかたにも四の宮なり給へりこれ君イ

48オ

はまだ世なれぬ人なるはいつれにかあらん六の君をはとうおほろ月よ也し

ゆしやく

くうへたてまつらんとてかしつき給ふきこえあるをもしそれならはわつらはしくもあべいかなとおほせどいらうた

女にむきてけんし

くわかやかなれは御心とまりていかにしてたつねきこえんたれともなのりし給へとの給へはうらみたる心にてよめり女うき身世にやがてきえなはたつねてもくさの原をばとは

じとやおもふといふさま又「きかまほしきさましりことはりやきこえたがへたるかなとて

48ウ

源氏 いつれぞと露のやどりをわかんまにこさゝが原に風も

こそふけともいひやらすあけゆけはいと心あはたしくてあふきはかりをたがひにとりかへておきわかれたまふこの

かたみにとも ちがへとも

三重

紅

しるしのあふきはさくらのみゑがさねにてこきかたにかすめる月を書て水にうつしたる心はへあり在明也又その比もあり明なれはこのおんな君をあり明の人とも在明の「君と

49オ

も又臘月夜とも名付たりかのあふきにかき付給ふ

是をしるしのあふきと云

源氏 世にしらぬ心ちこそすれ在明の月の行ゑを空にまがへ

ていかにしていつれとしるへきとふみのたよりもなく思みたれ給ふにやよゑになりてかのおほろ月よのちゝみきの太

こゆみの事也

殿にゆみのけちに人ゝつとへ給てつゐてに藤の花のゑんえしたまふ源氏の君をはうちにて御たいめんのとききこえ給

しかどわたり給はねはくちをしくものゝはへなくお」ほし

49ウ

い蔵人の少將
て御子の頭の中將して申給

右大臣 我かやとの華しなへての色ならはなにかはさらに君

をまたましうちにかさふらひ給ふほとにてやかてかくなんど

御門

御らんせ給へはしたりがほなりやとわらはせ給てわざと使せられたるにはやうものせよとゆるし申給ふ御門の御こと葉におんなみやたおい出る所なれはなのめにはおもふましき也とのたまはす

御門の御むすめ二所とうきてんの御はらなれは御おほちのもとにておいた給ふかの在明その外御むすめおほき事を御門かやうにの給ふ也

50オ

一、七けんのしんでんあたらしくたてゝみかきしつらはれたるにかやうの御かたゝすみき給源氏いたふまたれてたそ

錦

かれもすぐるほどにおはしたりさくらのからのきの御なをしにゑびぞめの御したがさねしりいとながふはしりひきて人ゝはかさねの衣なるにあざればみたるおほきみすが

かたくななるきやう也

たにていつかれいりたまへる御ありさまめもあやにて花のにほひもけをさるれば中ゝ事さましにぞみえけるほとなくそらゑい」をし給てざしきをまぎれたち給てひめみやた

けんし

50ウ

ちのおはしますしんでんのみすを引きてなやましきにいたふしいられてわびにて侍りかしこけれどこの御まへにこそかげにもかくさせ給はめとけんしの御ため御あねもこゝにおはすればかやうに申給へり女房のこゑにてよからぬ人こ

そやことなきゆかりをばかこち侍れなんといふ人／＼のけしきをみ給に袖ぐちこぼれはてゝいまめかしくておくふが(マ)にはみえぬけしき」をふさはしからずとおほさるふちつほわたり(マ)のこよなくおくまり給へるをけんしはまづ思あはせ給ふへしあり明の人はいつかたならんとくるしければけん

51オ

おほろしあふきをとられてからきめをみるとの給心へぬごたちありてあやしうさまかへたるこまうどかなととかめたりかの源ないしのつほねにてをびのつてにいし川といふさいはらありしその心なり はなだのさいはらには石川のこまうどにをひをとられてとこそうたふに「これはあふきとくちすさみ

51ウ

給へはさまかへたるこまうどかなといへり

かやうのいらへをせずして時／＼うちなけくけしきあるかたにけんしよりておしあてに木帳ごしに手をとらへて

源氏 あつさ弓いるさの山にまよふかなほのみし月の影やみゆ

るやとなにゆへにかとの給へはえしのばてぬなるへし

ヒおほろ月よ 心いるかたならませはゆみはりの月なき空にたど

ヒらましやはといふこゑたゝそれなりうれしき物から

以上 八首

52オ

六 葵

朱重くらゐにつき給
一世の中かはりてよろつといと物うくおほさる御身のやんごと
なきそひ給てはけんし大將に けんし かる／＼しき御しのびありきな

とも所せくおほしなりてこゝにもかしこもおほつかなきうらみをのみそへたまふむくゐにやわれにつれなき人の御心をつきせずおほしなけく

52ウ

五花のえんとこの巻の間にあまたの事ありほんにけさ」やかにはかゝぬなりけさやかとはけさはやか也 おうな／＼わきと／＼也 まつ太上天皇おりさせ給て院ときこゆその

しゆしやく位を春宮にゆづり申給へはしゆしやく院の御代也やかて春

宮をさだめ申さるゝ事なればふちつほのきさきの御はらの

冷泉わか宮五歳にて春宮に居給ぬこうきてんの女御御子の御代

のきさきに居給ぬればほんにいま后とあり太后これ也 源

氏大將にাগり給ふ春宮の御代の御うしろみなるへきゆへ

也 御身のやんことなきそふとは是也 太上天皇はおりの御官也院の御ひとつ后はらの春宮にてかくれ給しをば

けいづにせんはうとあり六条のみやす所はその女御也みやす所の御はらにたゝひめみや一人まし／＼けるこのまきよ

先坊

り伊勢のさい宮にたち給ふきこえあり

故春宮也

まことやか六条の御息所の御はらの先坊のひめみやや斎

53オ

くうにたち給しぞかし源氏の御心も」みやす所にはたのもしげなくなり給へはひめみやの伊勢へ下給はんにぐしてみやす所もくたりてつるでにけんしをものはなれきこえはやとおほしよりけり

一 そのころかものさいみんと申すはいまきさいの御はらの女

三の宮也けんしの御あねしゆしや 御おほえ心ことなるひめみや

なれはさいゐんに居給事也すちことになり給をくちをしくおほされけりまつりの

比も大かたの大やけ事にそう事おほくて人がらといふ事はま

ことなりけりとみゆみあれの日つかふまつり給ふかんだちめ

殿上人も心」ことなるかたちをえらばせ給へはえりいでらる

君もつかふまつり給ふ みあれの日といふもみそきの日とい

ふも同事也かものまつりのさきの日也さいゐんと申はこの

ときかざり車といふ物にのりて一てうのおほちをかも川へ

出給事ありその御ともを申給ふ公卿殿上人はむまぐらしや

うそくをとゝのへ給ふなり御殿とは齋院の御とも也

一 大将の君のこけいわたり給ふ事世にもれぬれはくにゝゝよ

りもめこを引ぐしてあやしのものともさへのほりくればまし

てみやこのうちの人ゝはわれもおとらじとくるまのしやう

そくをとゝのへ」きよらをつくしたり所ゝのさじきともさ

けんしの御そ

り袖ぐちものゝ色あいのりざまなんとぞよしありけるひたり

ひふしのほんきたのかた也

クきり也

の大とのゝひめ君は」このごろけんしの御子をたゞならすな

り給へは大やけわたくしよろこひめつらしき事におほして御

いのりともさはきたりなやましげにおはします御なくさみに

とてにはかに御せんなどめくらしおほせ給へは日たけていか

めしきくるまかすゝにて出給へり車のたて所なくてやすら

ふほとに大かたくるまともをさしのけさせて大とのゝくるま

をたてつゞくるみやす所の御ともの人ゝこれはさやうにさ

しいれなんとすべき」くるまにもあらすとくちこはくて手ふ

れさせずいつかたにもはやりかなるわかき御せんどもは御せんと

の人の惣名也 忍いすぎていひしろふほとうたてらうがはしお

車の御せん也となしき人ゝはかくなひそとせいすれどもたちこみたる

さはぎにてきゝいれずその御かたの人もあれはいとをしとみ

れとひたりの大とののうへをすべき人なきころなれはわつら

はしくてしらずがほをぞつくりけるつてに御車さしのけて

たてつゝけたれはみやす所の御」車はながゑをもをしみじき

てしぢなともおれたりければそゝろなる人の車にひきかけて

又なく人わろき事かきりなし大とのゝ人ゝのこと葉に六条

54ウ

のみやす所としりてさはかりにてはいきなせさせせ大将の君

55ウ

をぞかうけにはおほひきこえさすらんなんとなさけなく申た

56ウ

り物もみずして帰りなんとおほせどとをりていつへきみちも

57ウ

なし人だまひの中にをしれられて物もみえず心やましきを

58ウ

ばさる物」にてかゝるやつれをその車としられぬる事をは

59ウ

つかしくくちをしくねたくおほす事かきりなしなみたのこほ

60ウ

るゝを人のみるらんとかたはらいたくおほすにさすか事なり
ぬといへば^{けんし}つらき人の御まへわたりのまたるゝも心よはしや
さゝのくまにてたにあらねばにやつれなきさまにてすぎ給ぬ
るにもみやす所は御心のみぞうごく 引哥

さゝのくまひのくま川にこまとめてしはし水かへ影をたに

みんと云哥の心也^{是をくるまあらそ}
^{ひといふ四月也}

けんしの大将はうちしのひてかよひ給ふ所のくるまをは人し
れず御めにとどめてしりめにほをみ給もあるへし大とのゝ
御くるまはよそめよりいかめしうそれとみゆれはみもやり給
はず御ともの人ゝは心ことにてうちかしこまりてすぐるを
みやす所はをしけたれ給へる御身のほともこよなくおほされ
て

御息所 影をたにみたらし川^ゝのつれなきに身のうきほとぞいと
ゝしらるゝ此とき^ゝの「御心たちまちにものゝけとなりてやか
て大とのゝ姫君はなやみ給ふとほんにありいきす玉とあるはい

はやりかとはへゝ^{しき也}しからてうちかたらひておはせかしとつ
ぶやかれたまふ

一 源氏の大將の君にこの御車の所あらそひとまねびきこゆる
人ありけんしいとくちをしくあたら大とのゝものゝなきけを
くれ給へるによりてつきゝの人かゝる事をせさせたる事と
おほしけりみやす所はよしあるかたのすぐれ給へる物をいか
におほしうんじにけんといとをしきてその夜六条へまうて給
へりさいくうまた六条におは「しますに事つて御たいめん
なししやうじんの事をさ
かきのはゞかりと云けんしことはりとおほせとなぞやか
くかたみにそぼゝしからてうちかたらひておはせかしとつ
ぶやかれたまふ

56 ヲ

57 ヲ

57 ヲ

一 又の日はまつりみにて給はんとて二条の院へおはしたり
今日かみそきの事也

これみつに御車の事おほせ給てむらさきのひめ君のうつくし
けにつくるひいてゝおはするをうちあみてみたてまつり給ふ
君はいざ給へよる友にまつりみんとしたまふ御ぐしの「い
つよりもきよらにみゆるをかきいで給てひさしくそぎ給はざ
めるをけふはよき日ならんかしとてこよみのはかせまいりた
るに時とらせてまづ女ばうわらはへなとかみそぎたりむらさ
きの君の御ぐしをはわれそがんとけんしの給てうたて所せく
もおいゆくかなとてそぎはてゝ^ひちい^ひろといわぬきこえさせ給
を少納言のめ^ヒとはかたしけなしとおもひきこゆ かみそぎ
これ也 四月也

源氏 はかりなきちひろのそのみるふさの「おい行すゑはわ
れのみぞみんときこえ給へは

姫君 ちひろともいかてかいはんきためなくみちくるしほの^ヒ
どけからぬにともに書つておはするさまいとめ。たしむ^ヒ

らさきとひとつ御車にてすたれおろして物見給
一 けふのまつりにもくるまとも所もなくたちこみてかんだち
めの御車たちわつらふによしあるおんなぐるまよりあふきを
さしいたして人をまねきよせてけんしの御くるまこゝにやは
たて「させ給はぬ所さりきこえんと申たりいかなるすぎ物な
らんとおほせど所もよき所なればひきよせ給ぬよしあるあふ
きのつまをおりてかの女ぐるまよりけんしの御車へ

源内侍の介 はかなしや人のかざせるあふひゆへ神のしるしの

58 ヲ

58 ヲ

けふを待けるとおほしいづれはかのとしねびたりし
げんないしの介なりけりあさましくもふりがたくいまめくか
なにくさに

源氏 かさしける心ぞあだにおもほゆるやそうぢ人になべてあ
ふひをつらしとおもひきこえて又申たり かやうの哥ゆへあ
ふひの巻と也

八十氏

源ないし くやしきもかさしけるかな名のみして人のためなる
くさ葉はかりを かきこゆるないしの介の心はたれにかあ
らんけんしの女とのりそひてくるまのすだれもあげ給はね
は心やましくねたましく思て人のかざせるあふひとは申た
りむらさきの姫君のなに心なくおさなうつくしきにねび
すぎたるないしの介の身をくらべてそねみたるはかたはら
いたくなん まつりの日也 これをかものまつりのかざし
あらそひと云付合心へ給へし まつりの日也 車あらそひ
はさきの日也みあれの日ともみそぎの日とも

60オ

一 六条の御息所は伊せへくらんとおほしめしする心もやな
くさむとたちいで給へりしみそぎ川のあらかりしせによろつ
いと物うくおほしなりぬさき

みやす所は はあなちち大殿のひめ君
車あらそひ也

などの事いどむ御心もなかりしを一ふしうかれそめし御たま
しみのしつまりかたきにやいさゝかまじろみ給ふ御ゆめには
大とのゝひめ君とおほしき人の所へゆき給へれはいとときよら
にてあるをうちかなぐりうつゝにもにずたけく「いかきひた
ふる心いできてひきまさぐるにみたまふあな心う身をすてゝ
ヒ

60ウ

59ウ

(ママ) いかにやしけんとおほす所は

引哥 身をすてゝいにやしにけんおもふより外なる物は心なり

けりと云哥の心也 大とのゝひめ君いたくなやみ給へは院よ
墓

りも御いのりの事なとかめしうさはきのゝしる山のさずそ
(ママ)

のほかげんあるかきりだんをたてゝみすほうおこなはるその
しるしにやみやす所の御身けしのかにしみかへりたりあやし
きに御ゆるするまいりみ給事也

どたゝおなしやうなれはみやす所は人のおもふらん事も心う
くすべてつれなき人に心かけきこえしとおほす

一 けんしたまさかにわたり給て又のくれをもたのめて帰り給
へるに大とのゝひめきみいたくわつらひたまふとて御文はか
りありれいのことつけ事とおほせは御返事に

御息所 袖ぬるゝ恋路とかつはしりなからおりたつたごのみつ
からぞうき山の井の水もことはりにとあり 引哥 くやし
くぞくみそめてげるあさければ「袖のみぬるゝ山の井の水と
云哥の心也 くれぬれと御返し又あり おほぞう 大ぞさ
う也

けんしより

61オ

61ウ

源氏 あさみにや人はおりたつ我かかたは身もそぼつまでふか
き恋路とあり

あふひのうへ

一 ひめ君のなやみいみしくかきりのさまにみえ給へはさま
ゝのげんじやともかぢしさはぐ ものゝけいきすだまあま
たいできてなのりする中に人にもさらにうつらずひめ君の御

身にいつもそひたるやうにておりくはむねをせきあけてま

とふわさをし給へはいかさまにおはせんと」おとゞもはくみ

やも御心まとはしたまふいまむまれたまふわか君は源氏のちやくし夕きり也

一 いまたさるへきほとにもあらずとおほすにはかにその御

けしきありてなやみ給ふそのけしきなり、れいの御ものゝけ一つ

さらにうごかずめつらかなりともてなやむさすかにいみしく

せめられて也ものゝけ

でうせられていといたくなきまどゐてすこしゆるべ給へ大將

にきこゆへき事ありとの給へはひめ君身つかけんしの外は

にかきりのさまにもし給へはきこえまほしき事もおほする

にやとてすこし」たちさり給て大將を木帳のもとにいれたて

まつり給へりかぢのそうともこゑやめてどきやうよみたるい

とたうとし大將木帳のうちによりてみたてまつり給へは御は

らはいみしくたかくて御いろはいとくしろく花やかに御ぐし

のながふこちたぎを引ゆいてうちそへたるかくてこそらうた

けになまめかしき事やさしき也まさりてみえ給へ御手けんしをとらへて心うき

めをみせ給かなともものきこえやらずなき給へはれいはいと

わつらはしう」はつかしけなる御まみをたゆげに見あげてう

ちまほりきこえ給ふに涙のおちそひたるいかゝあはれのあさ

からんあまりいたくなき給へは心くるしきおやたちの事をお

ほし又かく御らんするにつけてくちをしくおほさるゝにやと

み給てさりともしげしうはおはせじかくなおほしりそおとゞ

62オ

62ウ

63オ

なれはかくてははて給はじ心つよくおほし」なせときこえし

らせ給へはものゝけいであらずや身のいとくるしきをしはしやめ給

へとてなんかうまいりこんともおもはぬをけに人のたましゐ

はものおもひにはあくがるゝ物なりけりとなつかしけにいひ

て

物のけ なけきわび空にみたるゝわかたまをむすひとゝめよし

たかへのつまとの給ふけんしいとあさましおほしめくらす

にたゝかのみやす所なりけり人のとかくいふをも」よからぬ

人のいひいける事といひけつをめにみすゝ世にはかゝる事

こそありけれとうとましうなりぬかやうにあらはれぬれは御

こゑすこしくしづまりぬるにひまおはするにやとて大宮御ゆ

もてよせ給へるにかきおこされてほとなくむまれ給ぬわか君

にさへおはすれはそのほととぎしきいとにぎはくしくて御心

つくしのなこりなく人ゝの心心ともゆるび給へりしゆほう

は又のべておこない」給へともまつはいとめてたくかひく

しければ山のさすなにくれの僧ともあせをしのごひてまか

でぬひめ君の御心ちまたいとよはくしくみえ給へともさの

みはいかゝ御心もまどはしたまはんわか君タきりの大の御ま

みのうつくしげさをいまよりもてかしつき給事かきりなし院

よりも御はかせ御うぶやしない所くゝのいかめしうはへく

しくなん源氏の君はあさましき事をおほしいつるに世の中な

へて心うくおほさる日かすも」つもれば院にもおほつかなか

63ウ

64オ

64ウ

65オ

り給^{けんし}いりて物なときこえたまふ御いらへもよはげなれどのた

まふむげになき人とみえ給し御ありさまにひきかへつぷく

とのたまひし事をおもひいで給もゆくしくいていまはやうく

さはやかにもてなしてあなたなとへもわたり給へあまりわか

くしくもて「なし給へはかたへはかくもおはするそなと

きこえをきていときよけにひきつくるひていて給をれいな

すひめ君は御めとくめてみいたしてふし給へり秋のつかさめ

しあるへき事により大殿もまいり給へはきんたちもみないた

はりのぞみ給事ありて大との御あ。りはなれ給はぬ比なれ

はこれかれ引つゞきていて給ぬとのうち人すくなしめや

かなるほとにひめ君れいの御むねをせきあげていいたふ

まとゐたまふうちに御せうそこ申ほともなくみえり給ぬ人

地^ちにふしたる躰也
くあしをそらにてみなまかてたまへりちもくの夜なりけれ

ど事やぶれたるやう也いまはさりとともうちたゆみ給へるに

にはかなれは殿のうちの人もにぞあたる所くの御つかひ

いつのまにかとみゆ系図にあふひの上とあり

一もし御ものけのとりいれたるにやとて御枕などもきなか

66 ヲ

がり給はすおいのすゑにわかふさかりの子にうちすてられぬ

る事とはちなきたまふ八月廿日よひのあかつきなれは空のけ

しきもあはれなるにおとどのやみにまとひ給もことほりなり

寺く^イの念仏僧所く^本の御をくりの人く^イなとさはかりひ

ろき野に所もなしいかめしうのく^イしりたるぎしきなれどた

はかなきけふりはかりを御かばねばかかたみにてあかつきふ

かく帰給もれいの事なれと源氏はあまたしもみたまひなれぬ

事にていみしうおほしこがれたり年比などてなをさりのすさ

びにつけてもつらしとおもはれきこえけんつるにはとをだし

く思てうとくはつかしき物におもはれたてまつりけんもいと

くやしければ「ねんしゆいとあはれにし給ふ

源氏 のほりぬるけふりをそれとなかむれはなへて雲井のあは

れなるかなにばめる御ぞたてまつれるにもわれさきだくまし

かはふかくそめ給はましとおほすさへあはれにて

源氏 女男にをくるれはいろふかくきるおと女にをくるれはうすし

67 ヲ

一 かやうの御まきれにいつかたへも御せうそこなし御いみに

こもり給て心ふかくおほしなけくかの「みやす所へはひさし

くをとつれきこえ給はす心うかりし事をおほしいつるにけち

かくてみたてまつらん事はわれなからうたておほえ給へは御

文なともまれくぞきこえたまふならひ給はぬ御ひとりねに

あかしかねたまふ時しもあれやと

引哥 時しもあれや秋やは人のわかるへきさるは夜さむになれ

67 ヲ

るころしもと云哥の心也

こゑすぐれたるかきりえりてさふらはせ給へは夜ふかき念仏
のこゑいとたへかたしあさほらけのいたふ霧わたれるにこき
あをにびの「かみなるふみをあをくてすみそめに 菊のけしき
にたる也」

68ウ

ばめる枝に付てさしをきていにけりつばみつはまずな いまめ
かしくもとみたまふにみやす所の御て也

六条の御息所 人の世をあはれときくも露けきにをくるゝ袖を

おもひこそやれいつよりもいふにかき給てたゝいまの空のけ
しきにみ給へあまりてもありつれなの御とふらひやと心うし
と

の事

さかきのはゞかりもおほしわつらはるれどわざとある御文に

御返しなからんもなさけなければ」

69オ

源氏 とまる身もさえしもおなし露の世に心をさけるほとそは

かなきほのめかし給へる御返事のさまを心のおにゝさればよ
とおほしあはせて心うき御身とおほさるきりつほのみかとよ

り先坊御かくれのゝちさいくうをもおんなみこたちとおなし
やうにおもひきこえ給事なればねうごにまいり給へとねんご

みやす所を

ろにのたまひしをたにあるまじき事におほしはなれたりしに

けんしの事

おもひのほかにかゝしき物おもひをしてつるに「うき名
をながしはてつる事とおぼしなけくさい宮はこの秋さへもん
のつかさにいり給へき也やかて野の宮へうつろひ給へければ
二たびの御はらへの事ともとりかさねていそぎ給ふ
しやうしんや也

69ウ

一 日かすつもるまゝにあはれる事ともかすそひてとしころ

御心さしありし御おもひ人ともをもこの御なけきの中にはさ

やうのなさけにもかけ給はすよるも御とのるにめくりてさふ
らはせ給をあはれるなる御心とみたてまつるならばぬ御「つれ
を心くるしかりて三位の中將つねにまいりつゝまめ事を
もれいのすきゝしき事を御物かたり申てなくさめきこえ
たまふとしころはいとしもなき御心さしとみえ給しをかくれ
給てのちあさからすおほしなけくをみたてまつり給にも中將
はおしくあたらしくおほす時雨うちして物あはれるなる夕暮に
中將はにびいろに衣がへしてこれもうすゝみにあさやかなるさ
まにてまいり給へり君はいますこし」こまやかなる御なをし
にてかうらんにをしゝりてしもかれの前さいなめ給ふほ
と也ひもばかりをさしなをしてあはれるなる空をもう友になか
め給ふあめとやなりにし雲とや成にけんいまはしらすとひと
りごち給ふ
雲となり夕にあめとなる

70オ

中將 あめとなりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたとわきて

70ウ

なかめん

源氏 みし人のあめと成にし雲井さへいと時雨にかきくらす

かなとてなみたくみたまへる御「まみのにはひおんなにてこ
れをみすてゝなくなりなしたましるはかならずとまりなんか
しと中將はいろめきたる心にてうちまほりきこえ給ふ

71オ

一 わか君のなに心なき御ゑみがほのうつくしきをみたまふに
もなにゝしのふのと 引哥むすびをきしかたの子たになかりせは
霜かれの前さいにりんたうなてしこの花やかにささいでたる
をおらせ給てわか君の御めのとさいしやうの君して大みや

御のかたへたてまつり給ふ

源氏 冬かれのまかきにのこるなてしこを」わかれし秋のかた

71ウ

みとそみるふく風に付てたに大宮は木の葉よりけにもろき御なみたましてとりあへさせ給はす

はゞみや いまもみて中／＼袖をくたすかなかきをあれにしや

まと
とのなてしこ
ヒヒ

一 なをいといつれ／＼なれはあさかほのひめ宮のちかたへけふ

けんしの御いとこ也

御

の時雨はさりとて御らんししるらんとて御文あり

源氏 わきてこの暮こそ袖は露けけれ物おもふ秋はあまたへぬ

れとかく袖ひつるなとやありけん」

72オ

引哥 神な月いつも時雨はふりしかどかく袖ひつるおりはなかりき

と云哥の心也御返しに大うち山を思やりきこえなからとは

引哥 しら雲の九重にたつみねなれは大内山と人はいひけりと云哥

の心也 御返し

あさかほ 秋霧にたちをくれぬとき／＼しよりしくる／＼空もいか

／＼とそおもふとありつれななからさるへきふしのあはれをは
すくさす御返しなとあるをけんしも人よりはことなる御心と

おほししるへし

一 あふひのうへの住給し御かたをはわか君の御めのと又人

72ウ

／＼もまかでちらぬをは月比にかはるま」しうなさけ／＼し
くの給御四十九日過ぬればうちへまいり給はんとて御車さし
出て御せんの人／＼つどふほとおりしりかほなる時雨うちし
て女房なともけふにかきる事のやうにゐなみておもひくんし

とあるはくつ

おと／＼こなたにわたりてみをくりきこえて

たり給めるに御すゝりのあたり手ならひちらしたまへるを
ををししほりてみ給をわかき女はうはかなしき中にもなを
むもあるへしさうにもまなにも」かきけかし給へりかしこの
御手やとそらをあをきてなき給ふ天にあふく よそ人にみなし
たてまつらんがおしきなるへし 蛸也

73オ

ゑんあうかわらすさましうしてさうくわをもしふるきふす

まふるきまくらたれと友にかせんと云詩の心あり

ふるきふすまふるき枕たれとともにかとある所に

源氏 なきたまぞいと／＼かなしきねしとこのあくがれがたき心

ならひに又霜の花しげしとある所に

源氏 君なくてちりつもりぬるとこ夏の露うちはらひいく夜ね

ぬらんこの御てならひをは／＼みやにもみせたてまつり給て

73ウ

なき人の事はちきりうすくてかくおやの心をみだらすもかへ

りてつくくおほるを月日もそへて恋しさのたへかたきとこの

に (マ)

大将の君のよその人になり給はん事のくちをしき也二三日も

よそ／＼にまどをにおはせしをだにあかす思きこえしをいか

でながらふへかるらんとこゑもおしますなき給に御まへなる

(マ)

女房もいとかなしくてぎとうちなきたるほとそ／＼さむきゆ

ふへ也」

神な月也

一 大将の君はうちへまいり給て院へまいり給へれはいたふお

とろへにけりしやうじにて日をふるけにやとて御まへにてな

冷泉

にくれと物まいらせたまふ春宮の御かた又中宮へまいり給へ

74オ

れは人くめつらしかりきこゆさ^{けんし}らぬおりたにある御もてな

しいと物おもひしつまり給てゑいまきたまへる御やつれす^{くてん}

がたはなやかなるよりもなまめかしうめてたし人くをも二
条の院にてまちきこえよとのたまひしかはおとこおんなま

う」のぼりつどみていとめてたきにも大との人くのかな^{74ウ}

しとおもへりしけしきおほしいづひめ君はいといつくしけに^紫

ひきつくろひ給てねびとこのほり給へるさまあかぬ所なし木

帳引あけてひさしかりつるほと^七の事きこえ給ふにはぢらひて

うちそばみたまへるほかげの御かたちたゞかの人の御かたち^{ふちつほ}

にたかふ所なくもおい行かなとうれしうみ給ふ木帳のかたひ

らよりはしめて衣がへの御しつらひきよげにせうなこんの^{75オ}

め」のとの心はへいふかひなからす御らんすなにとなき御あ

りきも物うくおほしなりてつれくともりおはしてみやす

所なとへは御文はかりそまいる^{良くしくりや}

神な月^{良くしくりや}

一むらさきの姫君の御ありさまよろつにげなくはあらすらう^{良くしくりや}

うくしきとよむへし^{事時}まぜ給へと見もしらぬ^{事時}

くくしきみえ給へはけしきばみたる。御さまなればいとくち^{事時}

をしくおほさる暮うちへんつきなとしてあそひくらし給ふい^{事時}

つもひと所におはしませは人のけちめみたてまつりわくべき^{事時}

御中にもあらぬをおとこ君はとくおき」給て女君はさらにお^{75ウ}

へおはしますとて御すゝりをみちやうのうちへさし入てわた^{御帳}

り給へりひめ君人まからうしてかしらもたげ給へるに御す^{御帳}

ゝりの中に引むすひたる物ありみ給へは

源氏 あやなくもへたてげるかな夜をかさねさすかになれし中

の衣をとかきすさひ」たまへるやう也ひめ君いとうとましく^{源氏}

としころかゝる御心ともしらでたのもしき事に思きこえし事^{源氏}

こそあさましき我心なりけれとおほさるひるつかたけんし^{源氏}

の君おはしたれと御すゝりみ給へど御返しもしなしかの御あ^{源氏}

りさまやと日ひとひはかりおはしてさくさめきこえ給へと^{源氏}

ま事にうしとおほして露の御いらへもなしよし／＼さらはみ^{源氏}

たてまつらしなとのたまふ又の夜ぬの子のもちいまいらせた^{源氏}

りけんし」きとみなみおもてに出給てこれ光をめしてこのも^{源氏}

ちいかくかず／＼にはあらであすの夜さりまいらせよこひ^{源氏}

はいま／＼しき日なりとのたまふしろき一色也 これみつた^{源氏}

ゞにはうけたまはらであいきやうのはしめにはけに日ゑりし^{源氏}

てこそきこしめすべかりけれきてもねの子のいくつかまいら^{源氏}

すへきととひ申せは源氏三つがひとつにてもあらんかしとの^{源氏}

たまふ心へはてゝたちぬけんし心どのものゝさまやとおほさ^{源氏}

るき也」これみつさといいでゝ御さらなと手づからといふ^{源氏}

はかりつくりおりけり三ばいといはなせつと^{源氏}

んはある也これをせけんしの三ヶの大事のひとつと云ねの子とはこれみつがりこうなりぬのこもちひのつぎの夜なれはねのこなるへしこれはあなかちひじにあらずいづれもかきつくる事のふんはひじにてなしくてんの事をはたゝ名はかりしる也

さて三ヶの夜く^たてんのもちひをかうこのはこのふたにいとさよらに^ヒしなしてもてまひれりととりつぐ女房はむらさきの御めのと手に「弁の君といふにわたすとしてこれみつがこと葉にたしかに御まくらがみにまいるへきゆわぬの物也あなかしこあだにといふ弁の君あだなる事はまだならはすといふこれみつまことはそのあだもんしいまよりはいませ給へよまじり侍らしといふもてまいりて 木帳のうちへさしいれたり人はしらぬにれいのけんしそよろつにきこえしらせ給らんかしつとめてこのはこのふたをまかてさせ給時にそみな人〳〵心へてさゝめきける

少納言のめとはかはかりおほしやらぬくまなき御心さしかたしけなくてまつうちなきぬさてもうち〳〵にのたまはせよかしかのいかに^{これみつ}おもひつらんとさゝめきあへりかくてのちはあからさまにうちなとにまいり給へるまもおもかけ恋しく一夜もへだてん事はくるしくおほせはいづかたへもをとつれ給はすこもりおはしますにいまくらの心くるしうて
引哥 わかくさのにいたまくらをあけそめて夜をやへたてんにくからなくにと云哥の心也

78オ

77ウ

大かた男女はしめてあひみる三ヶ夜にあたる時はゆわぬ」てもちひをたてまつる事也みかの夜のもちひといいり二条のきさき春宮へまいり給へりしみかのもちひにはしろかねのつるにこかねのはしをくはへさせてもちひの御ついかさねにすへたり但このつるはしなとはよのつねの人にあらにてはなすいふんにいわぬさらけそくなどつけつこうする也けそくとはかけばんなどのわらひ手也わらひ手ある物をけそくといへり

一 みかのもちひに所あらはして云付合あるへし四日のあしたをいふさるへき人をは御所あらはしと云す〳〵をはところあらはしと也もちひましき女をはもちひよりさきにうとむとも云さるほとによその人にしらする事も三日すぎて也このもちひをいはへば女をもちひる事あらはるゝ也

一 かなたこなたよりうらみおとろかしけんしを申給へとも世の中さためなければとかこ付ていつかたへもうとくてこもり居給へりこのひめ君をはいまつてたれとも世の人のしらぬを人げなくおほさるれば御ち〳〵せんていのしきふ卿の宮にしらせたてまつらんとおほして御もぎの事おほしいそぐ御よういなべてならず 裳着也

一 男女ともにはかまをは三歳にてきたまふもといふはから裳也これはおとなしくなりて「ちやくしたまふ也こしゆいの人をはいはるもてなす也むらさきのうへのからもをは御ち〳〵しきふ卿のみやにこしをいはせたとまつらんと也
源氏はかやうにたくひなく御心さしあれとむらさきはなれ

79ウ

79オ

78ウ

はまさらぬ御けしき也

引哥 みかりするかりはのをのゝならし葉のなれはまさらで

恋ぞまされると云心也

一 としもかへりぬ大将の君は院へまいり給てそのうち春

宮へまいり給ふさて大とのゝおはしたり大殿もはみやもさ

きくの事」のたまひ出てあたらしきとしもいはずいやめ

物いわる也

におはするにかくさへおはしましたれはこゝいみをえし給は

さりけり大みやの御かたよりつねのことく御しやうそくえな

ヒ

らすしてけんしへたてまつり給へりまいらざらましかはくち

をしくからましとてやかてたてまつりかへ給て しまやうそく

のさほをみぞかけと也

源氏 あまたとし今日あらためし色衣きては涙ぞふる心ちする

御そ

みぞかけに御しやうそくともかけられたれとおんなのなら

はぬこそさうく」しかめれとて御返源氏よりたてまつり給

80 ヲ

し御返し也

大宮 あたらしきとしともいはずふる物はふりぬる人の涙なり

けりけによのつねの事にそあらぬや

以上 廿四首

「 81 ヲ

(第三冊)

光源氏 一部 譚 第三

(表紙題箋) 「

七 櫛

八 花散里

九 須磨

(扉裏)

七 櫛

一 さい宮はこそそのうちにまいり給べかりしをよろつにさはる

うちへの事也

事ありて九月に野の宮にうつろひ給へりゆへある女房なとあ

りければすきくしき殿上人たちはあさ夕の露わけありくを

この比のやくにするとき給て大将の君はことほりそかしゆ

けんし

へはあくまでつき給へるものをもし世の中思あけて御むすめ

キ

につきて伊勢へくたり給なはさうくしくもある」へきかな

1 ヲ

とさすかにおほしけりかきたえ給へるも人のおもはん事なさ

九月七八日

けなければおもほしてたちて野の宮へわたり給御ともに事

ヒ

くしからぬ人五六人にてれの御車もたうちやつしてお

はしませど心に引つくり給へる御よそひえならぬは御

ね

とものすき物ともは身にしみておもふへし御心にもなぞてい

まゝてたちならさざりけんとおほさるへしはるけき野へをわ

けいりたまふよりいと物あはれなり秋の草みな」おとろへて

1 ヲ

イ本秋の花とも あさちか原もかれくゝなるむしの音に松風すごく

吹あはせたりいと物はかなき小柴を大がきにてくる木の鳥居

さすがにかうくしくかんづかさの物ともこゝかしこにうち

しはふきたるも外にはかはりてかみさひたりその響ともきこ

えぬ物の音たえくきこえていとえん也ひたきやかすかにひ

かりて人げすなくしめくとしてこゝに物おもはしき人の

月日やすくし給けんをおほしやるにいと心くるしきたのた

いとおほしきかたにたちかくれて御せうそこきこえたまふみ

やす所はいで居むかひ居いさらになかしくしうこゝの人め

もかたはらいたき心ちし給へどたちなからとたひく大将は

きこえたまふかろくしからぬ御くらゐのほとにたちやすら

はせ給もかたしけなしと人くきこゆけにかけはなれてのた

まはんもたけからね御心にもいま一たびのたいめんはあり

もすべかりけりと思めぐらしてしぶくゝにゐざりいで給へ

るけはひいと心にくしみすのうちのにほひものふかうゑびか

いまはと付はしと云物也

うのかのかほりいてたるほといとえんなりものゝねはみなや

めて心にくきけはひ也 九月七八日也

一 けんしこなたはすのこばかりのゆるされは持りなんやとて

のほり給てみすを引きて月比のつもりをつきくしくのたま

はんもまはゆきほとになりぬる御中なれはさかきをいさか

折てもたまへりけるをみすのうちへさし入てかはらぬ色をし

るべにてこそいがきをもこえ侍りにけれさも心うくときこ

え給へは御いらへに

御息所 神かきはしるしの杉もなき物をいかにまがへておれる
さかきぞ御返

源氏 をとめこがあらとおもへは榊葉のかをなつかしみとめて

こそおれよそにてこそとかくおほしのく事もありけれめつら

しき御たいめんにあはれとおほさるゝ事かきりなし女もいま

はとやうくおほしはなれたる御心うごきてされはよと中

くにおほさる月もいりかたなる空をながめてなをおほしと

まれとうらみきこえさせ給ふこしかたゆくさきおほしつゞ

けてけんし心よはくうちなき給ぬやうく明行空ことさらつく

いてたらん

りあはせたらんやうなり心ぶかきどちの御のかたり中く

事もゆはぬなるへし

源氏 あかつきのわかれはいつも露けきをこは世にしらぬ秋の

空かなといでがてに御手をとらへてやすらひ給へるさまなま

めかし松むしもわかれしりかほなるに御返

御息所 大かたの秋のわかれもかなしきにねなきそへを野へ

の松むし中くにかひなき心ちし給へは明はなるゝほとに出

給ぬる道いと露けし女もなこりあはれにてなかくたまふほの

かなりつる月影の御かたちをみたてまつるわかき女はうなと

はいかはかりのみちにてかかゝる御ありさまをみすゝわか

れたてまつらんとあひなくなみたくみあへりいますこしこま

やかにたひの御しやうそくよりはしめ御でうどなにくれと

いたらぬくまなくたてまつり給へどみやす所はなにともおほ

されずあはくしく心うきなをのみなかつてとほとちかくな

るまゝにおきふしおほしなけくさいくうのひめ宮へさかきに
ゆふつけてけんしより御文ありかけばくもかしこき御まへに
とありなる神だにこそとある心は

引哥 あまの原ふみとゞろかしなる神もおもふ中をはさくる
物かはと云哥の心也御文には

源氏 八しまるる国つみ神も心あらはあかぬわかれの中をこと
わ伊 別 当
はれ御返女へつたうにかゝせたまふ

齊宮 くにつかみそらにこととはる中ならはなをさり事をまつや
たゞさんにつかふまつり人とは

一 九月十六日野の宮をたちて伊勢へ下給まづかつら川にてみ
そぎしたまふいまはと付合にし川のはそれよりすぐ大内へ

まいり給へは時の御かと大くくへいであひたまひてわか
い 極 殿
れのくしたてまつり給ふ車にてはなしこし 御息所御こしのし

りに乗給へるに付てもちゝ大じんのきさきの位をえんとねが
ひて先坊へ女御にまいらせたてまつり給しにおもひかけずを

くれ給て世のすゑに」さまかはりてこゝのゑをうちをみたま
九重
ふに物のみあはれにておもひつゝけ給けり

御息所 そのかみを今日はかけじとおもへとも心の中にものぞ
かなしき十六かにて先はうへまいり十九にてをくれたてまつ

り卅にてけふ又大内を御むすめの斎宮にくして参て見給けり
一 さいくうは十四にそなり給へる御かたちとめてたくすく

れておはしますにうるはしきしたて給へれはかきりなくみえ

給ふを御門御心うごきてわかれのくしたてまつりたまふほと
御門
しほたれさせ給けり

うるはしくしたて給ふとは 天冠
のかたちをとゝのへ給し也 てんぐわんなときてしんちよ

さるの時うちへまいり給へり院の御門も御心よせことなれば
大かたのさいくうのぎしきなどにはまさりて物見車もおほし

長 奉 送使
ちやうぶそうしなともつねのかんたちめにはあらず心ことな
るをえらばせ給へり八しやうにたてつゞけたるいたし車とも

袖口とゝのへたり 省
ちやうぶそうしとはいにしへなりひらなとかくたりしてう
のつかひかりのつかひなといふ事は是也 わかれの櫛は口

伝あり
一 出し車とは治部卿民部卿等の八卿より一車つゝ斎宮の御
ともにいだしたつくるるま也みなおんなをのするゆへ袖ぐ

ちのいろあひを付合なにもあるへし
くるゝほとに内裏をいてゝとうみんにしさまにおれた

一 まふほと二条の院はかたはらなればさかきにさして
けんしの御家
源氏 ふりすてゝけふはゆくともすゝか川やせの波に袖はぬ

れじを御返しくれにければ又の日せきのあなたよりそきこえ
たまふ

御息所 すゝか川やせの波にぬれゝも伊勢までたれかおも
ひおこせんことそぎてかき給へるしもすくれてみゆる御手を

けんしの御心にあはれるけしきをすこしそへたら」ましか
はとおぼすつれ／＼となめ給て霧いたふふりたるあしたひ
とりごちたまふ

源氏 ゆくかたをなかもやらんこの秋はあふさか山にきりな
へたてそ

一 院の御門春の比より御なやみありしが神無月となりては
いとおもくおはしますあめか下におしきこゆる事かきりな
朱塗

し御門もなけきおほしめして行幸ありよはき御心にもうれし
くたのもしくみたてまつり給てさま／＼の御ゆいこんともあ
冷泉 ふちつほのわか宮也

り春宮の御事かならず位をゆつり給へ」きさまに御ゆいこん
あり つぎに源氏の君の御事侍りし世にかはらず大小の事に
付てのたまひあはせ給へしかならず世をたもつへきさうある
人なりさるによりわつらはしき^さにみこにもなさずたゞ人にて
大やけの御うしろみをせさせんとおもひ侍るその心たかへさ
せ給ふなと御ゆいごんあり御門いとかなしとおぼしてさらに
たがへきこゆましきよし申給ふ

わたくしに記すこのときの御ゆいこんをこうきてんの大后の御そ
せうにより御かと心ならずやふり給しによりみの日の「はらへよ
りいかめしき雨風ありし時太上天皇けんしの御ゆめにみえてつゝ
にこの御ゆいこんをとをし給し也

一 春宮は日をかへてわたらせ給へりいとおさくなく心に心もな
くてひさしきほと御たいめんをめつらしとおぼしたるさま

あはれにうしろめたふおぼさる世をたち給へき事の給へと

なにかひもなし^{おさなき御き} 中宮はなみたにしつみ給へる
をかなしとみたまふ

一 大将の君にも大やけの御うしろみつかふまつり給へきした
かたをしへきこえ給そのうちおとろ／＼しき御なやみにもあ
らてかくれさせ給ぬ

一 世の中のまつり事御門の御おほちにてみきの大殿し給ふい
ときうにのどめたる所なきおとどなれはその御ま／＼になりな
んよの中をかんたちめなともなけき給ふ

一 中宮大将殿などはまして物もおほえたまはす大さききの御
心もしり給へはわかま／＼にはからひ給へき世のすみうから
ん事をおほすよりもとし月の御なこりたとへんかたなし御あ
との事けうじ仕給事もよのみこたちにすくれ給へりこと」は
りと世人もあはれがりきこゆ藤の御たもとにやつれ給へるし
もなまめかしきさまざり給へり

一 御四十九日までは女御みやす所みな院につどひ給しを過ぬ
れはわれ／＼の御すみかにちりわたり給ふほとあはれるなる事
おほかり中宮は三条の宮にうつり給ふへければその御むかへ
に御あにのせんでいのひやうふ卿の宮まいり給へりのちにし
きふ卿院の内やう／＼人げすくなくなりゆく大将の君も御む
かへにまいり給へり御まへの五ようの「雪にみなしほれて下
葉すこし散ぬるをせんでいのむらさき

十二月廿日 兵部卿の宮 かげひろみたのみし松やかれにけん下葉ちり行年

の暮かななにはかりの事ならねど大將けんしの御袖いたくぬれておりからあはれ也

大將 さえわたる池のかゝみのさやけきにみなれしかけをみぬ

そかなしきとあまりわか／＼しき御哥とほんにあり

王命婦 とし暮ていはるの水もこほりとち／＼みし人影のあせも行かな

一 ひたりの大殿はこしうとの頭の中將のち、大やけわたくし引かへたる世のありさまにおほしうんじて大やけへちじのへうをかへし申てこもりたまふ 致仕の表

公卿 殿

くきやうてん上人のくらの上下をたな心にはからひしりてこのへうを大やけへより給てそうする事我のまゝにおこ

なふをちじの人といへりこれを大やけへかへし申給へはかうふりをかけてをきて出仕なき也、記して云大唐には出つかふまつるをはちじとはいはずへうをあつからずしてこもるときを致仕するとはいふ也日のもとゝもろこしとはうしろあはせ也

大臣

朱雀

10ヶ

このおとどのかくこもり給へる事を御門いと心／＼もなく故院の御ゆいこんになかき世のおもしとの給し人をかやうになり給へは心ほそくもかなしくもおほしてたひ／＼かへさび給しかとつるにかへし申てこもり給ぬ

一 としかはりぬ世の中しつまりてなにはな／＼しき事も

おほる月よ

朱雀

なかりけりかのありあけの君は御門へまいり給へれともけんしのほそとの事世にもりきこえたればうけはりたるねうご

われはかほ也

御櫓屋

なとはいはせたまはすみくしげ殿にて」さふらひ給けりけん 11オ

しれいの御くせなはしのひ／＼御文なともたえざりけりもとよりのないしの督は院の御なけきにあまになり給しかはそのあとにこのみくしげ殿二月にないしのかみになり給にけり心の中にはうちにさふらひて御門の御おほえもあまたの女御たちにもすくれて時めき給へともた／＼けんしの御事をのみしのひたまふさるほに／＼のひてあひたまひけり院のおはします世こそあれよろづの事」ひきかへて大后の御心 11ヶ
かみのきふきをいちはやくと也
はいちはやくおそろしきにもものゝきこえもあらはいかならんとは思給へともかゝるわりなき事しも御心にとまる御くせにてけんしもいましも御心さしまさるへし

一 五だんのみしゆほうはしめにて大やけはつゝしみおはしますひまをうかゞひてれいのほそどのゝつほねにさいしやうの君心しりにて御たいめんあり 11オ
おほる月よとけ
んしの事也

五だんのみしゆほうあまるをは四ヶ寺よりおこなはるいま 11ヶ
ヒヒヒヒ

一 はうあまるをは醍醐とうじより。しゆほうのほとは御門うごきなくそなたにむきてまつりことあるを」つゝしみおはしますひまとはいへり 12オ
めくるめくるおこなわるゝと也その方

源氏の御ありさまをはつねにみたてまつる人たにめがれぬ事におもふへければましてめつらしきほとなる御たいめんにてなのめなるへき事にそあらぬや女の御さまもけにぞめてたきさかりなるおもりかなるかたはをくれていとなまめかしくみ

まほしきさましてらうたけ也ほとなく明行にやこゝにしもひ

(ママ)

やうへづかきをしへおこしてこゝかしこたどりありきてとら
ひとつとはづくるもわつらはし大將の君は「このわたりに
かくろへたるこんゑづかきそあるへきはらきたなきかたへ」
をしへたるそかしとわつらはしくきゝたまふ

え 12ウ

かたえはしよにん也付合このとのゐ申にあるへしおほろ月よ在明

諸人

なとに付子の時よりはしまるとのゐ申なればひたりよりかんか

へて心へ給へし左右の外近衛ありとらひつとあはすへし

このとのゐ申しに心をつくして

内侍の督 心からかた／＼袖をぬらすかなあくとをしうるこゑ

につけてもとのたまふさまはかなだちておかし

源氏 なけきつゝ我か世はかくてすぎねとやむねのあくへき時

ぞともなく心のとかならず「たちいて給ふにあかつき月夜の

13オ

いたふきりわたれるにしのひてふるまひなし給へともやつれ

承香殿

給しもしるき御ありさま也せうきやうてんの女御の御はらか

頭

らとつの中將といふ人たてじとみのもとにたちかくれてみた

てまつりたり これはけんしの御そんの中將にてはなしひけ

ぐろの大將の弟也ひけくろ今上の御代にはせつしやうし給

後

へりのちのおとと云はひけくろの事也このたてじとみの

もとにてみたる人のちにけんしの御名をもらしたり

女三

けんしの御あねは御ふくなればかものさい院をおり居給へ

りそのかはりに太上天皇の御弟もゝぞの式部卿の宮の御むす

め居給御ひとり」むすめ也けんしはやうより御心にかけ給し

13ウ

かどつるにつれなくいま又かものいつきに給へはけんし
は心よりほかにおほしけり系図にあさかほの齋院とありあさ
かほのいはれは十五のまきにみゆへしけんしの御こと葉にこ
その此比は野の宮のあはれなりしをわかれをおほしなやみ又

ヒ

ことしはかものさいゐんに居給人をくちをしとおほせばあや

お

しうやうの物と神うらめしうなん

ふちつほ 14オ

一 源氏の御心にわりなき事たにしのふるやうもある」を中宮

のいまはのとやかにてましますにもてはなれ給もうらめしく

ていかなるおりにかありけんしのひいりてちかつき申給へり

中宮はいにしへあらざりし事にはあらねど院の御いのちのほ

とはさてもありしをかくれさせ給てのちはいと空もおそろし

く御おこないもこの事により一しほおほしいれたるに大きさ

き

いの御心のいとおそろしければいかさまのきずをもとめても

冷泉

春宮の位をさまだけんとし給なるにいさゝかのあやまりも」

もりたらんはいみしかるへき事也と思はなれ給てつれなくも

てなし給ほとに御心ちいとまどひてはては中宮御むねをなや

み給ふ人／＼おきさはぎ御いのりのそうめせなんとたちこみ

たれば源氏いとわりなしとおほせどいて給はんかたなくてぬ

りこめにをしられ居給へりけんしの御しやうそくかく

しもたる人の心もおそろしつねに御むねはなやみ給へはけん

しへはつげきこえさりけりその日のぬりこめにくらし給ふ」

ヒ

15オ

なをりたる事也

夕つかたおこたり給てひるのおましへ中宮みざりて給へるを御くた物をたにとてはこのふたなとにまいりすへたれど見もいれ給はす世中宮やつきぬらんと心ほそふこそあれとてはし

そばかほ也

のかたをなかめいりておはする御かたわらめをぬりこめよりやをらつたひよりてみたてまつり給ふにむらさきにたがふ所なきにそすこしなくさみたまふその夜もそのまゝとまり給てうしつらしときこえ給へとよろつにのたまひのがれてこ

15ウ

よひもむなしく明にけり又御心ちなやまさしとて王みやうふと弁の君とふたりして色くの事なけきてけんし世夜をかうら

源氏 あふ事のかたきをけふにかきらすはいまいく夜をかうら

みつゝへんとあり

中宮 なかき世のうらみを人にのこしてもかつは心のあたとしらなんけんしはいつくをおもてにてか又はみえたてまつらんと心うければ御文もきこえたまはす御心ちあしとていつかたへもさしこもりて給はねは中宮はとうくうの御ため」をおそろしくひたみちにうしとおもひて世をやさり給はんとあやうくおほす

16オ

一 かゝる事たえずはかはかりうき世にいかなる名かもりいてんと春宮の御ためおそろしければさまをかへてけんしの事をのがれんとおほしたちぬ春宮れんせいにいま一たひかはらぬ御かたちをみえたてまつらんとおほしてしのひて春宮へまいり給へりいとうつくしけにたゝけんしの御かたちとみえ給へは人のめをあやうくおほすに玉のきず」とそ思きこえ給みたてまつら

16ウ

てひきしからんほとにかたちのうたてけにかはりたらんをはいかゝおほさんととひきこえ給へはなに心なくあひしらひ給へはいふかひなくかなしとおほさる

一 大将の君はうらめしさにこもり給へともつれくもなくさ

雲林院

めかたければ秋の野もみがてらうんりんんにまうて給へりなが月十日よひのほとなればもみちやうく色つきて草の華のうらかれわたるけしきいとあはれ也こはくみやす所」の御

17オ

そのおとうと也せうとの律師のはうにて六十巻と云物よみたまふほうもんの心もとなき所くとかせてきゝたまふこほうしはらのさへあ

るかきりめしいてゝろんぎなとせさせてきこしめすもいみしきものおもひのなくさめなりなぞやとおほしたつ事もあるに

は春宮れんせいの御事あはれに又みゆつる人もなき御ありさまを心くるしくみたてまつりたまふ

ふちつほの事

17ウ

一 よろつの事おほしつゝけてもなをうき人」しもそと思いてられたまふをしあけかたの月影にとは 引哥 あまのとををしあけかたの月みれはうき人しもそ恋しかりけると云哥の心也

こほうしはらのあかたてまつるとてかうくとならしつゝ菊の華色くもみちなとおりちらしたるもあはれにかゝるかた

こきうすき

のいとなみはこの世もつれくならすのち世はたたのもしかしさもあちなき事をおもひなやむかなとおほししるに 世

にふれはとあるは 引哥 世にふれはうきこそまされみよしのゝいはのかけみちふみならしてんと云哥の心也

18オ

紫

一 たいのひめ君のいまはとうちたのみ給ふ心はへのあはれなるをおぼすぞほたしなるいかにつれ／＼ならんと思やり給て御ふみこまやかにてたてまつり給ふありぬへしやと心見侍る道なれどつれ／＼もくらしかたくなとかきたまふ見さしたる事ありてやすらひ侍るほといかに

源氏 あさちふの露のやとりに君をゝきてよものあらしぞしつ

ひらさき

18ウ

心なきとある御かへしいとらうたけにかき給て

ひめ君 風ふけはまづそみたるゝ色かはるあさちかすゑにまよ

けんしの

ふさゝかに人しれぬ御心のとかくみたるゝやしるからん色かはるとあるもらうたくみ給

ふさかよふ也

かものあさかはの

一 吹かふ風もちかきほとにてさいるんへ御ふみきこえたまふ

中将の君かもとへはかくたひの空に物おもひにあくかれ侍る

さいあん

神

とあり御まへゝはさかきにゆふ付なとかう／＼しくしなしたてまつれ給へり

源氏 かけばくもかしこけれともそのかみの秋おもほゆる夕だ

すきかなむかしをいまに」なとなれ／＼しけ也

引哥 しつやしつしつのをたまきくり返しむかしをいまにな

すよしもかなと云哥の心也

中将のもとよりはつれ／＼といにしへの事おもひ侍るにもあはれなる事おほくなとれいより心とゝめて書たり御前はゆふのかたはしに

蘊の斎院 そのかみやいかゝはありしゆふたすき心にかけてし

19オ

のふらんゆへとありりんしのいとたうときこゑにて念仏衆生

けんしの御おち也

撰取不捨とうちのへておこないたるもけんしはいとらやまし」けれときてのみおはすへきならねは出たまふいみしきひ

19ウ

かりをおこなひいたしたると仏のめいほくにあやしみのほうしはらまでもよろこひあへりいで給ふとききぬわたおほくあるかきりのおこない人にもこほうしはらそのわたりの山がつま

て物ともたまひたりこのもかのものはふる人も山の木の葉

くてん

にうつもれてみたてまつりてくるしはふるひ 柴なと取あつか

人とも云

ひいやしき山がつおとこをしはふるひ人とはいふといへり」

20オ

一 くらき御くるまにふちの御たもとやつれたるへるさへなま

ま

めかしきまざりみゆくとはるは故院の御一め

さ

ヒ

一 帰り給ふとて山づとにもたせ給へりし紅葉を御前のに御ら

付合

んしくらふれはそめしたる露の心もうちをきかたく又ほとへにけるも人わろきまで覚給へは中宮の御かたへたてまつれ

ふちつほへ

給ふとてわうみやうふのかたへおりよくは御らんせさせたて

まつり給へとありこのもみちを中宮に御らんせさするにいさ

ふみか哥か

むすはれたりける也

20ウ

ゝかなる物ありけりい」のおほさるゝに中宮は御かほの

けんし

いろもうつろひてあたらんのかゝる思やりなき事したまふこそとくるしければかめにさゝせてひさしのはしらのもとへを

付合

しやらせ給ふとあり

付合心へ
給ふへし

これはまたありしまゝ春宮の御かたにおはします時の事也

一 中宮まかてたまふ夜けんし御むかへにまいり給ふとてまづ

朱雀 しゆしやく うちへまいり給へればのとやかにおはしますほとにてれいの

なつかしくすぎふしき事をも又ふみのかたの事をも御物か

たりありてとうくうの御方へわたり給ふ けんしは とうくうのとしより

をそのときでたりしゆしやくの御前にて 21才

頭 弁

一 大きききの御おいにとうのへんといふ人ありこのみちにて

白 虹

けんしに行あひたてまつりてさき花やかにをひちらして過け

り源氏の御車をゝしとどめてたてたるにはつこう日をつらぬ

心あり

一 春宮ははゝみやのいてたまふまではおきるたらんとおほし

たるけしきをあはれにみたてまつり給ふこよひは十五夜なれ

と御あそびもなし月くまなくすみのほりたるに故院の御時の

事おほしいてゝ

中宮より こゝのゑに霧やへたつる雲の上の月をはるかにおも

ひやるかなみやうふしてのたまひ出したりつらさもわすれて

なみたくまれて御返しあり

22才

21才

一 世の中なにとなくわつらはしければおほろ月よの御かたへ

ひさしくをとつれ給はさりけるに時雨すこしけしきだつ日か

の御かたよりいかゝおほしけん御文あり

内侍の督 木からしの吹につけてもまちしまにおほつかなきの

比もへにけりあなかに忍かき給けん心もにくからねは

源氏 あひみずてしのふる比のなみたをもなへての秋のしくれ

とやる心のかよふならは「いかになかつめすゑも物わすれ

し侍らんとこまやかに成にけり

一 冬になりて十一月一日比は故院の御はてにていつくにも

くいと物かなしう雪のしづくにぬれくおこないたまふ中

宮の御かたへ

源氏 わかれにし今日はくれともなき人に行あふ事をいつとた

のまん身つから御返し

藤壺 なからふるほとはうけれとゆきめぐりけふはそのよにあ

ふ心ちして

一 この御いそぎ過て十二月中宮にはいかめしき 御 み八かうあ

りはしめの日はせんでいの御ためつぎの日は御母さききの御

ため又の日は故院の御ため後くわんの日はわが御事をけちく

はんにて御ぐしおろし給ふよしほとけに申たまふかんだちめ

なども大きききの御かたをはばかりなからあまたまいり給へ

り御せうとのひやうふきやうのみや大將の君などは御心うご

くへしまいらたまへる人くも袖ぬらしたまふ事はつるほと

そ 戒いましむる事也 に山のさすまいりて御いむこときつけ申給ふ御おちのよ川

のそうつつかくまいりて御くしおろしたてまつり給ふ世のつ

23才

23才

22才

ねの人たにかきりある事にていとかなしききはなるをまして
かねていろにもいたし給はねは女房なともなきまとひたり

一事しつまり僧ともまかてたるほとに大将の君に御前まいり

給へりみすのうちのにほひ物ふかきくろばうにしみてみやうか
黒方たき物の名也 せうかう也

がうのかほりのえんなるにゑびかうのまがひたるはたとへ
ん」かたなきに月きよふすみのほり池のこほりいとすこきに
をしのうちなきたるはおりからいと物かなしとはかり大将は
物もきこえて給給はすなとかくしもと人のおもふへきをた
めらひてそきこえ給

24オ

源氏 月のすむ雲井をかけてしたふともこの世のやみに猶やま

とはん 御返し

中宮 大かたのうきにつけてもいとへともいつかこの世をそむ

きはつへき大將はむねくるしうてまかて給ぬ

24ウ

一 かやうに世をそむき給は大将の御心もいまたおほしたえね
はさらぬ事をたにきすをもとむる世の中にせきぶにんのみけ
んめのやうにはあらずともかならず人わらへなる事あるへき
世なりとかねておほしまうけてさかりの御ぐしをそぎすてた
まへるなるへしなり給へき

廿七八にそ

ある物に記したり大唐にせきぶにんと云きききありもとよりのき
さきにくみ給て王のかくれ給てのちのせきぶにんをはまなこを
ぬきあしてをたちてうみにしつめたりそのせきぶにんのはらの太
子ありてうわうによいといひしをは人いのこと名付て王のかひた
まひしひつじいのしゝなとの中をひませてをきしなりそのむく
るにもとのきさききまうみねすみと」いふ物になれりとなりなま
こそ是也これをわか身のうへとふちつはおちて御かざりをおとして

25オ

みちにいり給し也

一 としかへりぬ世の中しつかにおほすに大かたはいと花やか

にないえんたうかなときゝ給ふも物のみあはれ也源氏の御方
もおなし事也御門のわたりひまなくつどるし馬くるまいまは
道をよきてみきの大とのへつどめたりかゝるへき事とはおほ

しなからさふらふ人ゝも時にしたがふならひにてうすらぎ
てさふらひにはとのるものゝふくろおきゝなしこのとのる物
の大事の」正月一日源氏中宮の三条の宮へまいり給へり

25ウ

や人ともはかりうちうなたれてことにいそく事なげにたちめ
くるをみ給もひきかへたる世のさが也あをむまばかりぞ引か
へぬ物にて女房なと見ける千人にもかへつべきさまにてけん

一人当千也

けんし

しのふかうたつね給へるをみなあはれにおもふへしまらうと

とんの事也

もうちみめぐらしてとみに物ものたまはすみすのつま木帳の
すき影あをにびにてもりいでたる袖口もくちなしゆるし色」

25オ

源氏 なかめかるあまのすみかとみるからにまづしほたるゝ松

がうらしま御返し

入道の宮 ありし世のなこりたになきうら嶋にたちよる浪のめ

つらしきかな

一 大とのゝ中將はありしにかはらすあそひをもかくもんをも

まいりなれきこえ給ふ夏の雨のとやかにふりたるころくろ木
のはしものとしやうびけしきはかりききて春秋の華もみち
のさかりなるよりもしめやかにおもしろきに中將は」さるへ

26ウ

古集

韻掩

きこしゆうもたせてまいり給ていんふたぎし給ふはかせとも
あまためしたりかんたちめ殿上人もこのかたのすくれたるを
はめしてひたりみきにこまどりにかたわかせ給へりえびすが
け也

難

ふたきもてゆくまゝにかたぎゐんのもんじおほくてはかせと
ものまとふ所／＼をうちのたまへるはこよなき御さへなり
詩の中にゐんのもんじをちいさいしなにてふたぎてしもなる
もんしをもつていひあつるをかつにする也才かくの人はいひあつ
るなり

一 けんし左にてかち給ぬ中將みきにて二日はかり」ありてま

27オ

けわざし給へりおかしげなるひはりごあまたしてかけ物とも
こなたかなたに二なし中將の二らう君ことしはしめてわらは
殿上する八つ九つはかりにてこゑいとおかしくてしやうのふ
ゑふきなとするをけんしうつくしみ給て御ぞぬぎてかつけ給
ふいとこまやかなる御はだつきのうすものゝ御ひとへはかり
をたてまつれるにすぎ給へるはいみじうきよらなり御あそひ
みたれゆくほとにたかきごと云さいばらをいた」してこのわ
らはうたひ給あはまし物をさより葉のとうたふとおめにけん
しの君へ御かはらけまいり給

イ本さゆり花

27ウ

中將 それもかとけさひらけたるはつ華におとらめ君がにそひ

ほ

とそみるときこえ給へはけんしおとろへにたる物をとてらう
かはしくきこしめしなすをとがめいてゝしゐきこえ給ふ

御返し

イ本時ならで

源氏 時しありてけさ咲花は夏の雨にしほれにけらしにほふほ

となくこのときの詩にもやまと哥にもけんしの御事をのみほ
めきこえたれは我が御心もおほしをこりて」ぶんわうの子ぶ

28オ

王のおとうとうちしゆんしてまへる御なこりさへぞめてた

ヒ

きやせいわうのなにかしとかのたまはんとすらんそれはかり

文

やまだ心もとなからんとほんにありぶん王の子は

太上天皇の御
子なる事

武 ぶ王の弟とはいまの御門の御弟と也しゆしやく
の御事也

けんしにてましませはせいわうにてはなきなりそのゆへにそれは
かりといへり

一 おほろ月夜の御かたへたえすいひかはし給ふ事御門もしろ

お

しめしけしきを御らんするをりあれとも心もあらん女はけん
しをはそむくましき」人なりとおほしめしゆるしたるにこの

28ウ

おほろ月よ

まきに右大しんとのゝかたへさといてし給へるにれいの事に

てけんししのひいり給へり雨にはかにふりて神なりなとすれ
は木帳のめくり女房おほくてえいで給はすなりぬしんでん
にはこうきてんの太后おはしませはけはひおそろしかりけり
ちゝおとゝ二条太政
大臣也雨のとぶらひにないしのかみのもとへふ

おほろ月よ

とわたり給へりおんな君いそきいりいて給へるにおもてあ

おとこは
29オ

かみたるを心ちのなをわつらは」しきにやとみ給にふたあひ

かりのをひ也

のをひの御ぞのすそにまつはりて出たるをあやしと御らんす
るにいみしきたたうかみに手ならひなとしたるがき帳のもと
におちたりたうたうも女はもたぬ物也 おとこはいかなる物とも

そと御めもくれまとひてさしおよひてたうかみをとりに給へ
れは左大将のみてなりけんしの御手なりとみしり給へり木帳
のうちにそひふしたるおとこありていまそとかくかほひきか
くすなるおとこきうにものし給ふ人にてすぐにしんでんへ
まいり給て太后にかゝる事とうれへ申給ふもとよりの御にく
さもとりそへてこのつゐてにさるへき事かまへいださんによ
きたよりなりとおほすとぞ

以上 卅三首

八 花 散 里

一 れいけい殿ときこえしはみこたちもおはします院かくれ
させ給しのちはいとかなるさまにておはします御いも
との三の君^{ほんにおと}ときこえしはれいけいでんのうちにさ
ふらひ給しころより大将の君にはかなく見へそめたてまつ

30 才

り給しをれいの御くせなれはわ^すれもはて給はす又わざとあ
る御もてなしにはあらねと中^は人の御心づく^しりなりかし
まとなりてはよろつの事大将の君の御なさけはかりにて御お
と^(ママ)ひと所にすみ給けりさすかにひろき宮のうちとし月に
そへてあれのみまさり心ほそけにてすくし給ふ

一 源氏この比はよろつおほしみたるゝ事のみおほきくざわ

種

30 才

かすおほき也
ひにこの御事をおほしいてゝ在^{六条京極}所ありといへりその所に御お
と^ははすみたまふ

五月雨のはれたるめつらしき雲まにわたり給ことなる御よそ

ゐなくうちへつれ給へり中川のわたりおはしするにさゝや
かなるいゑのこだちよしばめるようなるしやうの琴をあつ
まにしらべあはせたり御みゝとまりてみいれ給へは門ちか
き所なるへし

あつまにしらへあはせたるとはわこんの事也よろつのひき物はも
ろこしよりわたる物なるをわこんはかりをは日のもとにてつくり
たるゆへにやまとことゝ云すなはち和琴也そのうちにて又あ

31 才

づまことゝなつる事はかづさのくによりつくりていたしたる琴な
れはあつまこと(傍記「吾妻琴」)ゝいへり人のくにはしらす日
のもとにはこのわこんをひきものゝおやとしたりとわかなのまき
にありくらる(傍記「名の事也」)は琴ひはなとよりはさがる物
也

人ゝつまとくちにをとなひきこゆ大きなかつらの木のを

かものまつり也

桂

ひ風なまめかしくまつりのころおほしいでゝけはひおかしき
はたゝ一夜見給しあたりなりけり中川に付合に一夜妻あるはこれ
のいおりから郭公二声はかりなきてわたるもおりおかしうも
よほしきこえかほなりこれみついれ給て

源氏 おちかへりえぞしのはれぬ郭公ほのかたらひしやとの
かきねを

一本 通やらぬ

31 才

御返女 ほとゝきすことゝふこゑはそれなからあなおほつかな
さみたれのそらとことさらにたるとみゆれはよしゝうへ
しかきねもとこれみついひいてでけりこの女はへちのおとこに
ちきりたりあなおほつかな
なといふはたどりたること葉なるゆへ心ちあやしくおもひてこれみつ

かやうに引哥 かこはねはよもきのまがき夏くれはうへしか
いへり ど かねのしけりありけりと云心也 ヒ

けんしもさすかにすきかてにて華ちるさとへおはしましたり
おもひしもしるきさひしきにてむかしいまの御物かたりに甘

日の月さ」しいてたり世にしたかふならひなれははかなきむ けんし

かしかりもきかすへき人すくなくなり侍るをましていかに
さひしきもおほしますらんなんとかたりきこえ給ふほとに時

鳥ありつるかきねのにやかはらぬこゑにうちなくしたひきに ヒ

けるよいかにしりてかと口すさみ給ふ心は 引哥いにしへの
事かたらへはほときすいかにしりてかふるこゑになくと

云哥の心也

源氏 橘のかをなつかしみ郭公花ちるさとをたつねてそとふ

御返し

麗けい殿 人めなくあれたるやとはたちはなの花こそきのつ

まとなりけれとはかり

のたまひるさはいへとなつかしうあくまでらうたげにねひに ヒ

たれときこゆにしのつまとには はなちるさと 夜ふけてたちよ の御かた也

り給へりはしちかふ月をなかくておはしけるまゝなからいと

めやすくもてなし給へりめつらしきにそへてけんしの御あり

さまは世にめなれぬ事なればつらさもわすれ給ぬへしなにや

かやとのたまふもおほさぬ事には」あらさるへしとし月をへ

33
オ

つくしになんそれをあひなしとおもふ人はとにかくにかはる
もことはりとおほせはうらみ給事なしありつるかきねもさや
うにてかはりたるなるへし

以上 四首

九 須 磨

一世の中わつらはしき事のみまさればしるてありへてもこれ おほろ月よの事也

よりまさる事もやとおほしはてぬかの須磨はむかしこそ人の
すみか」なともありけいはいと里はなれ心すくてあま 33
ウ

の家たにまれになんなりにたるときゝ給へとも人しけくひた かみしもな

き舞をひたけと也 き舞をひたけと也

ふるさとおほつかなかりなんなと人わろくそおほしみたるゝ

やうとましき物におもひはて給ふ世の中なれどいまはとおほ むらさき

しはなるゝにはすてかたき事おほくなん中にもひめ君のあけ 34
オ

くれにそへておほしなけくさまを見給ふにいと心つくし」に

なんそのほといつまでとかきりあるわかれにもあらでへたゝ

りゆかん事やかてわかるへきかとしてにもやといみしうおほす

引哥かりそめのゆきかひちとそおもひこしやかてわかれのか

どてなりけりと云哥の心也

一 やよひ廿日あまりのほとになんみやこはなれ給ける人にい

まなともしらせ給はすいとかららかにかりそめなるやうにい

てたち給ふ御ともにもむつまじきかきり七八人してしのひや 調度

かに御でうどなとも花やかなる物はさらにぐし給はずきんの

御琴又ぶんしゆうのいりたる」はこ一つをぞもたせさせたまふ二三日かねて夜にまされて大殿へわたり給へり御いとまこひにあふひのちりのかたへわた

あしろ車のうちやふれたるに女のさまして

かくれたる

かくろへいり給へるも夢とのみみゆ事也すまのあしろ車是也都にての

おとゝたいめんし給て故院の御時よりの事かたり出たまひて御袖もえひきはなち給はすあめか下をさかさまになしてもおほしかけざりし事をみたまふるにいのちなかさもつらくなん

あふひの上の事

すき侍りし人をいまにかなしくおもひ侍る」と侍る世ならま

れ

しかはいかはかりおもひなけき侍らましくぞみじかくてか

けんし

る夢をも見侍らざりけると申給ふとある事もかゝる事もさ

きの世のむくひにこそは侍るめはいひもてゆけはたゝ身つからのおこたりになんとおもははげんぎいのくわ（傍記「果」）

くわこのいんをしらんとおもははげんぎいのくわ（傍記「果」）

をみるへしみらいのくわをしらんとおもはは現在のいんをみるへしと云心也

一 夕きりの事もおほやしない也

わか君いとうつくしけにてはしりおはしたりけんしひさしきほとにわすれぬこそあはれなれとて御ひぎにすへ給へるさましのひがたけなり三ゐの中將の中將也

35ウ

御みきまいり給ふ御かたにいり給へはうちあれたる心ちして

あふひのすみ給しかた也

わか君のめのとさらぬ人くもまうのほりつどゐてなに心なきわかき人さへ世のつねなきをおもふになみたにくれたりましていとけなくおはしますよりみなれたてまつる人くはい

といみし中納のこんと君といふ御おもひ人これにありいへはえ

におもへるけしきをけんし人しれすみしり」給てその人ゆへこよひはこれにとゝまり給て人しつまるほとにとりわきかた

らひたまふ 引哥

いへはえにいねはむねにおもはれて心ひとつになく比かなと云哥の心也 この比は位なき人とてむもんのなをしをたてまつりたり

一 あけはなれぬほとにといそぎいて給を大みやはさまかはりたる事とのたまひて心くるしき人のいぎたなきほとしはしも

やすらはせ給はてときこえいたし給へり心くるしきは夕きり也い

源氏 とり辺山もえしけふりもまかふやとあまのしほやくうら

みにそゆく御返しともなく」うちしゆしたまひて御返

大宮 なき人のわかれやいとゝへたゝらんけふりと成しくもゐ

ならては月はあるあけにてひかりおさまれる影げざやかなるに花のちり過ぬる庭のしろきにわつかかなるこすゑのうすくく

二条のあん

らがりたるもおりからにやおかしきほと也殿に帰給へればけ

ひんかしのたい

んしの御かたの人くもあさましと世を思みたれたるけしき

紫の御かた

にてこゝかしこにむれ居たりにしのたいにわたり給へればかうしも」さなかななめあかし給へりとみゆすのこにわらは

37オ

へなとふしていまぞおきさはきているとのあすかたともおかしきを見給もとし月へはかやうの人もありはてずやゆきちら

んとさるましき事さへ御めとまり給ふふす物也いたちも身のこ

しらへも男女ともによるはことなるをとのるすかたといへり

女のさふらひ也

さふらひには御ともなるへき人はわたくしのなこりおしむほとにや人影もなし大はんなどもかたへはちりばみてたゞみ所く引かへしたりみるほとたにかゝりましていかにあれゆかんとおほさる

かやうのいはれにやたゞみのうらをはみぬ事也

そうし

一 源氏七さいの御時よりちゝ御門の御前にさふらひ給て申給

ふ事のならぬはなかりしかはこの御とくにあつからぬ人やは

(ママ)

ありしるまじききはおさめみかはやうまでも御かへりみのしたなりければいまかくおほしくつおるゝをたれかおもひ

なけかぬ人のあらんこのおさめみ川はくてん也 しゆしやく したには大やけ七ヶの内といへり

をそしりうらみ。てまつれと身をすてゝとふらひまいらんにもなにのかひかは」とおもふにやかゝる時にはうらめしき人

38才

おほく世はうき物にもありけるかなと思はれたまふむらさきの御ちゝしきふ卿の宮はつるにけんしのすまへくたりたまふ御とふらひにもわたり給はさりけりまさしくはからひして

38才

なし給しこうきてんの太后などをは申くはつかしけにけんしつかふまつり給しかともこの宮はかりをはおほしめしつめてむらさきの御いもうとのちに冷泉院へまいり給しをも心よ

38才

からすもてなし給てけり

38才

一 源氏

紫

たいのうへに夜るはしかくして夜ふけにしかはなれいのおもはすなるかたにやおほしなしつるかくてあるほと

たに御めかれじとおもふをかゝるきには心くるしき事おほきをひたやごもりにてやつねならぬ世に人にもなさげなき物

紫

と心をかれ侍らんとてなるときこえ給へはかゝる世を見侍るよりほかにおもはすなる事はなにかはとておほしிரたるさま人よりことなり

真隱と書てひたやこもり也なさげなく人にたゆる心地也かくれはつる也いづみしきふか哥に引哥うきによりひたやこもりとおもへともあふみの海は」うちいてゝ見よと云哥の心也

39才

一 日たくるまでおほとのごもりぬるにそつの宮けんしの御おとゝ宮と三位の中將 こしうとの 御ふたりおはしたりけんしのこも也

中將也

(ママ)

り給へる御とふらひなりけりたためんしたまはんきやうたひにより給へるにおもやせたまへる影のわれなからきよらなれ

けんし

はむらさきのうへにこのかげのやうにややせて侍るあはれなるわさかなとの給へはたいのうへなみたをひとめうけてみを

紫

こせるまへいとしのひかたし

た

源氏 身はかくてさすらへめとも君かあたり」さらぬかゝみの

39才

影ははなれじ 御返

わかれてもかけたにとまる物ならはかゝみを見てもなくさ

めてましとてはしらかくれに すまにはしらかくれの そびふして

おほき也

うしろむきてなきたまへるさまなをこゝらみる人の中にたぐひなくもありける人のさまかなとそ源氏まほらせ給ける

さすらへともさすらへともんあるへからす心はとかくさまよひ

なり行心也よきかたへはつかはぬ也すまのかたみのかゝみ是也む

らさきは都にてさらぬかゝみのとの給しおも影をおほしで源氏はあかしよりの文にもかゝみを見てもとのたまひしおもかけはなるゝ時なしとかきてのほせ給しをかたみと云いつれもみやこにての事也

40オ

そつ

一 みこはあはれる御物かたりきこえてくるゝほとに帰らせ給へはこよひも又花ちるさとへおはします物からもうく

花ちるさとの御あねれいけいてんの事也

いたふふかしてわたり給へり女御かくかずまへてたちよりたまへる事とよろこひきこえ給ふずにいるゝ事也 にしのつまとへはふかしてわたり給へり月をなまけてはしちかふおはす

又こゝにて御物かたりのほとにあげがたちかふなりにけりみじか夜のほとやかかはかりのたいめんも又はえしもやとおもふ

(ママ)

こそことなしびにてすくしつるとし月もくやし」けれどのだ

40ウ

まふことなしびことなしぶ同心 三月廿日あまり也
也ことなる事なくての心也 れいの月のいりはつるほとよそ

紅也

へられておんな君のこき御ぞにうつりてげにぬるゝかほなり引哥 あひにあひて物おもふ比の我が袖にやとる月さへぬるゝかは

なると云哥の心也 花ちるさとのおんな君

月影のやどれる袖はせはくともせめても見はやあかぬひかりをなくさめて

源氏 行めくりつゝにすむへき月影のしはしくもらん空ななか

めそかへり給てけふはよろつの事とりしたゝめみしやうみま

御庄

御牧

きの」ふみとも の券也 そのほかの御くらまちなとむらさき

41オ

政所 家司

の御かたへたてまつり給てまところけいしくはへてしろしめすへきさま少納言のめとはかゝしき人なればのたまひあ

づくわか御かたの女房又御おもひ人ともをみにしのたいへそわたし給ふいのちありてこの世に又帰こんをまちまちなんとおもはん人はこなたにさふらへとの給てほとゝに付て物ともくばらせ給ふ華ちるさとわか君の御めのとなにもまめ

41ウ

一 ないしの かん の君へもいみしくしのひて

おほろ ミイ

源氏 あふせなき泪の川にしつみしやなかるゝみをはしめなりけんとおもふこそつみのかれかたかりけれとあり女つゝみ

給へと御袖よりあまるも所せくなん

臘月夜 涙川うかふみなはもきえぬへしなかれてのちのせをも

またずてなくゝみたれかひ給へる御手いとおかしけ也いま
一 たひたいめんもかなとおほすはほだしなれどおほしかへす
いひたてたる人ゝの事也
うきゆかりおほし

42オ

一 こよひはきた山へ故院の御はかおかみたてまつらんとてま

いり給ふあかつきかけて月いつる比なればまつ入道の宮へま

ふちつほの事也

いり給へりみすに木帳そへて身つから御たいめん也心ぶかき
どちの御物かたりはたよろつのあはれまさりけん。し我が身

か けんし

をはなきになしても春宮の御代たにのどけくはときこえ給ぞ

冷泉

ことほりなるや御はかにまいり侍るを御事つてやときこえ給

なみたをかくし給ふ事也

に中宮はいみしくためらひ給ふけしき也

42ウ

入道の宮 みしはなくあるはかひなき世のはてをそむきしかひもなくゝそふる御返

源氏 わかれしにかなしき事はつきにしを又ぞこの世のうきは

まされる月待いてゝそまゐり給ふ御ともにもむつまじきかき

更

りして御馬にておはするさまさらなる事なれどありし世の御
ありきにことなり さらなりとは こと葉にいだせはふたたびに
なる第二の心あるへし

みないとかなしとのみおもふ中にかものまつりくるまあらそひ
ありし時也

御隨

身

右近

のみそぎの日かりのみすいしんにてつかふまつりしうこん

43才

丞 藏人

のせうのくらんどくべきかうぶりもすきにければつかさもと

(ママ)

殿上

(ママ)

けではしたなくてんしやうのみふたけつられぬればつかさの私

いまはと禪僧のざはいのことし すまへ御ともにもまいるうち

にてこよひも御ともなりかものしものみやしろみちよりかれ

とみわたさるゝにふとおもひいでゝおりて御馬のくちをとる

蔵人 引つれてあふひかざしゝそのかみをおもへはつらし賀茂

のみづかきけに人よりも花やかなりし物をとおほしいづ君も

けんし

われも馬なり

おり」給て神にまかり申給ふ

源氏 うき世をはいまそわかるゝとゝまらん名をばたぐすの神

にまかせてとはなうちかみたまへる御さまを物めするわ

かき人にて身にしてみてもふへかめり めでとはふける心也

かもへまゐり給へるにはあらずみちよりみえたる也

一 御はかは草もたかく森の木だちこふかくてありし御おも影

のふと見えたるそゝろさむきほと也よろづの事なくく申給

けんし

43才

へともそのかことはかりもあらはにうけたまはらねはかひな

王位也
しかきり」なき人ときこゆれど世になくなりぬる人ぞいはん

44才

かたなくくちをしき物なりけるれの月のいりはつるほとよ

御身に
そへられて

源氏 なきかけやいかゝみるらんよそへつゝなかむる月も雲か

くれぬるあけはつるほとに帰りいて給ぬ

一 春宮をいまひとたひみてまつり給はぬをよろづのうれへ

冷泉

にまさりておほさる御文をぞたてまつり給ふ御はふちつは

の御かはりに王命婦さふらへはそのつほねへなりけり

給はぬとみ

源氏 いつか又春のみやこの華をみん時うし」なへる山かつに

してとうくうに御らんせさせてちり過るさくら 御返いかゝき

こえさせんとけいすればしはし見ぬたに恋しきにとをくはま

していかにいへかしのたまふ物はかなの御返りやとあは

れにみたてまつるなりたまふ 御返し

王命婦 さきてとくちるはうけれとゆく春の花のみやこをたち

かへりみよ時しあらはときこえてなこりもなきあへり

一 いて給ふあかつきは夜ふかくたびすがたにか」ろらかにい

てたち給てむらさきのなきしつみておはするをすこしいでゝ

見だにをくり給へいかにきこゆへき事おほくのころんとすら

んたまさかに二三日へだゝるたにいふせき心ちする物をとて

みすまきあけて

はしのかたに居給へりむらさきためらひてゐざりいてたまへ

けんし

45才

るが月影にいとおかしけにみえ給へは我が身はかなき世にか

けんし

くてわかれなはいかなるさまにさすらへ給はんとかなしけれ
はさのみかなしけにはきこえなし給はす

45ウ

源氏 いける世のわかれをしらで契つゝいのちを人にかきりけ

るかなはかなしやとことなしびにの給へは

いせんのことし

紫 おしからぬいのちにかへてめのまへのわかれをしはしとゝ

めてしかなげにさそおほすらんといみしうみすてかたけれど
いて給ぬ道すからおも影つとそみて御むねもふたかりながら
御船にたてまつりぬこれまでは

ひ

一 このふねいつくよりともほんになし道のほと「御車なとも

46オ

ことなるさたなし

古句によどよりは舟と都へいひやりてとあるもたゝをしはかりに候
へく候はんにはなにとみえずこのおもてのことし

三月廿日あまり

すま

一 日ながき比にてまださるの時にかのうらにつき給ぬなぎさ
によるなみのかつかへるを見給てもうらやましくもとうちじ
ゆしたまふさる世のふることなれどかなしとのみきゝなされ
て御ともの人ゝあはれなり引哥いとしくすき行かたの窓
しきにうら山しくも帰なみかなと云哥の心也

一 うちかへり見給へはこしかたの山はまことにかすみ」はる

46ウ

かにて三千里のほかの心ちするにかいのしづくもたへがたし
引哥わかうへに露をくくなるあまの川とわたる舟のかひのし
づくかと云哥の心也

源氏 古郷をみねのかすみはへたつれとなかむる空はおなし雲

井かつらからぬ物なくなん

大江殿といひける所は松はかりそしるしなりける

おほえとのに事をよみ給

源氏 から国と名をのこしける人よりも行えもしらぬいゑみを

に

やせんこのおほえとのわたなべのひんかしのきしにありすまより
みえたるやうに記したり

すま

一 おはしますへき所はゆきひらの中納言のもしほたれつゝわ

びけんいゑるちかき所なりうみづら」はやゝいりてあはれに

47オ

すごげなる山の中なり。はしめ見もならひ給はぬさま也

引哥 わくらはにとふ人あらはすまのうらにもしほたれつ

ゝわぶとこたへよと云哥の心也

一 かや屋ともあしふけるらうめく屋なとつろひたてたり

いにしへの御心のすまひならはおかしくもやうかはりておほ
すへき所さま也ちかきみしやうのあつかりともまいりつどゐ

御庄

てかゝる御たひともなく人しけくみゆればはかゝしく物を

ど

ものたまひあはすへき人しまい」らねはあらぬ世の心ちして
いかでとし月をすごさましとおほさるよしきよのあそんむつ
ましきけいしにておほせおこなふもあはれなり

47ウ

けいしとは政所よりもあかる物也いゑづかさきと書たりこれみつか
同はらのおとゝ也御めのと子をみなもとのよしきよと系図にあり
すまにて源少納言とみえたり

一 水やりながしうへ木としわたしてたて石せんさいなと時
のまに見所ありてしなさせ給へりいまとしつまり給ふ御心う

四月也

つゝならずやうくなが雨の比になりて都の事いととおほつ

48オ

所くに見給て御心みたる人おほかり二条の院の君はその

むらさき

まゝにおきもあかり給はねはせうなこんのめのと北山のそ
うつに御いのりの事きこゆたいらかにおはしてもとのことく
都に帰り給ふやうにとふたかたにいのり給付合心へ給へし

一 いでいり給しかた引ならし給し御零より居給しまきはしら

ぬぎすて給し御しやうそく御うつりがなとに付てもいまはと
この世になからん人のやうにおほしこなることほりそかし
せんていのしきふ卿

48ウ

ちゝみやはもとよりおほしもつかず御。はゝにおはすればか
ゝる事につけてもうけはしげにのみのたまふうけはしとはのろ

かきてうけはしきと也

ヒ

すまの事

このたひも御とふらひにたに世のきこえをはばかりてわたり
給はねはむらさきは人のおもふらんもはつかしくおほすいと
けなくよりけんしをおやのやうにならはし給へはにはかにひ
きはなれて慈しくおほすもことはりなりすまよりの御文とも

一 入道の宮の御かたへはかきもやり給はす

49オ

源氏 松嶋やあまのときまやもいかならむ須磨のうら人しほたる

ゝ比

一 ないしのかみの御もとへは中納言のきみと云女房のかたへ
わたくし事のやうにてその中におほろ月よのかたへのふみを
いれたり

源氏 こりすまのうらのみるめもゆかしきにしほやく海士やい
かゝおもはん

一 入道のみやよりもすこしこまやかにて

宮 しほたるゝ事をやくにて松嶋にとしふるあまもなけき

49ウ

をぞつむ

一 ないしのかみの御返りはいの中納言の君のふみの中にい
れてかとのなをしきしぬきた
ひの御ふすま紫より下給

臘月夜 うらにたく海士たにつゝむ恋なれはくゆるけふりよゆ

くかたぞなき中なこんのふみにおほしなけくよいしいひたるに
もけんしは思あはせ給事ありてうちなき給けり

ふはこ
れ也

いまほと付合にす
まのかくし文とい

一 二条の院のたいのうへよりの御返りは

紫 うら人のしほくむ袖にくらべみよ」波路へたつる夜半の

50オ

衣をむらさきへと花ちるさとへはすまよりの哥なし

一 まことやか伊勢のみやす所へも都はなれ給しとき御文あ
りけりそのほかしのひてかよひ給しかたゝへもあはれしら

わさと也

るゝはかり書つくし給へるは見所ありし也伊勢よりもふりは
へすまへ御つかひありすまに伊勢の使とてめつらしく云は是也御

文の詞

うつゝならぬ御たび居うけ給もあけぬ夜の心まどひかとなん
さりともし月はへ給はじと」おもひきこゆるにもつみふか

50ウ

さいくうの(ミセケチ)はつみ也

き身のみこそまだきこえせん事はなるへけれとて「て」
ハ「も」ヨナゾリ訂正

御息所 下伊勢嶋やしほひのかたにあざりてもいふかひなきは

我が身なりけり

又 上うきめかる伊勢をの海士を思やれもしほたるてふ須磨の

うら人物をあはれとおほしけるまゝしろきからのかみを四五

まい巻つづけてかき給へるすみづきふてづかひ見所ありあは

れとおもひきこえし人を一ふしうし」と思し心あやまりにみ

やす所もうんじてわかれ給へるをおほすにいとあはれにおり

からの御文も御使さへむつまじうて二三日すへてかしこの物

かたりせさせてきこしめすわかやかなるさふらひの人なりけ

りかたしけなき御すまゐなれば物とをくもあらでほのかに御

かたちをみたてまつりて泪おとしており御返りかき給ふこと

の葉おもひやるへしかく世をはなるへき身とおもはましかは

おなしくはしたひきこえまし物をとなん御返り

源氏 伊勢人の波のうへこくをふねにもうきめもからてのらま

し物を

又 海士がつむなけきの中にしほたれていつまですまのうらに

なかめん

一 花ちるさともかなしとおほしけるまゝかきつくし給へり

花散里 あれまざる軒のしのふをなかつゝしけくも露のかゝ

る袖かなな雨につるちもくつれてなときゝ給へは京のけい

しのもとへ」おほせつかはしてしゆりせさせたまふ秋にもな

りぬ浪のをと秋風には猶

ひゝきことなり

一 須磨はいとゝ心つくしの秋風に引哥 木の間よりもりくる月の影みれば心つくしの秋はききに

けりと云哥の心也

うみはすこしとをけれどかのゆきひらの中なこん関吹こゆる

と引哥 たび人のたもとすしく成ぬらし関吹こゆる須磨のうら波と云心なり

いひけんうら波よるゝはいとちかうきこえて又なくあはれ

なる物はかゝる所の秋なりけりまくらをそばてゝよものあら

しをきゝ給ふに」波たゝこゝもとにたちくる心ちして泪おつ

ともおほえぬにまくらもうくはかりになりけり御まへに人

もさふらはすみなうちやすみぬるにひとりをさまし給てひ

さしく手ふれ給はぬぎんをふくろよりとうで給てかきならし

給へるがわれなからすごうきこゆれば引さし給て

源氏 恋わひてなくねにまがふうら波はおもふかたより風や吹

らんとうたひ給ふにみな人ゝおとろきてあひなうおきみつ

ゝ」はなをしのひやかにかみわたすおほしなけくありさまを

みたてまつりては心ほそくおもふへきによりひるはなにくれ

とたはふれ事のたまひまきはしておもひなきよしをつくり

たまふ

一 いろゝのかみをつぎてゑをかき給へり山てらにていつぞ

や人ゝのかたりきこえしうみ山のけしきを御めにちかく見

給におよばぬいそがくれなくかきあらはし給へりなよら。な

るからのあやなとかきたまへるひやうぶのおもて」なとい

とめてたし御まへなる人ゝこのごろの上ずにするちえだ

つねのりをめしてつくり絵をつかうまつらせばやと心もとな

がりあへり 千枝常則朱雀の比の絵師也

一 前さいの花色にききみたれたる夕暮に海みやらるゝらう
に出てたゞすみ給へるさまのいふよしなくみえたまふとは月にも華
にもたとへん
かたなき也

しろきあやのなよゝかなる御ぞともしをん色のこまやかなる
御なをしをびしとけなく」うちみたれつゝ御かうふりの御ひ
んぐき御手つきのしろきはくろき御じゆすにはえたりなみた
のおつるをはらひ給へる御てつき也雁のこゑかぢのをとにま
かへり奥より舟のうたひて行も少き鳥とみゆ

源氏 はつ雁は恋しき人のつらなれや旅の空とふ声のかなしき
御かたちのうつくしきをみたてまつればふるさとの女なんと
の恋しき人の心みななくさみにけりあからさまにみやこへい
てんと」おもふ心もなくつと五六人はさふらひけりみな御
ともの人もこゝに侍て

よしきよ かきつらねむかしの事もおもほゆる雁はその世の友
ならねとも 民部の大輔
惟みつ 心からとこよをすてゝなく雁を雲のよそとおもひけ
るかな

前の右近の丞 とこよいてゝうはの空なるかりなれとつらにを
くれぬほとぞなくさむ友まとはしてはいかにせましといふは
いよのかみ也
おやのひたちになりて」くたりけるにもさそはれてまいりた
るをいふなるへししたにはおもひくたくべかめれどうへはつ
れなくさましありく

一 こよひは十五夜なりけりとおほしいつるに殿上の御あそひ

大内にはかならず月

のえんある事也
も恋しく所にになかめ給ふらんかしとおほしやるに月のか
ほのみまほられ給て入道のみやの霧やへたつとありしも恋し

源氏 みるほとぞしはしなくさむめくりあはん月のみやこはは
るかなれともむかしのこよひうへのなつかしう物かたり給し
さまの故院にに給へりしも恋しくて御志のきよいいま」こゝ
にありとうちじゆしていり給ぬよるのおまし」御座」傍記」
源氏 うしとのみひとへに物はおもほえてひたりみきにもめる

引詩

こそのこよひはせいりやうに侍て秋のおもひしへんひとりらはわ
たをたつ御しのぎよる」右記」御衣」いまこゝにありさゝげた
もつて日ごとによきやうをはいす

二千里の外のかじんの心とうちしゆし給

是は三五夜中の新月の色二千里の外の人古人の心と云事也

一 いまほととの付合にすまのつくしのほりとあるはこの人の
事也ださいの大式と云はこの比つくしのたんだいと云事也こ
の秋つくしの任はてゝ」みやこへのほるおんなとは舟にて
のほるほとにすまのわたりをはほかよりもおもしろき事にせ
ゆうらんしたり

めともは舟のうちさへはつかしくて心けしやうしあへり

この大にのむすめ一とせ五節のまひひめにいてたりしを源
氏御おもひ人にて忍にわすれかたき物におもほしたりち
ゝの大にゝくしてつくしへ下てこの時つれてのほる おり
ゝつくしの五節とほんにあるは是也

56 ヲ

源氏の御きんのね波風にひゝきあひて舟のうちへきこえたり
心あるかきりは所のさま人の御ほどもゝねのあはれとりあ
つめてみななきにけり五節はましてつなで引すぐるもくちを
しちゝの大式はみやこよりむかへの人ゝきあつまりたれば
しゆしやく
大やけをはゞかり申てえまいらす子のちくせんの守そとりわ
けんしへ

きけんしの御殿人なれば大式の使に源氏へまいりたりはるか
なるほとよりまかりのほらんにはまついそゝき参て都の御物
かたりもうけ給らんとこそおもひきこえしにかくておはしま
す御やどりをまかり過る事と申させたりけんしみやこはなれ
てのちむかし見し人にもうとくのみなり行にかくたちよりも
のしたる事とのたまふちくせんのかみ御いらへもきこえやら
すなくゝ歸きて御たひ所の御すまひかたるにそつよりはし
めてむかへの人ゝもまがゝしきまでなきみちたり五節は
とかくして御せうそこゝきこえたり
大式の官を
そつと云也

五節 この音に引とめらるゝつなでなはたゆたふ心君しるら

めや心のとまるを
さ
たゆたふと也
ヒ
引歌 いでわれを人なとがめそ大ぶねのゆたのたゆたにものおもふ
比と云哥の心也

けんしなをゑみて御らんすはつかしけ也御返

源氏 心ありてひくてのつなめたゆたはゝうちすぎましや須磨
のうら波いさりせんとはとあり引哥 おもひきやひなのわかれに
りせんとはと云哥の心也
おとろへてあまのたくなはいさ
イ本なはたき

一 むまやのおさにくしとらする人もありけるをまして五節は

おちとまりぬへくなんおほえける
引事天神つくしへ御下の時すま
に一宿あり御やとのおとこ夜も

すからなけかなしみかゝるかしこき御身たにうき事にあひまし
ます事よと申けるをあはれにきこしめして天神あきちやうおとろ
く事なけ(ミセケチ) かれといえ詩をつくり給へり是をむまやの
おさにくしとらすると也くしに少くてんあり

一 冬になりて雪ふりあれていとゝさひしきにおはしますうし
ろの山にけふりの時ゝたつをこれやしほやくとおほさるゝ
に柴といふ物をゝふすふるなりけり

源氏 山かつのいほりにたけるしはゝもこととひこなんこう
るさと人月あかくさしいてゝはかなきたびのおまし所はおく
まてくまなしたゞこれにしにゆくなりとひとりごち給
いくつらぞみなみにさる鴈一へん西におもむく月と云心也

源氏 いつかたの雲路にわれもまよひなん月のみるらん事もは
つかし

一 よしきよにうたうたはせ大輔にふえふかせてあそひたまふ
王照

きんを引すきひ給て。の国にゆきけん女をおほしやりてまし
ていかなるけんこの世に我かおもふ人をさやうにはなちやり
たらんよとおほさるゝに
ヒ

源氏 とも千とりもろこゑになく方かたはひとりねさめの床も
あかつきはイ

たのもしあらん事のやうにゆくゝしくてしものち夢といとい
たふじゆし給ふ 詩
いまゝしき心 霜

胡角 こかく一せい霜の後夢かんきうはん里の月の前思と云心也

一 みやこより御とふらひの御ふみにうたも詩もしけくかよひ

てそれに付ても世の中にめでられ給を后の宮きこしめして大

かうしとはかんだう也

やけにかうしなる人はあきらかなる月日の光をたにみぬもの

けんし

なるをおもしろきゑ居して心をやりてゐ給へる事世の中を

鹿

もどきてかをさして馬といひけんやうにもてひがめたる人

の「かくついせうはするなりとあしき事いできければその、

ちはをとつれ給ふ人もなかりけり

かとり（傍記「香取」）のしやうそくの色は水色のすゝし

なりとあり六位の人着すると云位たかき人もたびにはめさ

るゝ也いこくよりわたりはしめたるしやうそくと云なにさ

まよき事にはもちいぬ物とみゆかとのしらがさねとはへ

いけんをしろうかさぬるといへりわれはしやうくわんの時

也 しかをさして馬なりといふ王位をかるしむるしんかの

ためしに引たり

けんしをつみせらるるではないしのかみをも三月より七月ま

てをしこめ申されたりけんしのにくかりしゆへこそいかめし

きとがめもいでこしか七月にゆるされ給へり御門はもとよ

り「あきからぬ御心さしなれはいつも御まへにさふらはせ給

てよろづにうらみかつはかたらはせたまふ御門の御かたちも

なまめかしきよらにおはしませとも心の中にはけんしの御

ありさまおもひ出給けり

すくれたり

御下の春うへられし木也

としかへりぬうへしわか木の桜もほのかにさきそめて日な

60

60

60

60

60

60

60

60

60

60

60

60

60

60

60

かくつれゝなりきさらきになりて南殿のさくらにはさかりに

なりぬらんと一とせの華のえんおほしいてらるいまの御門の

御事も」恋しくおほす

源氏 いつとなくおほ宮人のこひしきにさくらかさしゝけふも

来にけり二月廿日よひになりていにしとし京をわかれしほと

心つるしけなりし人ゝの事おほしいうちなき給ふおり

く おほし

一 大とのゝとうの中將をはいまはさいしやうの中將ときこゆ

人がらのいとよければ時の人なりされと事にふれてけんしの

御事のみ恋し」ければもしきこえありてつみにあたるともい

かゝはせんとおほしてにはかに須磨へまうて給へりけんしう

ち見たまふよりめつらしくうれしきにもひとつなみたそほ

れける

引哥 うれしきもうきもなみたはひとつにてわかれぬ物は心なりけ

りと云哥の心也

よしあるみやこのつともありわか君の御事なとかたり給ふに

たへかたくおほしたりすまふ給へるさまいはんかたなくから

めいたり所のさまあたり絵にかきたらんやうなるに竹あめる

かきしわたしいしのはし」松のはしらおろそかなる物からな

まめかし物まいれるさまなとも所に付てけうありてしなした

り御さうそくも山かつめきてゆるしいろのきがちなるにあを

にひのなをしさしぬきことさらにいなかびてもてなし給へる

しもみるにゑまれきよらなり暮すぐ六たんぎのはんなどかり

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

61

そめにいなか物にしなしておまし所もたゝあさはかにみいれ

るあさはかとはあ海士ともあさりしてかいつ物もてまいれ

り」名をはまくりとさしたる説候へともたゝ
うみにあつまる物よく候海津物也

62ウ

御まへにめしてうらにとしふれんさまなとはせ給ふにさま

くやすげなき身のうれへをさへづりあへるも心のゆくゑは
おなし事なにかことならんとあはれにきこしめす御ぞぬきて
かつけたまふをいけるかひとおもへり

一夜もすからまとろますふみともつくりあかしてさいひなか

らもものゝきこえをつゝみていそぎ帰給に中くなる事おほ
し御かはらけまいりて」あすかるすこしうたひたまふ
（ミセケ ぬひのかなしびの涙そく春のさかつきのうちと

63オ

もろごゑにすんし給ふに御ともの人くなみたをなかつすをの

くも古郷に心ほそげなる事付ともすへかめりはつかかなるな
こりをしみあへり
はつかはわづ さいはら
かよりも少し あすかるにやとりはすへしか

けもよし身も日もさむしみまくさもありとうたふ也旅宿馬の

付合よきさいはら也

御たひ所

みまやともちかくたてゝみやりなるくらかなにぞなるいねと

いふ物とりいてゝかふもめつらかに」みゆいつか又たいめん
たまはらんと申給ふに

63ウ

源氏 あるしの君とは源氏也
古郷をいつれの春か行てみんうらやましきは帰るかりか

ねそのおり鷹 さいしやうさらにたちいてん心ちせて

中将 あかなくに鷹のとこよをたちわかれ花のみやこの道やま

とはんかしこき御をくりにとてくるこまたてまつりたまふ又
いみしきふえもかたみにし給へとてそへ給へりこのふえこま笛
いみしき笛と（右傍記「ほんに」）あり

64オ

世にありかたきなる御馬のさまなれはいみしくおほされぬへ

けれど風にあたらはいばへぬべければと申給ふ心は

越鳥

ゑつてうなんしにすをくい胡馬はく風にいはうと云詩の心也

あるしの君雲ちかくとひかふたつも空にみよわれははる日の
くもりなき身そ 御返

宰相 たつかなき雲るにひとりねをそなくつばさならへし友を
恋つゝ日さしあかり行は心あはたしくてかへりみかちにて
のほり給ぬ見をくり給ふけしき中くなりなこりかな」しく
てなめおはします

64ウ

一 三月一日いてくるみの日也なまざかしき人の申けるはかや

うにおもふ事まします人はこの日はらへし給へきよし申す京

きすれはおもふ事かなふと也

よりこの国にかよひしけるおんやうじめしてはらへせさせ給

うみつらゆかしくおほしめしてたゝせじやうはかりひきたる
御舟にたてまつりて源氏いてさせ給へりおんやうし事くし

き人かたつくりて舟に乗てながすを御身によそへられて

すまのなで物是也

」

65
オ

源氏 しらすりし大うみの原になかれ来てひとかたにやはもの

はかなしきつらづえつきたまへる御さまさるはれにいでゝは
いとゝいふよしなくみえたまふ

以上四十七首（貼紙同筆）

源氏 やをよろつ神もあはれとおほすらんおかせるつみのそれ

となければとのたまふほとにはかに空かきくれぬ風いかめ
しう吹神なりてひちかき雨とかふりきぬ御はらへをもえしあ
へすたちさはきたりうみの」おもてはふすまを引はりたらん

人くのあしを空也

65
ウ

やうにひかりみちて神のなりひらめく事いはんかたなしから
うしてたどりきてかゝるめはみずもあるかな風なとふけとけ
しきつきてこそあれといひあへり夜にいりて神すこしなりや
みて風そなを夜るもふくおほくたてつる願のちからなるへし
といふ君は御心をしつめてねんすしたまふ人くもうちやす
み君もすこしうちまところみ給へるにそのさまとも」みえぬ物
きてりう神のけ（ママ）滝の姫宮也
なと宮よりめすにはまいる給はぬそとてたと
りありくと見給うみの中のりう王の物めでする物にてみいれ
たるなめりとおほすにいとものむつかしうこのすまひたへか
たくおほしなりぬ

」

66
ウ

（附記）本研究は昭和三十八年度文部省科学助成金（総合）

による成果の一部である。